わが大滝の記録

加筆・訂正版

よしたとえ
なみよ嵐よ
あれもせよ
こゝろなごまん
大滝の名に

小松道栄

（福島市飯坂町中野字大滝）

ま え が き

人は誰でも故郷を離れて、始めて故郷の本当の有難さ、懐かしさを強く感ずるものである。
そして、それは幼な児が慈母を慕う心にも似た純真なものである。

故郷を離れた人は、故郷のちょっとした変化にも大きな関心を寄せる。一時は40数戸、300人に近い人口で賑わった大滝、四季おりおりの想い出が山程もある大滝、今は僅かに数戸を残すのみで、空き家だけが虚しく立ち並んでいる。誰が傷心を禁じ得よう。

僅かに、ここ10数年の間にあまりにも過疎化し果てた故郷、それは或いは大きな時の流れの中の一時的な出来事かも知れない。そして又、ときが廻り来るならば、かつての大滝以上の華やかな時代が再び訪れるかも知れない。又私達はそれを願って止まない。いや、もうその息吹きが始まっているのかも知れない。

しかし、私達は、たとえ今の僅かな空白であるにせよ、 3代、100年を数える大滝の歴史を唯、野草と共に埋づもらせるに偲びず、今に生きる者の勤めとして、未来に続く子孫への語り草として、ここに「わが大滝の記録」の編纂を試みた。

この記録を元に、後日後人の手により更に足らざるを補い、もっと充実した内容のものが世に出される事があれば望外の喜びである。

終りに、地下に眠る我等が先祖の霊に対しても、謹んでこの小冊子を捧げるものである。

昭和52年1月

わが大滝の記録編集委員会

発刊に寄せて

編集委員会事務局から、発刊の辞をと申されましたが、私にはとても重荷と思いました。
……が、縁ふかき、なつかしの大滝なんとも辞退する事に心細さ甚だしく、自信ありげに了承いたした次第です。
今は86歳だが、あの頃(在大滝時代)は35歳血の気もタップリ、どこやら懐かしく勇気一番、しかし筆は鍬よりも重く、主題の百分の一にも値いせぬ不出来と相成る事を申訳けなく存じおわびいたします。

今の人から見ると、馬鹿の骨頂としか見えぬ昔の旅、長着の尻を端折り、股引、脚絆、草靴履き、一里行っては一里塚、十里位で宿に着く。 だが是が又、却って旅の味でもあった。
今は東京(江戸)への日帰りぐらい何んでもない。「旅の恥はかき捨て、又旅の災難」これ亦、今も昔も今後も同じであろう。うき世の味、「味と云う字をよっく味わえると此の世はうんと気軽に暮されるもの、『憂き世』(悲しい悪い世)と書かずに『憂喜世』(悲しい悪い世だが、又一面喜ばしい良き世)などと書いて、あっさりと世に善処すべきです。」

さて、昔の旅、若い娘さんなど着物のすそを端折り赤きうすものを春風になびかせ、頬かむりを軽く歯もて押え、何んとも色っぽくお釈迦様さえ「これはかなわん」と急ぎて顔をそむける。
そんな芳わしい客など時々訪れた大滝の宿、老若男女の客で大滝の夕暮れは何んとも言えぬ賑わい。
高野宮治さん(現孝治さん)宅は宿場旅館であったと聞いています。山村の地味な宿と云うものは派手な町の宿よりも却ってシンミリとした親切さなどもあって心地よいもの。

斯りし大滝、中野一の派手な大滝、それが時の流れには逆らい得ず、炭焼き部落と変り、木炭組合も出来、かなりの繁栄を見せたこともあったが、屋根の上にも雪5尺(約1.5m)と云いたい程の深雪の地とて、出稼人(冬)も多く、次第に村も寂れかかり更に燃料に一大革命出現、炭焼も斜陽となり、さてこれは又、国道の大移転という大変事出来、茲に続々と大滝を離れ他に転出、ああ流転亦うき世の風、「闇に椿の落ちる音」と云った荒涼の大滝とはなった次第、今昔の涙云いつくせません。　只、嗚呼とばかり。

ここに編集員諸氏熱涙をふるい、永に大滝の芳魂を活さねばと奮斗、この記録を完成する真に云いつくせぬ美挙と云うべし。

昭和51年10月吉日

小　松　道　栄

当年86才

（小松道栄先生は大正15年から昭和6年まで大滝分教場において教鞭をとられた。）

発刊に寄せて

百年の歴史を持つ、ふる里の記録が発刊されますことは実に嬉しい事であります。

編集委員の皆様方の絶大なるご尽力によることと深く感謝申しあげます。顧(かえ)りみまするに冬は雪深く交通の便もなき大滝の里、それでも大滝分校がありましたことは倖せでございました。

その昔、私のもとで冬期間お針のお稽古に励まれました大勢の娘さん方の事、全盛時の大滝女子青年会の総会の賑(にぎ)わしさなど、今でも懐かしい思い出でございます。

私こと浅学(せんがく)にもかかわらず、女子青年会長、国防婦人会分会長、女子教員又戦後は大滝婦人会の代表等々を長らく勤めさせていただきましたが、身に余る光栄でありました。これもひとへに大滝の皆様方のご指導、ご鞭撻によるものと深く感謝いたしますとともに、改めて厚く御礼申しあげます。

昭和41年、13号国道が完成して大滝までバスが通うようになり喜んだのも束の間、国道の完成と共に水の引くように大滝の人口が減り、逆に大滝分校は廃止、このとき程落胆した事はありませんでした。

この頃から次第に村人は大滝を去り、現在では8戸を残すのみ、私も昭和49年12月30日　孫の通学のため大滝を去り、今は中野字東森63中野公民館に働きつつ中野小学校に孫を通学させております。

大正7年10月大滝に嫁(か)し60年、思い出多き大滝、ご尽力下さいました皆様方誠に有難うございました。乱筆ながら謹しみてご祝詞といたします。

昭和51年11月吉日

斎藤　　橘(きつ)

当　年　86　歳

（中野小学校大滝分校教諭　　昭和18年4月～昭和21年3月）

目　次

頁
◇ 口 絵(カラー写真) …… 1,2
◇ まえがき …… 3
◇ 発刊に寄せて …… 4,5
◇ 目　次 …… 6,7
◇ 大滝風景写真 …… 8,9
◇ 大滝位置図 …… 10
◇ 大滝略年表 …… 11
◇ 大滝集落図(昭和10年) …… 12
◇ 大滝集落図(昭和50年春) …… 13

第1章　自然環境 …… 14
第2章　沿革 …… 14
第3章　大滝100年のあゆみ …… 16
第1節　明治時代 …… 16
第1　万世大路の建設と明治天皇の行幸 …… 16
第2　宿場街大滝の誕生 …… 16
第3　国鉄奥羽線の開通と宿場街大滝の衰退 …… 19
第4　鉱山ブームと明治時代の教育 …… 20
第2節　大正時代 …… 21
第1　林産業(製炭)への定着 …… 21
第2　インフレと不況の中で …… 22
第3節　昭和時代 …… 23
第1　貧困と自力更生 …… 23
第2　炭焼く煙 …… 26
第3　大滝木炭の品質 …… 26
第4　大滝の養蚕 …… 27
第5　昭和時代の生活行事 …… 28
第6　出征兵士 …… 32
第7　電灯の光 …… 32
第8　木炭増産と食糧難 …… 33
第9　消えかける木炭の火 …… 34
第10　炭俵の変転 …… 35
第11　大滝分教場の変遷 …… 35
第12　村から町へ、市へ …… 36
第13　定期バスの開通 …… 37
第14　栗子ハイウエー …… 37
第15　過疎化 …… 38

第4章　大滝史録 ……39
第1節　史蹟「明治天皇大滝御休所跡」について……39
第2節　名所「大滝不動尊と「大滝名」の由来……40
第3節　想い出(ふるさと夜話・三人一句の会・テレビ共同現聴設備建設秘録)…… 41
第4節　ふるさと讃歌(大滝四季の歌・ふるさと雑詠・短歌集)・……42
第5節　大滝の主なる行政協力団体・文化団体等……50
第6節　大滝分教場(分校)歴代教職員名簿……51
第7節　大滝周辺の主なる動・植物……52

◇あ と が き ……55
◇附録 大滝在住者、出身者名簿 ・住所 （**個人情報保護の観点から掲載を見合わせました**）
◇編集経過について ……56

以下は紺野文英追加分資料

◇附録　昭和３０年中頃の大滝集落図 ……58
◇附録　万世大路バス路線 ……59
◇附録　大平駅・大滝駅の新情報……60
◇附録　明治２２年大平駅住居図……61
◇附録　明治期大滝駅居住者表……62
◇附録　大滝歳時記（昭和３０年代）……63
◇附録　大滝住民が創立に協力した私学校「青葉学園」……66
◇附録　大滝会の足跡……67

山神々社（氏神様）

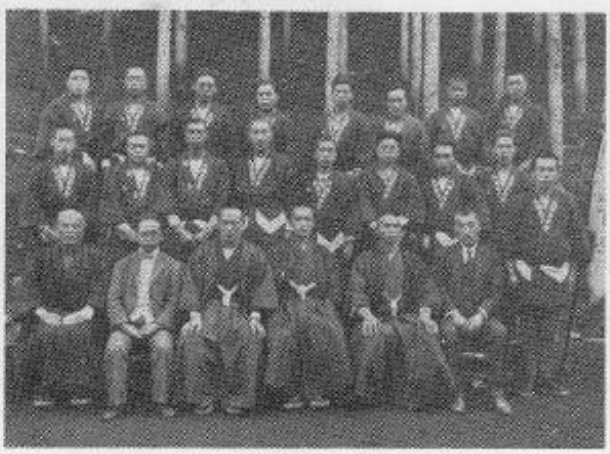
史蹟「明治天皇お休所」跡

空家が立ち並ぶ大滝（大滝橋から）

国道13号線（栗子ハイウエー・
西川橋附近）

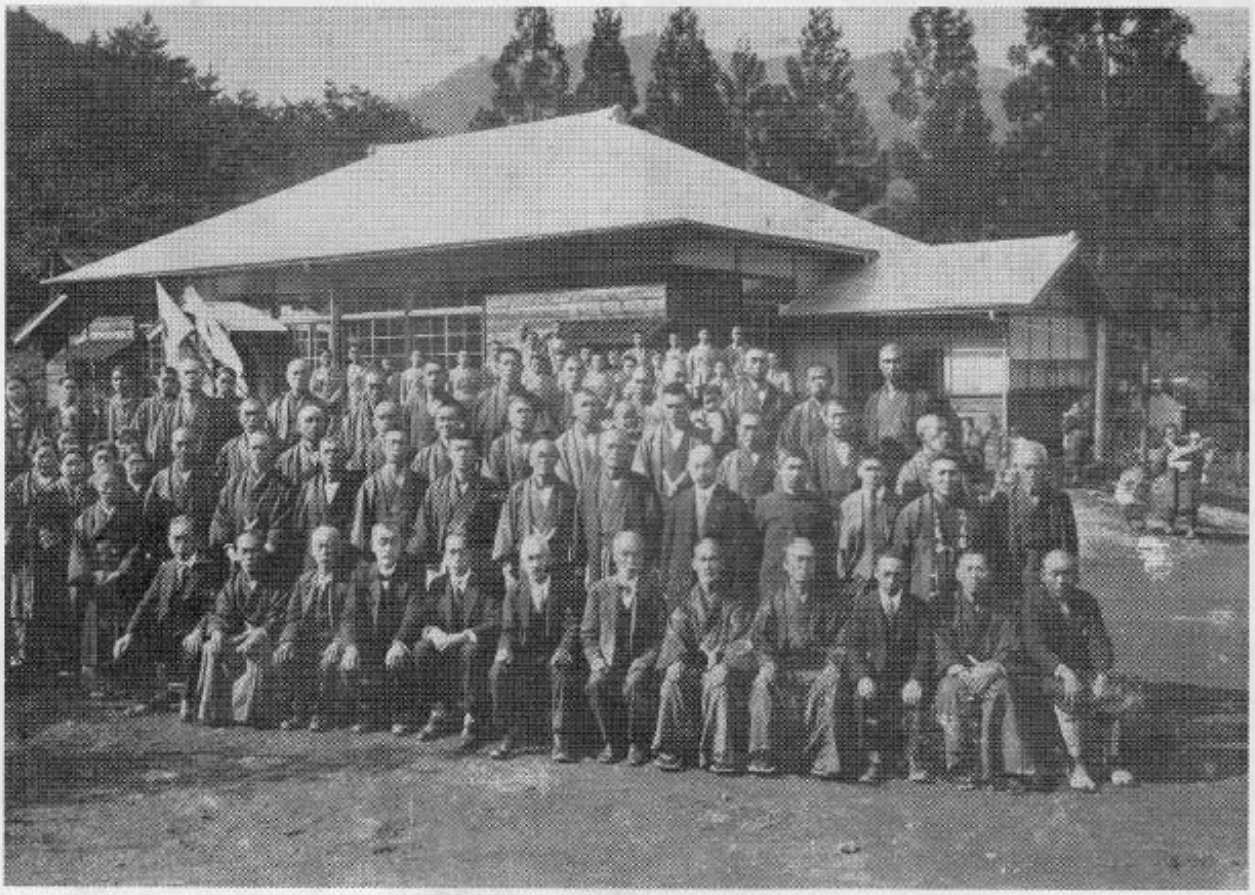
先祖の霊が眠る大滝共同墓地

大滝の象徴西川山を望む



大滝青年会（創立10周年記念・昭和９年）

大滝女子会（創立10周年記念・昭和９年）



大滝分教場改築記念写真（昭和９年10月）

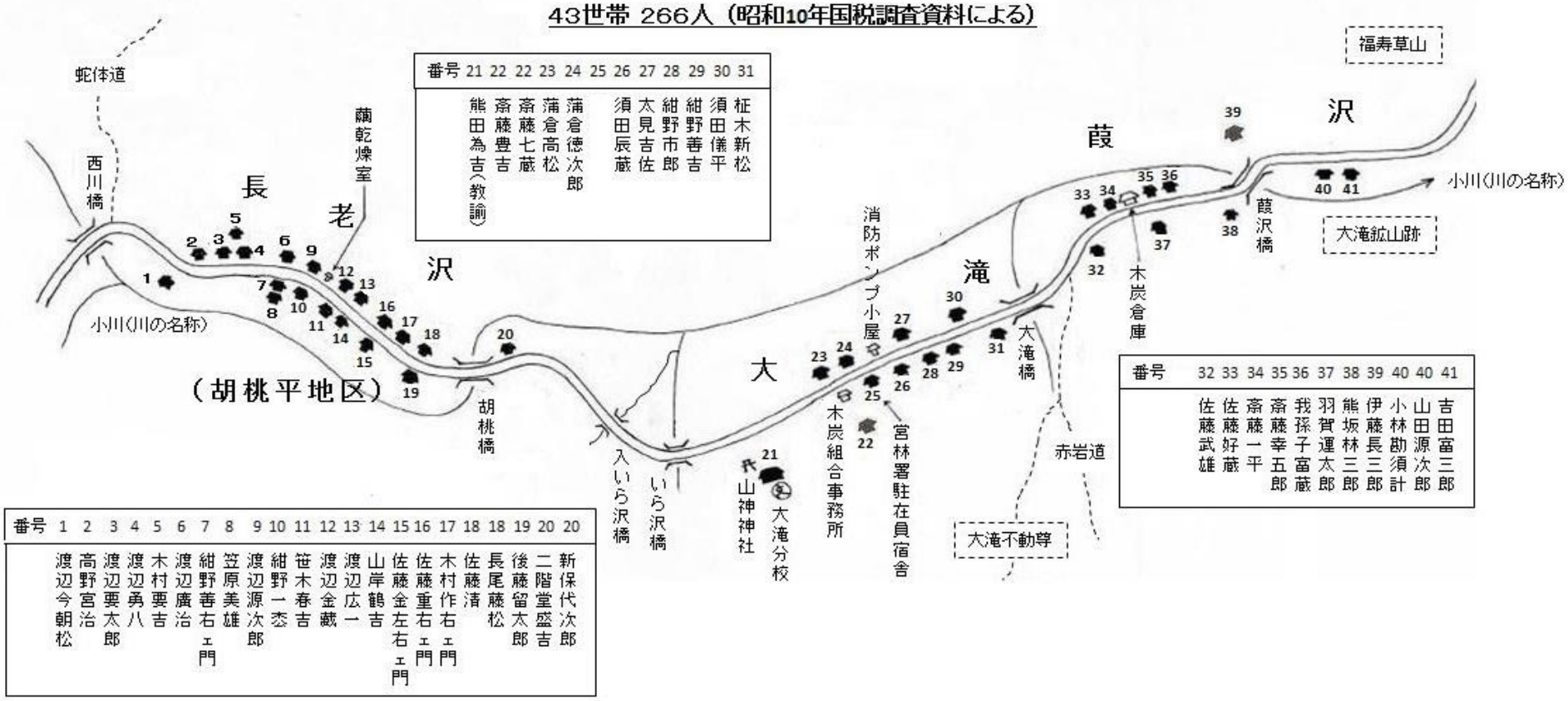
大滝位置図
米沢
国道13号
刈安
川越石
県境
栗子山
栗子隧道
明神峠
西栗子トンネル
鉢盛山
万世大路
二ッ小屋隧道
東栗子トンネル
大滝
杉の平
円部
堀場
飯坂温泉
国道13号
万世大路
信夫山トンネル
福島
成出
ささきの
にわさか
あかいわ
国鉄 奥羽線
いたや
とうげ
おおさわ
せきね
国鉄 奥羽線
国鉄 奥羽線
国鉄 奥羽線
県境

大　滝　略　年　表

年代	年	月	日	記事	附記
明治	10	5		万世大路建設工事始まる	
	14	9		万世大路完成	大滝駅開設・宿場出来る
	14	10	3	明治天皇御巡幸（胡桃平・渡辺要七宅にて御休憩さる）	大滝へ入植始まる
	19			大滝駅移住者に官有地無償貸与さる	
	23	2		大滝に中野小学校大滝分教場開設	世帯数約二八戸
	27	8		日清戦争勃発（三八年四月終結）	
	28			大滝駅入植成功者に官有地無償払下げ（三九三町歩余）	大滝宿場衰退
	32	5		国鉄奥羽線開通（福島ー米沢間）	
	35	8		活動写真現る（東京で初公開）	
	36	6		大滝分教場廃止	
	37	2		日露戦争勃発（三八年九月終結）	
	38	4		大滝分教場再開	
	38	10		大滝分教場再び廃止（杉の平分校へ通学）	
	40			義務教育六年制となる	
	41	1		大滝に冬季季節分教場開設さる	この年大凶作
	43			山神神社社屋建造成る（大滝鉱山発見者　三ツ石三平）	
大正	3	6		第一次世界大戦勃発（七年十一月終結）	鉱山時代
	7	4		大滝季節分教場が常設分教場となる	
	7	8		全国各地で米騒動が起こる	
	12	9	1	関東大震災	
	13	4		福島ー飯坂間に電車開通	大正九年三五世帯・一八六人
	14			大滝女子会設立	三三世帯・一九一人
	14			大滝青年会設立	
昭和	5			負債整理設立	三三世帯・二二五人
	6			製炭組合設立	
	6			納税貯蓄組合設立	
	6	9		購買組合設立	
	6	4		満州事変勃発	
	7	7		少年火防団設立	
	7	6		青年会月刊誌「滝の声」創刊号発行	大平駅から六戸二五人移住
	8			万世大路改修工事着手	
	9			東北地方大凶作	
	9	10		大滝分教場改築および校庭拡張工事	
	10	1		副業組合設立	四三世帯・二六八人
	10	4		青年学校・大滝分校開設	
	12	3		万世大路改修工事完了	
	12	4		国防婦人会設立	
	12	7		日華事変興る	
	14	9		第二次世界大戦勃発	
	15	9		国民服制定・隣組制度出来る	
	15	11		大滝に初めて電燈が灯く・各家庭にラジオが入る	四〇世帯・二三一人 青年層の流出始まる
	16	4		国民学校令公布さる	
	16	12	8	大東亜戦争始まる	
	20	8		第二次世界大戦終戦	この年大滝に世の実が稔る
	21	4	1	中学校大滝分校設立	
	21	7		小学校大滝分校二学級制となる	
	22	3		青年学校廃止	三八世帯・二一七人
	23	1	1	二代目校舎改築落成	
	25	5		大滝分校校舎造築（中学校一教室）	小学生五〇人 中学生一〇人
	27	7	21	教員住宅二世帯新築	三五世帯・二二二人 小学生四四人 中学生一九人
	30	3	31	中野村全域が飯坂町に併合さる	
	31	5		中学校大滝分校廃止（飯坂の大鳥中学校に併合）	
	33	8		飯坂町から大滝まで定期バス開通	小学生三七人 中学生二五人
	35			燃料革命起こる（石油時代）	三二世帯・一九〇人
	36	8		大滝分校三代目校舎新築	
	36	8	20	万世大路大改修工事開始（第二次改修工事）	
	37	8		大滝全戸と分校にテレビが入る（共同アンテナ設置）	
	39	1	1	飯坂町が福島市と合併し大滝も福島市となる	
	40			過疎化進む	二七世帯・一一七人 小学生二五人
	41	5	31	万世大路第二次改修工事完成（国道十三号と改称）	
	42	3	1	大滝分校廃止	一五世帯・六七人 小学生一四人
	45				七世帯・三四人
	51				

大　滝　集　落　図　（昭和10年）

43世帯 266人（昭和10年国税調査資料による）



番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	18	19	20	20
	渡辺今朝松	高野宮治	渡辺要太郎	渡辺勇八	木村要吉	渡辺廣治	紺野善右ェ門	笠原美雄	渡辺源次郎	紺野一杰	笹木春吉	渡辺金蔵	渡辺広一	山岸鶴吉	佐藤金左右ェ門	佐藤重右ェ門	木村作右ェ門	佐藤清	長尾藤松	後藤留太郎	二階堂盛吉	新保代次郎

番号	21	22	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
	熊田為吉(教諭)	斎藤豊吉	斎藤七蔵	蒲倉高松	蒲倉徳次郎		須田辰蔵	太見吉佐	紺野市郎	紺野善吉	須田儀平	柾木新松

番号	32	33	34	35	36	37	38	39	40	40	41
	佐藤武雄	佐藤好蔵	斎藤一平	斎藤幸五郎	我孫子富蔵	羽賀運太郎	熊坂林三郎	伊藤長三郎	小林勘須計	山田源次郎	吉田富三郎

大滝集落図　（昭和51年春）

7世帯 34人

第1章　自　然　環　境

大滝は、飯坂温泉の西約14km、西吾妻連峰の山懐ろに深く抱かれたところ、旧万世大路の沿線に位置し、胡桃平、大滝、葭沢の3字を総称して大滝と呼んでいる。

旧小学校大滝分校下附近で標高約386.4m あり、 旧国道に沿って小川の渓流が蛇行し、イワナ、ヤマベ(ヤマメ)、カジカなどの魚が生息する。 夏は窓越しに「河鹿蛙」の音が一入涼を呼ぶ。

四囲悉く山に覆われ、耕地としては僅かの山畑があるのみ、山間冷地のため稲作に適せず、気温は信達平野(福島盆地)に比し、年間平均して7℃前後低い。したがって春の訪れは遅く5月に入って漸く梅、山桜が同時に開花する。夏は涼しく冬足は早い。11月中旬ともなれば、早くもみぞれ交りの日が多く、12月から3月にかけて部落は雪中に没する。

第2章　沿　　革

年代はさだかでないが、昔山形県米沢方面から赤浜を経て明神峠を越え、ニッ小屋の東に出て杉の平、堰場を経由、福島町(現在の福島市陣場町あたり)に通じる一本の細道があったと伝えられる。
当時の大滝はまだ深山の一部であって、この路添いに大滝の地名は記録されていないが、この道が山形県側から明神峠、ニッ小屋を経て杉の平に通じているところから、ニッ小屋から杉の平間の道順は地勢上ニッ小屋から小川に下り、小川の流れに添って今の大滝を通っていたに違いない。

この道は上杉氏入部以後には一般の通行を禁じられていたが、それでも庶民は人目をさけてひそかに通行していたとも伝えられる。

人一人がやっと通れる程のこの山道が、奇しくも後に万世大路となり、現在の一般国道13号に発展して行ったのである。

明治10年、福島 ― 米沢間を車馬が自在に通れる画期的な新道、いわゆる万世大路の建設工事が小川を遡る概ね旧山道添いに始められたのであるが、「明治14年万世大路事業誌」及び「福島市史」などの文献によれば、当時のいきさつを次のとおり伝えている。

「中野新道(万世大路のことを最初福島県側は中野新道、山形県側を刈安新道と呼んだ。) 開設の建議は明治7年に始められた。始めは信夫郡上飯坂村から円部を通って小川の流れに沿い、当時の置賜県(現:山形県置賜地方)南置賜郡東上山村赤浜に通ずる新道をつくる計画であった。上飯坂村の石渡丈七、斎藤孫右ェ門、中野村の木村善吉らが新道開設に熱心で、この区間を 4回程実地踏査を行ったあと、明治8年9月この3人が連名で新道切開きの議を当時上飯坂村にあった第3区会所を経て県及び政府に建議がなされた云々」と。

この3人の建議が入れられて明治10年5月、ときの内務省工事として建設が始められたのである。
なお計画の途中で堰場以東の路線は上飯坂を通らず、川子坂から大笹生、成出を通るよう変更されている。
大滝は万世大路の開通に伴なってその沿線ぞいに生れた宿場街の一つで、大滝のあゆみは常にこの道路の遷り

変りに大きく左右されながら今日に至った。随って大滝の歴史を探ろうとすればまずこの路線の歴史を知らなければならない。

万世大路の開設工事は、福島 ― 米沢間を始めて車馬で結ぶことを可能にした当時では画期的な工事で、当時の福島町11丁目の元標(現在の県庁前通り福島市上町粉又商店角)から米沢の今町に至る延長12里29丁(約50km)の区間を福島、山形両県がそれぞれ分担して同時に着工された。

工事は山岳地帯に加えて、 栗子隧道を始めニッ小屋隧道など4本の隧道が掘られ、 中でも長さ472間(864.9m)に及ぶ栗子隧道の手掘作業は固い岩盤層にさえぎられ頗る難行を極め、 途中から外人技術者と米国製の新鋭穿坑機などを導入して約5年の歳月と*総工費26万3千円を投じて明治14年9月に完成している。

(*現在のお金に換算すると、約52億円)

大滝の歴史は実にこの大工事の着工を契機として始まる。記録によれば工事着工後間もなく中野本村及び近郷からの移住者が入山し、 1～ 2年の間には長老沢に数軒の旅館もでき、人夫や工事関係者で当時の大滝は大いに賑わったものと想像される。 当時は中野新道に沿って円部以西に民家はなかった。このため万世大路の開通に伴ってこの道沿いに新駅を開く必要があり、予定地となった堰場、大滝、大平のうち、大滝、大平に対しては更に移住者を増やすべく、移住奨励が行われた。長老沢の渡辺要一氏所蔵「官有地払下申請書」によれば、移住の条件は1戸につき耕地1町歩、山林5町歩を10年間に亘り無償で貸与され、その間に開懇、及び家屋建築等入植に成功した者には無償で払い下げると云うものであった。大滝駅にあっては明治28年に10年間の貸付期間を満了し、入植に成功した者51戸に対し、宅地、耕地、山林合せて393町余の官有地が払い下げられて、移住民の生活基盤も一応整った。

万世大路開通と同時に***いら沢**(現在の二階堂盛吉氏宅)には「陸運貨物継立所」が置かれて人馬の往来も次第に繁く、人口も増し、荷馬車運送業を営む者、人力車を輓く者、荷役に従事する者など職も安定し、大滝は路線上の重要な駅、宿場街の一つとして、大いに栄えた。 しかし、そのあと、明治32年5月鉄道奥羽線の開通によって交通量がこの方に奪われ、宿場街は一挙に衰退した。とって代わる山林事業も年と共に原木が枯渇してゆき、これに加えて第二次世界大戦後の石油エネルギー革命により薪炭の需要が極度に落ち込み、生業を失うなど、幾度か部落の存続さえも根底から揺さぶる環境の激変に遭遇し、その度に止むなく新天地を求めて離郷する者が相次ぐ中で、今になお数戸が踏み止まって、ともかくも100年の歴史を歩み続けてきたのである。

***原書では葦沢となっているが「葦ら沢」の誤記か？**

＊ なお、葭澤集落についてはその村落発祥のいきさつははっきりしないが、 大滝移住奨励の頃には僅かの家だけであったが、その後大滝鉱山の操業開始に伴い鉱山で働く人達の飯場集落として発展したようである。 大滝鉱山閉山後は元葭澤住人の多くが離村し、僅かの住民(吉田家・小林家など)だけがそのまま残った。 空き家となった家には長老沢(胡桃平)や大滝集落からの転居があり昭和時代を迎えるに至ったようである。私が幼少の頃も何かしら胡桃平や大滝集落の住民とは少し雰囲気が異なるようなイメージを持った記憶がある。 また葭澤集落では製炭業に就く世帯は稀であった。

＊(平成25年6月　紺野文英追記)

第3章 大滝100年のあゆみ

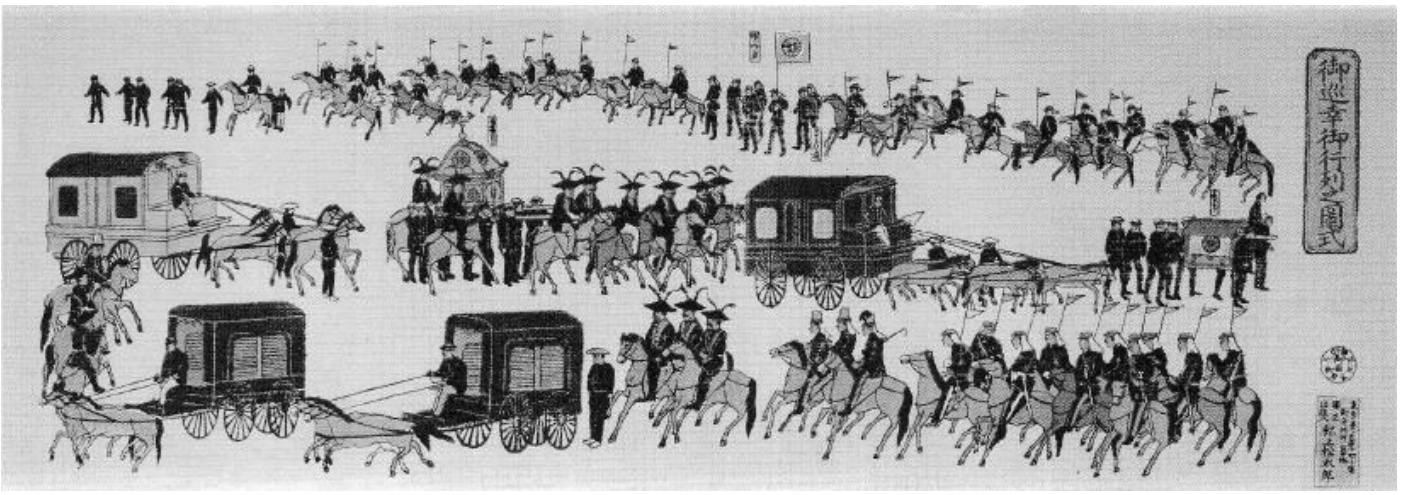
第1節 明 治 時 代

第1. 万世大路の開通と明治天皇の行幸

さしもの難工事を極めた万世大路も、 5年の歳月と総工費26万余円の巨費を投じて、明治14年9月栗子隧道及びニッ小屋隧道が相次いで完成したのを最後に全線開通となった。

翌10月3日明治天皇は東北、北海道ご巡幸のみぎり、還路、米沢よりこの新道をお通り初めになり、その日の正午栗子トンネル福島口(福島、山形県界)において催された開通祝賀式典に臨まれ、次いで大滝にも御駕を休められたのである。

天皇の随員はときの参議大隈重信外325名、馬匹300頭の大行列で、偉風堂々おそらく沿道の草木もなびく壮観さであったろうと思う。



大滝行在所は長老沢渡辺要七氏宅(現渡辺要一氏)で、氏の家の前には「鳳駕駐躍の蹟」の記念碑が建てられ今になお残されている。

開通式が行われた翌月、この新道を太政官布達により国道3等に指定され、次いで明治15年2月9日、勅により「万世大路」と命名されるなど全国にも例をみないまことに由緒ある道路と云うべきであろう。

なおこの道路は明治18年2月、内務省告示第6号によって国道39号に指定されているが万世大路の名があまりにも有名なためこのことを知る人は少ない。

第2. 宿場街大滝の誕生

大滝部落発祥の時期は、古老の話や文献を総合するに、万世大路の建設工事が始められた明治10年頃と推定される。 この頃の大滝は工事関係者の宿舎や飯場街として大いに賑わったのであろうが、この頃から既に大滝は我々の先祖によって着々その基礎づくりが始められていたのである。

明治14年9月万世大路が完成し、翌月明治天皇のご台臨を仰ぎ盛大に開通祝賀式が催された後、一般の通行も許され大滝は路線上の重要な拠点(駅) としてスタートしたのである。

これにより先、県は信夫・伊達両郡役所を通じ、同管内の住民に対して新駅に指定された大滝、大平への移住奨励の布令が出されたので、中野本村及び近郷、近村からの入植者が相次いだ。その条件は沿革の中でも述べたと

おり、 1戸当り耕地1町歩、山林5町歩の官有地を10年間無償で貸付け、後に払い下げると言うものであった。

大滝初期の頃の戸数は「明治14年万世大路事業誌」(県文化センター蔵書)の中に28戸と記されている。又、長老沢の渡辺要一氏所蔵の明治27年12月25日付、入植者連名による「官有地無代価御下渡願」があるが、本書には次のとおり記載されている。　　(前書きの個人別下渡地積等内訳省略)

下渡願合計反別　393町6反9畝15歩

内 訳　*註

田　　2反9畝9歩

畑　　21町4反9畝13歩

山林　369町9反1畝13歩

宅地　2町1反9畝21歩

*註 ： 1町(町歩)は約0.9917ヘクタール(9917平方メートル)、1平方キロメートルは約100.83町。　1町は10反
1反は10畝。 1畝は30歩。　1歩＝約3.305785平方メートルとなり、1畝＝約99.174平方メートルとなる

右者、明治15年福島県令乙第60号に基づき39号国道中、信夫郡中野村字大滝駅へ我等移住致し、明治19年より本年12月迄9ヶ年間無料拝借罷在候処、前書きのとおり土地成功致候間、無代価御下渡被下度、丈量野取図相添此段奉願候也。

信夫郡中野村大滝

大滝駅下渡願惣代人　近 野　次 郎 太

地主惣代人　斉 藤　兼 治

明治27年12月25日

福島県知事　日 下　義 雄 殿

払下げの対象となった官有地は、長老沢(ちょうろうざわ)、大滝を始め、石小屋(いしごや)、二ッ小屋、出来沼(できぬま)、大桁(おおげた)、泥足袋(どろたび)、朴沢(ほおのきざわ)、赤落(あかおとし)、一本楢(いっぽんなら)、首尾戸山(しゅびとやま)、鶏山(にわとりやま)、片起山(かたおきやま)、鷹巣山(たかのすやま)、古屋敷(ふるやしき)、菱川(ひしかわ)の各山林等で、願出人連名簿の総数は次のとおり51名からなっている。 しかしこの中には古老達の耳にも全く記憶のない者も交っており、当時真に大滝に居を構えて住みついた、いわゆる我々の先祖と目され者は○印を附した28名から30名前後で、人口は100名程度であったものと推定される。

記

○渡辺角治	○黒須春吉	○梅津喜重	丹治喜七
○高野幸吉	○須田富治	斎藤兼治	中林留作
○高野宮治	○須田床松	角田平助	横澤亀吉
○渡辺乙吉	○赤井喜蔵	木村貞治	二階堂栄助
○渡辺要七	○渡辺ヒテ	野嵜久吉	佐藤清太郎
○渡辺定七	○太見喜太郎	近野次郎太	○半田多五右ェ門
○宮田定吉	○斎藤豊吉	渡辺倉之助	佐藤文七
○二階堂リエ	○山岸友吉	大橋衛六	佐藤キク
○蒲倉キヨ	○紺野吉助	村島フサ	佐藤末吉
○早坂長八	○高岩初太郎	紺野勘五郎	西坂倉太郎
○斎藤倉吉	○渡辺要蔵	村上七蔵	蒲倉トキ
○長尾藤蔵	○八木沼勘四郎	本間又吉	阿部松蔵
○佐藤磯松	○紺野亀吉	菅藤ヒロ	

又大滝駅と時を同じくして生れた大平駅は、昭和7年頃既に廃郷となっているが（一部は大滝に移住)当時の入植戸数は「大平移住民土地付与取扱手続」(旧中野村公文書・文化センター蔵)に次のように明記されているので、その数はおよそ20戸であったものと認められる。「大平移住許可の者に付与すべき土地は別紙図書の通り、左の手続きに拠り下渡方相計るべし。但し別紙調書(1戸につき耕地1町歩、山林5町歩当り)は20戸に貸与すべき地所なり。よって、今回出願許可の外、他日出願あるときは宅地に限り指定すべきも、開墾地、山林等は総べて毎戸分割せざるに付、移住者共同使用せしめ、若し其使用区域を立つるときは、更に本県へ届出さしむべし云々」と。

大滝はそもそも万世大路の駅、宿場街として開けた。したがって、住民の職業も当時は旅人宿や運送に関する仕事、茶屋、売店などに限られたものと思われる。宮内屋（高野幸吉)、中屋（渡辺要七)、西村屋(不詳)などが早くから旅人宿を開業し、その後何軒かの旅館が開業した。

又大滝には馬宿（柾木家=橋本館、須田(富治)家など)もあり、何人かの人力車業を営む者もあった。大滝の太見家、蒲倉家、須田(床松)家等では明治、大正、昭和にかけて代々荷馬車運送業が営まれた。その他の者も或いは駄馬を牽き、或は荷車を引くもの、又は荷物を直接背に毎日大滝と大平駅を往復していた。記録によると背負人夫は60～75kg（16貫～20貫）の荷物を背負い大滝～大平間を1日で往復した。その賃金は12銭2厘、荷馬車は福島-- 米沢間を4日がかりで往復し、その運賃は1車4円であった。勿論条件次第で酒代などの余録もあったらしく金まわりは良く、この頃一部に酒と賭博の悪習が横行したとも伝えられる。

万世大路開通後の交通量は山形県史(明治初期下)によれば「1日当り通行人少なきは70人、多きは112人、人力車少なきは9台、多きは18台、荷車1人軌き少なきは6台、多きは21台、同2人軌き少なきは4台、多きは6台、荷駄馬少なきは5頭、多きは17頭」に及び、大滝駅は他の宿場、大平、川越石(山形県側)などと共に峠越する旅人と荷動きで連日賑わったのである。

荷馬車軌き3代も続いた蒲倉家の子孫奥野ミサオさん(旧蒲倉ミサオ)は当時の馬方風情を次の12片の詩に巧みに表現している。

駄賃付馬子唄

1. 万世大路 石たたみ
　　馬よ気をつけよ、足ともに
2. 手綱両手に すげ笠かぶり
　　手っこきゃはんに、わらじ履き
3. 成出越えれば登り坂
　　急げや急げ、日が暮れる
4. 日もとし堰場で、鞭うちかけりゃ
　　馬もいななく、車もきしむ
5. 暗いトンネル 松明たより
　　山神橋のあのたもと
6. つむぎキセルで一息つけば
　　月もほほ笑み 流れも踊る
7. 長い出来沼、大桁がんけ
　　でこぼこ道の登り坂
8. 万太郎越えれば、福寿草山の
　　ひとり湧く水、手酌で飲ませ

馬頭観世音
（山神々社石段下道路の向側）

現在は「大滝記念碑」敷地の隅に移設されている。（H25 年 6 月 確認）

9. 馬のたてがみ、撫でながら
　　曲り曲れば、まんじゅ屋見える。
10. 葭沢橋をば、馬方節で
　　曲り角から、大滝見える。
11.「ちゃん今かい」
　　これがわが家だ大滝だ
12. 明日は栗子の大平(おおだいら)
　　慈悲の恵をいただいて
　　三代続いた馬方節よ。

愛馬記録(大正 15 年馬匹検査書類から)				
勇　号	和	種・青	毛・年齢 10 才	(須田儀平持馬)
大砲号	雑	種・鹿	毛・年齢 11才	(太見吉佐持馬)
力士号	雑	種・黒鹿毛・年齢 11才		(蒲倉徳七持馬)

第3. 奥羽線の開通と宿場街大滝の衰退

明治32年5月建設中であった鉄道奥羽線のうち、福島 −米沢間が完成するや、万世大路は開通後18年にして激しかった人馬の往来も急速に減少し、宿場街としての大滝は時代の流れとともに次第に衰退して行った。
かくして村人の一部は他に転出し、残った大部分の人々は伐採、炭焼きなど山仕事に転業せざるを得なくなるなど、大きく運命の転換を強(し)いられて行ったのである。
当時の大滝周辺の山は、まだ原生林に覆(おお)われた末開の地であり、山林資源は豊富であった。 しかし只今のように機械もなく斧と手軌(びき)ノコギリだけで巨木を切り倒し、土そりで集積地点まで搬出された。当時は又自動車もなく切り出した木材を信達平野に運ぶ手段としては、馬車による外、小川を堰(せ)き止めて水と一緒に流す「ドウ止め」が盛んに行われたと伝えられる。
ノコギリと手斧1丁で格好な場所に木材を巧(たく)みに組み合せて水を堰(せ)き止めてダムを作り、集めた木材をこのダムに浮かし、一気にドウをはずして流すのだが、余程上手(じょうず)に木材を組まないと、大量の水圧に堪えきれないで途中で毀(こぼ)れてしまい、又余り固く組み過ぎても、はずす場になって一気にはずれないと、これ又思うように木が流れないので、その辺のコツがあって誰にでもできる仕事ではなかったらしい。
長老沢の渡辺要七氏は当時部落きっての腕達者であり才物であった。土木建築、わけても「ドウ作り」の名人で、当時「木の葉天狗」の異名さえあったと伝えられる。明治14年の秋、明治天皇がこの万世大路をお通りになると聞くや、実兄の渡辺乙吉氏と共に、葭沢橋のかけ替え工事を県から請負って短期間になしとげた。余りの出来ばえと、そのスピードにさすがの官憲も非常に驚いたと云うエピソードが残されている。
堰(せき)を切った水は人工洪水となって木材を一気に下流に押し流し、中野本村あたりで陸揚げされた。
この「ドウ止め」は大正末期の頃まで盛んに行われた。筆者等も子供の頃、西川の「止め場」を見に行った記憶がある。いよいよ「ドウ」を抜く段取りになると、村人には石油缶を吊した縄を引いて、ドウ流しによる洪水を知らせて注意を喚起していた。一本の支柱がはずされると、堰(せき)全体が一度に分解して大量の木材が水と一緒に轟音(ごうおん)をたてながら流れ出し、木材と木材がきしみ合い、激しく岩にぶつかり合いながら勢よく流れ行く様は、子供心にも誠に壮観そのものであった。これも時代ならではの風物史の一つである。

第4. 鉱山ブームと明治時代の教育

年月を明確に伝える記録のないのが残念であるが、古老の話しによると、宿場街時代もとうに去った明治30年代の終りの頃から大正の始めにかけて、中野鉱山、蛇体鉱山、大滝鉱山(葭沢)などが相次いで採堀操業されて、大滝を中心にちょっとした鉱山ブームが訪れたことがあった。中でも大滝鉱山の発見者*三ッ石三平（光石三平）は浮浪の身から一獲千金をかち得て話題をさらったと云う。場所は吉田富三郎氏宅の川向いで、話しによると銅鉱石が露出し、純度も非常に高く、加えて発掘、運搬に便利だったため、大きな利益をあげた。しかし鉱床は極めて浅く埋蔵量が少なかったため、そう長くは続かなかったらしい。

*三ッ石三平(光石三平）… 公式文書「福島県鉱産誌」 昭和40年(1965） 県企画開発部発行で光石が正しいことが判明した（H26.09.05にTUKA氏発見）

この頃吉田氏宅では鉱山労務者のために万頭を作って売っていたため、後の世まで通称万頭屋で通っていた。大滝山神神社の社屋は、この時代に鉱山成金*光石三平によって造営寄進されたものと伝えられている。

また*蛇体鉱山について、操業していた時代は蛇体鉱山から胡桃平まで蛇体道を牛に牽かせた土橇で鉱石が運搬され、西川橋の袂に鉱石の集積所が在ったとの伝聞が残っている。

また、「すえまつ(末松)鉱山」の鉱石も同じ場所に集積されたとの伝聞も有るが、「末松鉱山」の場所や詳細は定かでない。 *蛇体鉱山の正式名称は茂庭鉱山・蛇体坑…公式文書「福島県鉱産誌」より

蛇体鉱山と大滝鉱山が鉱床の薄さから早期に閉山に至っているなか、中野鉱山は幾多の紆余曲折（閉山・再開など）を経ながらも昭和39年頃まで操業が続いた。……中野鉱山は藤田財閥(藤田組)の系列会社である藤田鉱業(昭和2年～)、(昭和32年同和鉱業と合併)が経営していた。その後、昭和33年にはやはり関連子会社の卯根倉鉱業に経営が移行し昭和39年の閉山迄続いた。 *中野鉱山出身者 遠藤常男氏証言 平成29年9月

（閉山理由は昭和32年頃から昭和37年の銅価格下落で不採算になった為 *同上 遠藤常男氏証言）

中野鉱山関係の職員や鉱夫の子供達は大滝分校で大滝集落の子供達と一緒に教育を受けており、現在(平成25年)でも大滝集落出身者との交流が継続している。 *(H25年6月追記, H29年9月追記訂正, 紺野文英）

又、中野小学校本校の記録を調査すると、明治23年2月に始めて大滝に分教場(本校は中野小学校)が開かれている。おそらく当時は寺小屋式程度のものであったものと想像される。場所は大滝66番地となっており、初代訓導は稲葉包通であった。

理由は明らかでないが、明治36年6月に1度分教場廃止、38年4月再興、同年10月再度大滝分教場は廃止された。以来大正7年4月まで児童は杉の平分校に通学している。この間41年1月に冬期間だけの、いわゆる季節分教室(杉の平分校の分教室）が大滝に開設されるなど、明治時代における大滝の学校教育は、幾多の変転を経ながらまがりなりにも義務教育だけは行われていた。

第2節 大正時代

第1. 林産業（製炭）への定着

大正時代の大滝、それは残念なことに明治の後半から、大正時代にかけての資料は、過疎化と共にほとんどが散逸して発見されず、又当時を知る古老達も多くは既に他界してその詳細を知る由もない。

したがって、この「節」は主に当時の世情・背景などを参考とし、その上に村人の間に語り継がれし事などを折り交ぜて、まとめ得る範囲で簡記するに止めたい。

兎(と)も角も大滝は福島市内から18km、飯坂温泉から14km離れた西吾妻の山腹に、万世大路上の宿場街として忽然(こつぜん)とできた集落、明治32年国鉄奥羽線の開通で荷動きも、人馬の往来も息絶えた後は、村を閉(と)じて総下山するか、止(とど)まって新しい安住の地を再建するか重大な危機に立たされたのであった。
その結果、何軒かは家屋敷をたたんで村を離れ、残った者同志で当時豊富だった山林資源(国有林)を頼りに、製炭を本業とする新しい生活が始められたのであろう。

しかし、宿場街時代の大滝の職業は旅館・茶屋などのサービス業から労働者まで、おそらく多種多彩だったろうし、又例外なく家族を抱えて既に壮年期の坂を登り詰めてからの職業転換でもあって、馴れない山仕事への不安、あせり、その他で苦労した事であろうし、本当に製炭業として根を下(おろ)し、生活がどうにか安定するまでには相当年月も要したものと想像される。

それから10数年経った大正時代に入った頃は、年代も既に2代目に移り、大滝は営林署の協力を得て国有林の払い下げも毎年順調に行われ、製炭を主とする林業農村の集落としてすっかり定着するに至った。

以来、大滝は白炭の産地として知られ、高冷地に生育する緻密な固い原木を原料とする大滝の木炭は、生産者の技術の進歩と相まって品質が向上し、明治、大正、昭和の3時代を通じて福島、飯坂方面で常に高評を得た。
特に大滝の製炭技術が高まったのは昭和初期の頃からで、当時渡辺広一氏によって「大竹式製炭法」が導入されてからである。木尺そのまま（約lm）の、打てば刃金(はがね)のような澄(す)んだ固い音のする特級品も競って生産されるようになり、収益にも大いにプラスするものがあった。

さて、余談になるが、明治、大正の頃の木炭界と言えばまことに自由なもので、炭俵の大きさ、重量なども定まったものがなく、いわゆる乱貫、乱俵とでも云うか、そのような時代であったと云う。
生産者自身の体格に合せて適当な大きさ、重さの炭俵を作っては自宅に持ち帰った。勿論(もちろん)炭検査の制度もなく、品質規格の定めなどもなかった。又、炭の仲買人達は荷馬車に20貫目(75kg)秤(はかり)を積んでいて、各家庭の軒下で1俵ずつ目方をかけて買い集めて歩くと云った、長閑(のど)かな庭先での取り引きが行われていたという。

明治時代はまだ山代金(原木の払下げ価格)も、それ程でもなかったが、大正の頃からは序々に価格も上り、その上11月から3月にかけて山は深雪に覆われて思うように働けず、事実上の寝食い同然となるなどもあって、大滝の家庭経済は何時(いつ)も火の車であった。前金で納めることを要した山代金は、何時の間にか炭問屋(どんや)、仲買人等から前借りするようになってきた。炭はいくら焼いても借金の内払いに廻り、勢い炭の相場なども問屋筋の支配する結果となっていった。

借金が増えると冬だからと云って寝食いは許されず、貧困から脱出するため、この頃から年寄りと子供を置いて、雪のない地方への炭焼き出稼ぎ(賃焼き)に出る人も目立ち始めていた。

大滝は四面山に囲まれた小集落、ここで生活し得る人口は自から限度があって、2、3男対策が、もうその頃から大滝では大きな問題であった。この節「第2」のところで述べることになるが、大正の15年間は不況に明けて不況に暮れた時代と云っても過言ではなかった。求むるに職なく失業者が街に溢(あふ)れている状態だから、若者が大滝から出て都会に割り込む隙き間などそうある筈(はず)もなく、将来につなぐ不安は誠に大きかった。

この頃、東南アジア(フィリッピン）や南米ブラジルなどに進出を試みた勇気ある人々もおり、一部の成功者は有ったものの、残念なことに当時の世情、環境、特に第2次世界大戦の結末はこれらの人々の多くには必ずしも幸運を与えてはくれなかった。

かくて大正時代の大滝は、林業と云う職に定着はしたものの、不況嵐の吹き荒(すさ)ぶ中で、苦しい生活を強いられたのである。

第2.　インフレと不況の中で

大正3年に勃発(ぼっぱつ)した第1次世界大戦は日本に一時的ないわゆる軍需景気をもたらした。しかし戦争が終るとその反動で、すぐ深刻なインフレと不況が押し寄せた。今まで好況だった輸出は急激に減少し、生糸(きいと)は大暴落した。川俣や、二本松の製糸工場の女工さん達も自宅待機や、大量解雇に会った。
企業から放り出された失業者は街に溢れ、米価を始め物価は逆に軒並み暴騰した。民衆の不満は遂に大正7年の夏、全国的な米騒動となって爆発し、福島でも会津若松でも、大きな米屋と云う米屋は民衆に襲われた。

失業者と云えば、当時万世大路をあてもなく放浪する*乞食(こじき)は毎日のように、大滝部落を行き来していたもので、これは余談になるが、万世大路（俗に米沢街道とも称した）は別名乞食街道の異名さえあった。

（*乞食は現在では差別用語とされているが、原書のオリジナリテイーを尊重しそのまま記載した。 H25.6　紺野文英）

こんな世相であったから大滝の人達の生活状態も推(お)して知るべく、生産する木炭は組合も無かった時代だから、仲買人に買たたかれ、買う物は高い、特に主食の米は高冷地故(ゆえ)に一粒もとれないところに、一升飯も食わないことには仕事にならない重労働の炭焼き作業、その米の値段が暴騰した大正7、8年頃の大滝は、どんなであったろうか。しかも冬の間は雪の中で収入皆無同然となる大滝、この期間の食糧まで備蓄しなければならなかったのだから、その深刻さは他とは比較にはならなかった。

大正7年と云えば筆者の生れた年、大正末期の頃は私の少年時代、その頃のおぼろな記憶の中にも、毎日麦のたくさん入った御飯と、それから芋などの雑炊(ぞうすい)を食べていたように思う。 魚と云えば、マグロの頭か荒(あら)(身をそぎ落とした後の骨の部分)の野菜煮がいつも、全部の家庭ではなかったろうがお頭付きの魚はお祭りとお正月の特別料理だったように記憶している。反面大滝の人達は真黒になって良く働いた。冬の約4ヶ月は雪の中で、好むと好まざるとにかかわらず、休業せざるを得なかったので、雪のない間が1年間の勝負とあって、毎朝暗いうちから炭山に出かけて、山で夜明けを待って仕事にかかる状態だった。
山までの距離が遠くなってくると泊り込みで働く人も多くあった。

又　米、麦のできない大滝、いくらかでも台所の支出を軽くするため、痩せた山畑を少しでも多く耕して、アワやソバ、モロコシなど高地に適した雑穀などを作った。 芋類、カボチヤなどを始め、野菜は出来るだけ自給自足を計るべく苦心した。

副業としての養蚕は有力な現金収入の手段で、大滝の養蚕は明治30年代(35年前後)の頃から始められていたもようである。

大正時代の生糸(きいと)産業は、まだ米国向け輸出の花形であつたから、福島でも信達平野を中心に盛んに行われた。しかし生糸相場は世界経済、特に米国景気の動向に大きく左右されて、大正9年の大暴落の年は、春の高値から一気に秋の相場は3分の1にまで下落した事もあった。　このように好不況があって不安定ながらも、養蚕(ようさん)は僅(わず)か1ヶ月そこそこの短期間に、大きな現金収入をもたらして部落の経済を潤(うるお)し、常に副業の王座を占めていた。

大正時代は僅かに15年の短い期間であつたが、我が国にもようやく自由思潮が台頭し、学校教育なども子供中心に先生方は比較的伸び伸びと自由な教育が行われていたように思う。都市文化は西洋風の新しい方向でひらけ始めていた。いわゆる大正デモクラシーといわれる時代であった。しかし経済的にみる限り不況が慢性化し、特に農民階層は「働けど働けど我がくらし楽にな

らず」と云った状況で、巷には「枯れすすき」を始め「籠の鳥」「流浪の歌」など 半ばあきらめ切った哀愁調の流行歌が流れていたように、暗い忍従の時代でもあった。 そして大正時代の不況は長びき、一向に回復のきざしを見せないまま昭和へと引継がれて行ったのである。

第3節 昭 和 時 代

第1. 貧困と自力更生

大滝。飯坂温泉から3里半（14km）米沢から7里(28km)の街道筋に在って、海抜1,171尺(386.4km)のところ、冬季は一切の乗り物の往来を止めて、4月でも1尺(約30cm)の積雪を残している片田舎だ。
正確には葭沢・大滝・胡桃平の三つの集落を総称して大滝といった。
昭和10年の戸数43戸、 人口266人(昭和10年10月の国勢調査から)ランプ生活で耕す水田はなく、畑地も少なく、大滝の人々の大半は炭焼き(製炭)と養蚕を生業として、ひつそりと息づいている姿は、一見平和な山里であるが、大正の末から昭和の始めにかけての大不況は、この山間僻地の集落をも見逃さなかつた。

山間僻地だからこそ、不況の風が強く、そのため集落全体が貧困のドン底に喘ながら生活しておったのが実情であった。

生活の綱である木炭の価格、繭の値段が昭和5年急下落した。大正9年の好況時には生産者価格貫当り（3.75kg)楢炭45銭、雑木炭36銭であったのが、昭和7年には楢炭17銭、雑木炭10銭となり、3分の1の値段に落ち込んでしまった。繭値も同様。昭和6年秋蚕繭貫当り5円20銭、翌7年の春蚕繭5円60銭、晩秋蚕繭5円40銭で、好況時の高値に比べて話にならない安値で、深まり行く不況はきびしく、生活苦と借財の苦しみは深刻なものがあった。
なお、宿場時代の悪習である賭博に夜を明かし、朝から酒に浸るという風習から生じた負債が文字通りの不況と競合して、積年の疲弊がその極に及ぶものがあり、生活の苦しさが、納税の滞納に窺うことができた。

昭和5年。大滝の滞納租税額は200円にも達しておった。 この滞納金に対する督促手数料20銭。租税5円以上に対する延滞利子日歩2銭で、利子だけでも50円に達するありさま。 滞納地区というレッテルが貧困の状況を浮き彫りにさせるものがあり、その疲弊困憊のありさまは言語に絶するものがあった。

こうした大滝の貧困を救うため、昭和7年9月、3,600円の予算で、救済事業が始められ男21人、女29人が働きに出て生活資金を得た。この救済事業は奥羽線赤岩駅に通ずる道路（赤岩道）開鑿工事として始められたもので、道路起点となった工事跡が、今でも、その面影を残している。 赤岩道は開通当時は救済道と呼ばれた。

このように大滝の昭和の幕あけは、決して明るいものではなかった。 このことは大正末期からの不況が慢性化して、大滝の人々の生活が疲れ切っていたことである。この貧困の姿に心ある当時の人たち、とくに青年たちが立ち上った。それは次に掲げる数々の自力更生の歩みのなかにしるされている。

1 負債整理組合

昭和5年、大滝負債整理組合が設立された。

大滝の総負債が、いくらあったのか、今ではそれを知る記録がないが、借金のない家は少なかった。不況と借金、そのうえ高利に悩みながらの生活であった。

負債整理組合が中心となり、冠婚葬祭の簡素化を始め日常生活の改善が提唱され、勤険貯蓄の美風が強調さ

れた。万世大路の改修工事に出た賃金を財源として昭和8年4月から負債整理10か年計画が樹(た)てられている。

2 製炭組合

昭和5年7月、大滝製炭組合が設立された。

設立当時の組合員は33名である。大滝の生計のもとは国有林から払下げをうけた原木を焼いて製炭することであるが、原木の払下げ代金は、前納金制度のため、木炭問屋・仲買人から高利の借金をして炭焼きを営んできた。生産された木炭は原木代金の貸主から不当に買いたたかれる不都合な悪循環の繰り返しで、この不合理を立ち切る必要性から製炭組合の設立となり、組合員の生産する木炭は、銘柄・品等別に定める1俵当り焼賃制度で働き、組合に剰余金が生づれば、これを積み立て、炭価が下落したときは積み立金を取崩して焼賃を補償する仕組みで、組合運営が行われた。

こうして組合は僅か2年間で3,000円の基金をもつようになり、高利の借金をしなくとも自力によって、営林署から原木の払下げをうけることができるようになった。

組合の運営が軌道に乗ると、組合事務所、木炭倉庫が新築され、また、組合員の生活も安定してきた。

昭和6年 組合事務所新築2階建 10坪

昭和9年 木炭倉庫新築 平屋建 75坪

土地(同上敷地) 214坪

3 納税貯蓄組合

昭和6年、大滝納税貯蓄組合が設立された。

租税資金が計画的に造成され、組合が代納の方法をとったので、昭和7年から完納地区に変った。

註 納税貯蓄組合は後、婦人会に引継がれ、「大滝婦人会納税貯蓄組合」と称して、戦後はおもに国民年金保険料と国民健康保険料納付に貢献した。
昭和40年から46年にかけては、納期内完納優秀組合として、連続福島市長から感謝状が授与されている。

4 購買組合

昭和6年、大滝購買組合が設立された。

飯米をはじめとする生活用品の一切は、すべて商品に頼っていた。山仕事のため野菜まで買い求めていた。

生活物資の一切は、木炭問屋、仲買人からの仕送りによって生活してきた結果、問屋と仲買人には原木代金の貸付け利子を支払い、更に問屋から仕送られてくる生活物質には手数料が加算され、引渡す木炭は買叩かれると云う仕組みであった。

そこで生活用品、とくに食料品の米・味噌・醤油など品質の良い品を安く買う主旨(しゅし)で購買組合が誕生した。組合の共同購入によって、当時白米1俵(60kg)当り、10円前後の相場を1円50銭安く購入していることから、購買組合の設立は大きな意義があった。

5 副業組合

昭和10年1月、大滝副業組合が設立された。

深山の風土は山紫水明。四季おりおりの眺(なが)めは視(み)る人によって、その趣きを感じさせるものがあった。春はワラビ、ぜんまい、 うるい、たらの芽。初夏の水菜、蕗(ふき)、秋の山ブドウ、キノコ、クルミ、栗など天然果実には恵まれたところ

である。この天然果実を商品化して収入をはかる目的が副業組合である。
副業組合発足の前の年の昭和9年は、冷害による大凶作で、農山村は疲弊し農民の生活が困窮した。三井・三菱の凶作義援金が大滝に400円交付され、この義援金で、分教場の近くに共同作業場が一棟建設された。
ブドウ液締り機一式、桶、製縄機などが備えられ、副業組合の活動に大きな役割を果した。
副業組合設立当時の組合員は77名おった。

春の芽吹きのゼンマイは名産「大滝ぜんまい」として売出され、 セロハン袋に百匁 (375g)詰めで、 ガリ版刷りの料理法を入れ、信夫郡団体事務所に出荷された。また、早春に産卵のため谷間の小川、堀、湿地に集ってくるヤマドジョウ（東北山椒魚）も大滝名産として売出された。 現代のように化学薬品が出廻っていない当時は、このヤマドジョウは栄養補給、強精食品としてもてはやされたものである。

胃病の薬黄連、 トウヤクも副業組合から出荷されている。山ブドウ液も絵筆で色彩したレッテルを付けた1升(1.8リットル) 瓶詰めが出荷されて好評を拍した。

第2.　炭焼く煙

炭焼き稼業は重労働で炭のように真っ黒くなって汗を流しての力仕事であった。自宅から8km・10kmと離れた山奥の現場まで歩いて行くため、日の出前に家を出るのは常であった。現場では原木を伐採し、約1.6m の長さに切り、窯場に集材する。太い原木は斧で2つ割・4つ割にする。細い木は10本内外を一束ねにして、一日掛りで窯一基分の原木を準備する。この原木を窯に入れて焼くのだが、高さ約lm・巾45cm程の窯口から柄先がY型の又木を巧みに操作して、原木を縦列に隙間なく窯のなかに立て詰めて、窯口を燃やしつける。

原木に火がついたころを見計らい窯口を塞ぐ。窯口には大きな蓋石をたて、隙間を練った赤土で塞ぎ込む。そのさい窯口の上下に直径2・3cm程の小さな空気穴を2ッづつ開けておく。

窯の煙出しから、黒煙がモクモクと吐き出る。　やがて黒煙が白煙に変り、35時間も経つと白煙は青い煙となり、40時間を越えるころ青煙も消えて、熱気だけとなると、窯のなかの原木は完全に炭化されている。 窯出しの時である。

窯口を開くと210kg～ 240kg(7～ 8俵)分の炭化が真っ赤な焔となっており、内部の窯石も火となっている。手で握る部分の柄の先が細長い鉄棒、その鉄棒のさきが山形となっている道具を使って、焔の炭化を30kg位ずつ窯の外に引き出すのだが、熱気で真冬でも汗が出る。　真夏は暑さとの苦闘である。

窯の外に引き出された焔の炭化にシバイ（湿灰）という水をうった灰土を2時間位被せておくと、火は消えて木炭となった。

シバイから堀りおこした木炭は、品質・大小別に分けて定量を炭俵に詰めて製品となった。 夕闇せまるころ、男は2俵 (60kg)、女は1俵の炭俵を背にして家路に着く。毎日が大変きびしい労働である。 このような仕事に耐える村人たちは男も女もみんな体が頑強で、大食家でもあった。 麦飯をギッシリ詰めた*曲げワッパ、2食用の弁当を一度にたいらげて烈しい労働に耐えていた。

冬山は比較的自宅から近い4～5kmのところで炭を焼いたが、一度伐採した樹木は30年、40年過ぎないと再び用材とならないので、年とともに炭焼きの現場を奥山に求めるほかなく、次第に山に泊まり込みで働くのが常態となって

いった。　必然的に里の家屋は老人と子供が守るようになった。
山の谷間に、斜面に白煙をなびかせて生業にいそしむ村人の姿が山間にあった。

＊曲げワッパ　・・・　スギやヒノキなどの薄板を曲げて作られた木製の弁当箱

第3.　大滝木炭の品質

大滝の木炭は昭和のはじめから品質の良さが評判であった。大滝の炭は品(しな)が良い、大滝の炭は固くて火持ちが良い、大滝の炭を使うと他の炭は使えない、といった評判が飯坂・福島の消費地での定評であった。事実、問屋筋でも、他産地のものより、大滝産の木炭は6%程度高い値段で買い取られていた。

これは、奥羽山脈のなかにある、吾妻山と蔵王を結ぶ中間の栗子山を主峰とする大滝の山々は、高地寒冷の地であり、そこに生育する樹木は材質が硬く、木炭の原木として最も適しておったことが挙げられる。 それにもまして、昭和のはじめ、渡辺広一氏が大竹木炭製造研究所（相馬(そうま)）で2年間の研究を終えて帰ってきた。 そして村内に大竹式炭焼法を導入して製炭窯の改良、製炭技術の普及に努めたのが原動力となり、大滝の製炭技術が一挙に高まり、以来県の木炭品評会に於いては常に上位に入賞した。 そのため消費地からも、その品質の良さが認められるところとなり、大滝木炭の名声が高まった。
これは村の人たちの製炭技術の向上のため熱心な研究と努力が実った結果である。

大滝の木炭は白炭である。炭といえば誰でも黒いものと思うのだが、白炭は、その表面を薄化粧したかのように白灰が付着しているのでその名があり、石窯製法の特徴であった。

良い炭は叩くと金属性の音が出る。 この音が出る出ないは生産者の技術の優劣で決った。金属性に近い音が出る炭ほど火持ちの良い優良品である。　それが大滝産の木炭であつた。

第4.　大滝の養蚕

養蚕は炭焼きに次ぐ重要な産業であった。大滝で養蚕が始められたのは定かでないが、宿場街が終りを告げて間もない明治35年ころと思われる。養蚕が盛んだった昭和の始めころ、既に立通(たてとおし)栽培(＊註)であった高助赤木といった種類の桑樹は老木化しており、その樹令の状況からみても判断されるところである。

＊註（立通(たてとおし)栽培とは、桑の栽培法で、小枝などを剪定(せんてい)しないで放置し、芽葉だけを摘み取る方法）

山間地に位置する大滝は病虫害に汚染されることもない地域であったので、早くから原蚕種の飼育場所として好適地であった。養蚕戸数29戸のうち、片倉製糸紡績株式会社福島蚕種製造所の種繭(たねまゆ)の原蚕飼育者が19戸もあった。　大滝の養蚕は春蚕を主体として初秋蚕、秋蚕、晩秋蚕まで手がける人があって、一時は養蚕が活気を呈した。繭質が良く高値で取り引きされたこと、 1か月余の短期間で現金収入が得られる魅力があって、大滝の経済を潤(うるお)した産業であつた。

種繭は一般の糸繭より値がよかったが、飼育管理は厳しかつた。 桑畑の土壌改良、施肥、とくに病虫害駆除は徹底して行われた。 また、蚕室、蚕具の消毒、蚕室内の温度、湿度、給桑、蛾の退治、蚕糞の処理に至るまで厳格な飼育管理が行われたものである。

養蚕の主役は主婦で、 1か月余、蚕と寝起きをともにした。上族(じょうぞく)（＊註）がせまると、炭焼きを休み一家総出で桑摘(つ)みに専念した。 桑が足りなくなると、山桑を捜し求めて山また山をかけめぐって桑の確保に努めたものである。
繭ができると片倉福島蚕種製造所や繭仲買人のところに、繭を積んだ荷車、繭籠を背に歩きながら街へ向う人々の

姿が朝早くからみられた。

*註（上族とは･･･蚕の体色が半透明黄白色になり、ウロウロし繭を作る場所を探し始め、その辺に糸を吐き始めるころ）

木枯らし吹く秋から冬の夜長にかけて、主婦たちは親繭や屑繭で糸とりや真綿づくりに精を出し、羽二重織りのリズミカルな音が戸外に響き、娘の嫁入り仕度の反物を織りあげる母親の姿がみられた。

大滝の養蚕は昭和10年ころまで盛んであつたが、桑畑約9ヘクタールの桑樹が老木化して収葉力がなくなり、そのうえ手不足などが原因で養蚕家が少なくなり 5～ 6戸が細々と養蚕を営んでいたが、昭和36年ころには蚕を飼育する人は全くなくなってしまった。

昭和初期の大滝集落原種繭収穫量と繭価（春繭）

年号	養蚕戸数	収穫量（kg）		収　入(円)		単価(円/kg)	品種	摘要
		総量	1戸平均	総額	1戸平均			
昭和6年	11	1,200	109	1,420	129.09	1.07	満月	
7年	10	1,443	144	2,036	203.06	1.46	〃	
8年	13	2,092	161	5,917	455.15	2.93	栄光	
9年	15	1,470	98	1,573	109.86	1.07	満月	
10年	10	685	68.5	1,102	110.20	1.61	〃	

昭和初期の頃の大滝養蚕農家

○渡辺　今朝松
○渡辺　勇八
○渡辺　金蔵
　須田　藤右ェ門
○後藤　留太郎
○蒲倉　キミ
○紺野　一郎
　佐藤　好蔵
　斎藤　幸五郎
　山田　源次郎
○高野　宮治
○渡辺　清
　笹木　春吉
○木村　作右ェ門
　二階堂　盛吉
○太見　吉佐
○須田　儀平
　斎藤　一平
○斎藤　七蔵
○伊藤　長三郎
○渡辺　要太郎
○紺野　一奏
　山岸　鶴吉
　佐藤　金左ェ門
○蒲倉　徳次郎
　須田　辰蔵
○佐藤　嘉右ェ門
○熊坂　林三郎
○斎藤　惣三郎

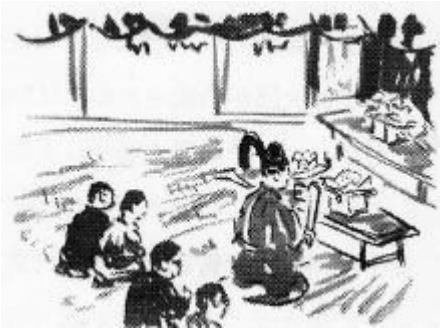
※　○印は片倉製糸原蚕飼育分場組合員

第5.　昭和初期の生活行事

昭和の初めにおける、色々な催し物の面影を偲んで、今は昔となった思い出の主なるものをあげてみる。

1．元日参りと暁参り

旧正月元旦、旧正月15日には午前0時から1時・2時を最高潮にして夜明けまで、村人は氏神の山神神社にお参りする習わしであった。雪道で行き交うときは、どちらか一方が片足を膝頭まで雪のなかに入れなければならない、狭い細い雪道をワラ靴を履いて提灯の明りを頼りに参拝し、その年の幸せを祈願したものである。



青年会の若者は前日の午後から出動して社殿の清掃や参道の除雪をするとともに、夜間は拝殿に詰めて、参詣人にお神酒を提供するなど夜明けまで奉仕した。

2. 学芸会と演芸会

毎年旧正月16日ころ、分教場では児童による学芸会が催され、 1年間の学習成果について披露された。合唱、独唱、朗読、演劇など学年別に行われ、父兄はわが子の学芸を参観するため手料理を重箱(じゅうばこ)に詰めて集った。雪に閉じ込められた冬場のなによりの楽しみで、また教育振興に、この学芸会は大きな役割を果したものである。

また、青年団員による演芸会もお正月の楽しみの一つであった。田舎芝居の舞台装置に色々工夫が凝(こ)らされて、青年たちの演技も素晴(すば)らしいものがあった。くずの葉、寛一お宮の熱海の海岸の場面などに村人は大喝采を拍したものである。剣舞(けんぶ)、万才(まんざい)、活弁(かつべん)(講談)と出し物が多く、夜間まで行われたことも度々あり、ときには2日間にわたって行われたこともあった。この演芸会では演技する者、観る者、いずれも娯楽の少なかった時代における村人たちの社交の場でもあったといえる。

3. 除雪作業

小学校の卒業式は3月25日、入学式は4月1日と決まっていた。卒業式は中野本校で行われたので児童は10km余りの道を歩いて出席した。

そのころ、雪の少なかった年は3月下旬に、多い年は4月上旬に杉の平・大滝の間 5kmの国道の除雪作業が行われた。除雪作業は1戸1人が出動して1日がかりで行われたが、積雪量の多い年は2日がかりのときもあった。

この除雪作業がはじまるころ、ウグイスの声が聴かれ、フキノトウの芽が出て、雪国の春を思わせたが、なんといっても一切(いっさい)の乗り物の交通が絶えていた大滝の里に、各戸総出の除雪作業によって自転車、荷馬車の交通ができるようになり、はじめて本格的な春の訪れを告げる作業であったといえる。

4. 消防出初式(でぞめしき)

雪国のため消防出初式はいつも5月上旬の八十八夜の日に行われた。

消防団員がハッピ姿で勢揃い。加半式手押ポンプを操作し、各戸の屋根に放水しての防火絵巻きを操り広げて、無火災を祈った。

また、4月上旬ころから若葉・青葉の出揃う5月下旬まで、ポンプ置場を詰所として毎夜4人の男子が夜警に当り拍子木を叩きながら村内を巡回し防火の守りをかためた。 また、同じ時期に毎日2人組みの男子が大滝・赤岩間の山道4km余を巡視して山火事の警戒に当ったものである。

この時期がワラビ・ぜんまいなど山菜の出盛りで、飯坂・福島から山菜取りに山に入る人たちのたき火、タバコの火の不始末など山火事の多いシーズンに備えての自警のためであった。

少年防火団が結成されたのは昭和7年4月で、4年生以上の児童で組織された。幼い子供たちの火遊び、マッチの置き場所などに注意を喚気して火災防止に貢献した。

このように、村民あげて防火に努めたことは、山間地のカヤ葺(ぶき)屋根の集落地で水利の便が悪く、日中は山仕事で留守は女子供であるため、伝統的に火災防止の守りを続けてきたもので、集落誕生以来、*無火災であることが誇りでもあった。 ***残念ながら昭和38年頃国道13号道路工事労務者の煙草火の不始末で労務者宿舎として貸していた渡辺広一氏物置(須田儀左ェ門宅東隣)から出火し全焼したが、大滝住民に起因する火災は皆無である。**

註

大滝消防団の発足は大正15年4月17日で昭和4年3月の団員は32名であった。 集落の夜警には、男子18才以上の者と定めがあった。 また、赤岩道の巡視は大正15年4月6日結成された大滝林野保護組合の事業として行われたが昭和5年3月大滝愛林組合と改称され、引き続き山火事防止と盗誤伐採の監視を任務として行われた。

5. 衛生掃除

雪囲いが取りはずされ、八十八夜がすぎると馬鈴薯(じゃがいも)の芽が出、ネギ苗が植えられ、キュウリ、南瓜などの種蒔きが終って、野山は緑一色の季節となった5月下旬ころ、一斉に衛生掃除が行われ駐在巡査の点検をうけたものである。

春の衛生掃除は、冬の長い間、雪にとじこめられた冬から夏への部屋内の模様替えの意味があり、養蚕家にとっては蚕室の準備と蚕病防止の役割りを果した。

6. 赤岩道の草刈奉仕

大滝・赤岩間の約4kmの山道は当時街へ出る最も近い道路で、よく利用されていた。
この山道は、細い道で草が繁ると雨の日は交通至難なところなので、青年たちが草刈りを奉仕してみんなから感謝された。 また、大滝不動さまの参詣の通路でもあったので道標を立て、峠には丸木の腰掛けを備え、谷間の清水に金明水、銀明水などの立札を立て、小川の丸木橋を補修して山道の整備をはかり多くの参詣者の便利をはかった。

7. 滝の声

当時、男女青年会員が4、50名おって活気を呈し、青年の活躍は山村の生活を明るくしてくれた。
青年会の活動の一つに機関紙「滝の声」の発行がある。創刊号の発行日は昭和7年6月1日で、すべてが手作りの小冊子であった。

ペン書きで表紙中央には、7、8cm 程の正方形の枠内に絵具で、きれいな絵が書いてあり、会員の作文、作詩、意見発表などすべて手書きで毎号2、30頁もあり発行部数1冊のため会員の間を回覧して愛読されていた。

昭和8・9年ころ一時発行が中断されたことがあるが、まもなくガリ版刷りで復刊され各会員に配布されるようになった。日支事変が激しくなると相次ぐ青年の出征により若い者が少なくなり、昭和14、5年ころ廃刊となってしまったが、当時の青年たちの思想、文芸、人生観などが誌面にあふれて大滝青年の心意気がよく伝えられていた。

なぜか滝の声の誌名文字が一貫性を欠いて、編集者の気のおもむくままに、その都度次のように変わっていた。

滝の鯉	たきにあひ	瀧記之古飛
た貴之鯉	た貴の古比	た貴比古ひ
瀧貴の鯉	たきの鯉	

8. 盆踊り

山村にとってお盆は楽しいものであり、炭焼き仕事にとっては保養の一時であった。 旧暦7月の14・15・16日の夜は渡辺金蔵、山岸鶴吉の両氏の前の道路に盆やぐらが立って 夕刻から青年たちが威勢よく打ち鳴らす大鼓や笛の音に老若男女がさそわれて散々伍々にヤグラの廻りに集った。 最初は踊り子の輪が小さかったが、夜が更けるにつれ、踊りの輪が段々と大きくなって行った。疲れるのも忘れ十五夜の月の光を背にしながら村人は深夜まで踊りまくったものである。

9. お祭り

旧8月17日は氏神さま、山神神社の祭礼日である。
祭神はオオヤマズミノミコト(大山祇神)とコノハナサクヤヒメノミコト(木花之開耶姫神)である。明治43年、大滝の入口(葭沢)にあった大滝鉱山(銅山)主(光石三平氏)が神社造営して、山の守護神として祭って以来、大滝の氏神とされ

たものと伝えられている。　祭には青年たちが、山車を造って笛、大鼓の囃で村内をねり歩き、祭気分をかきたてたものだが、 昭和5・6年ころ新生活運動の一環として山車から樽神輿になり、4年生以上の高学年男子児童がワッショイ、ワッショイと樽神輿を担いで練り歩く祭りと変った。

お盆のときもそうであったが、お盆とか、お祭りには必ず小間物屋さんが店を開いて子供たちの欲しがるオモチャをならべて村内の子供たちを誘い込んだものである。 夜になると小間物屋の店頭にカーバイトのガス灯がついて、青白い光があたりの闇を照らしておった。

ランプ生活者には、このガス灯が格別、明るく感じたことが子供心にも忘れ難い思い出である。

祭礼の日には葭沢、大滝、胡桃平の要所に、祭礼の大きな幟りが立てられたことも今は昔の語りぐさとなってしまった。

10. かまぶち

炭焼きする石窯造りのことである。 夏山・冬山と称して年2回、国有林の原木を払下げ、山分けが決まると、各家が一基づつの石窯を築いた。炭窯の構築には親類縁者、隣同志の5、 6人が助け合って共同作業で行われた。

窯は石と赤土で構築されるが、窯が出来た夜は、窯主の家では、その家の主婦が得意とする手料理と酒が出されてお祝いをする習わしであった。

11. カヤ刈り、雪囲い

つるべおとしに日が短くなった晩秋から初冬にかけて、カヤ刈りが行われたのも大滝の風物であった。カヤは炭俵の材料で、各自月産120俵から180俵もの木炭が生産されるため、大量に必要で秋の日にみんなカヤ刈りに精を出したものである。

大滝最高峰の西川山に三度雪が降り、四度目には集落の屋根が白くなった。そんなとき、母屋と納屋の北側の軒下に刈取ったカヤを立て並べて防雪し、戸外の出入口、井戸端にも雪囲いをして冬の訪れに備えた。

そのころ生大根を貯蔵したり、菜っ葉を漬けたり、冬を迎える準備に主婦たちにとっては忙しい日々でもあった。冬期間の数か月分の食糧を運ぶため、米俵を積んだ荷馬車が、足どりも重く、夕暮れどきに帰ってくるのも冬の真近さを思わせる初冬の大滝であった。

第6.　出 征 兵

昭和12年7月7日夜、北京郊外の盧溝橋畔で起きた一発の銃声は、日中戦争の幕開けとなり、戦火はやがて上海に飛火して日本と中国との全面戦争に移った。さらに昭和16年12月8日米英を主軸とする国々を相手とした大平洋戦争となって、中国との戦いから一転して世界を相手とする大戦争に拡大した。盧溝橋事変から日が経つにつれ、国内は刻一刻と戦時色が深まり、すべてが戦争への協力体制が整えられるにつれて、山狭の大滝にも戦争の影響が強まり、住民の生活が逐次変貌していった。

炭焼きという重労働に耐えた屈強な青年が、兵隊には適しておった。若者は現役兵として或いは召集により、静かな村里から20余名の諸氏が相次いで出征して行った。なかには年老いた両親、妻子を残しての出征で、残された

老令者が集落を守り炭焼きを続けることになった。

出征兵士名(○印は戦没者)

○高野　幸八	渡辺　要七	○渡辺　要蔵
○渡辺　多美男	紺野　健吉	○紺野　憲蔵
○渡辺　源六	笹木　俊男	○山岸　鶴蔵
須田　正見	後藤　市太郎	蒲倉　高松
蒲倉　要	斎藤　春吉	須田　辰雄
○須田　辰美	○斎藤　源記	森笠　潔
佐藤　勝雄	伊藤　長三郎	斎藤　源右ェ門
○小林　誠	○吉田　富治	○伊藤　長重郎（満州事変）
吉田　富蔵		

第7.　電燈の光

昭和10年代は戦時中であったが、大滝にとって明るいニュースがあつた。それは長い間ランプ生活を強(し)いられてきた大滝の里に文化の光、電燈がついたことである。秋雨(あきさめ)が冬の真近さを思わせる昭和15年11月、30数戸の住家に電燈の光が一斉(いっせい)に照らされた。

みんな明るさに喜びあった。子供たちは電燈の明りの下に本を持ちよって集った。大人もラジオから流れる戦況のニュース、音楽、かず少ない娯楽番組に耳をかたむけた。 大人も子供も電燈の明るさに心から喜びあった。
明治の初め集落が誕生してから65年余の長い間の念願を、日の前に、しっかりと手にした喜びであったからだ。

工事は昭和15年9月末ころ、杉の平から5kmの間、およそ200本の電柱を立てることから始められた。
工事期間は約2か月。工事負担金として一戸当り50円(製炭組合の余剰金から支出)が拠出された。
東北電力では、大滝地区の電気料金の増収をはかるため、一戸一台のラジオ(45円)を必ず設置することが条件で、工事がすすめられた結果、大滝地内のラジオ普及率は100 %であった。

第8.　本炭増産と食糧難

日中戦争が拡大されるとともに統制経済の時代となり、村の生活に大きな影響が起こってきた。
昭和15年6月砂糖・マッチが切符制となり、一人当たり砂糖は1ヶ月半斤(はんきん)(300g)マッチ1日5本と消費規制が実施されたのをはじめ、同年11月に米穀国家管理制度が発足し、翌年の昭和16年4月1日から米が配給制となり、 大人1人当り1日2合3勺(じゃく)(322g)の配給となった。　同じ年の7月1日には隣組(となりぐみ)制度が発足(ほっそく)して胡桃平(くるみだいら)、大滝、葭沢(よしざわ)の3つの隣組みが結成された。 昭和17年2月1日衣料品の点数切符制が実施されるなど統制経済が強化されるにしたがい、村民の生活が耐久生活に入った。

大滝には水田が無かった。そのため配給米以外は一粒の米も自由にならなかった。 住家の周辺には僅(わず)かながらの畑はあったが、大半は桑畑で、炭焼きが専業のため畑作物の栽培技術がないため、ろくに作物をつくっていなかった。それゆえ住民にとっては戦時中の食生活は極度に困り、食料確保の苦闘の日々を送った。 4月・5月にかけて馬鈴薯・南瓜(かぼちゃ)・トゥキビ・アワ・ソバなど、8月には大根・菜類の種撒(ま)きで、炭焼きを休んで、畑作に精を出す人が多くなった。 このとき大滝地内の畑地利用度が一番高まった時期である。

木炭増産は戦時中の国策であった。昭和14年から大都市では木炭切符制がはじめられていた。木炭は庶民生

活にとって当時は燃料、暖房用に欠くことのできない生活必需品であった。木炭自動車の開発によって、自動車の燃料として交通部門にも消費が拡大された。とくに軍用 トラックの燃料となった白炭は、戦時物資の性格が強まりその重要性が一段と高まった。

昭和16年、消費地では家庭用木炭通帳が発行されて、木炭の消費規制が格段と強められた。当然のことながら産地の大滝には木炭の生産割当量が高められたが、記録が散在して、ここに数字的な表現ができないのは残念だが、目標の達成は至難な業(わざ)であったと当時を偲んで語る人が多い。 しかし責任を果すため、みんな精一杯力を出して働きまくった。

昭和18年には戦時統制が一段ときびしくなり、木炭の生産目標が大幅に増え、生産督励をうけることになった。木炭の確保がますます重要になったことから、木炭一俵の生産につき、米一合の特別加算配給という特点が生産者に与えられたが、それでも力仕事の炭焼きにとっては、焼け石に水の如(ごと)くで食糧難の生活には変りなかった。
そのため統制品の木炭の横流しが度々(たびたび)行われた。米と木炭の物々交換で生活を維持する以外に方法がなかったからだ。 ところが大滝には車が通る道は万世大路が唯(ただ)一本の道で嵩張(かさば)る炭俵はすぐ人目につき易く、横流しの搬出にあたっては色々変装し、偽装しての工夫をこらしたが、警察の検問に会って摘発されることが度々(たびたび)あった。
営林署からも呼び出されて原木払下げを停止するぞと言われるなどのトラブルが絶えなかった。
この時代は、 なんといっても増産と食糧難との苦闘のときであったといえる。

第9. 消えかかる木炭の火

昭和20年8月15日、太平洋戦争の終結を告げる玉音(ぎょくおん)放送のニュースは、山で働いていた人々は夕刻帰宅して知らされた。 餓えと虚脱と困窮の平和であった。その日、その日の生活を切り抜けるのが精一杯であったが、そんななかでも、歴史の歯車は正しく廻って行った。 戦時中は米の配給が1人1日2合3勺(322g)であったのが、戦後は2合1勺(294g)に減らされたうえ、米の代りに豆、小麦粉が代替え配給され、アメリカ軍から放出された乾パン・トウモロコシのときもあった。

このような情勢のなかで、木炭は民生安定の重要な物資であったため、戦時中と同様、木炭の生産割当があって、世の中がどう変ろうと炭焼きで暮すことが宿命的なものとして大滝の人たちは木炭の生産にいそしんだ。それから10年余り後、木炭は家庭燃料の地位を石油に奪われようとは、そのときは誰もが予測していなかったことである。

昭和5年、大滝製炭組合が設立されたとき組合員は33名おった。以来組合の業務として、原木の一括(いっかつ)購入、製品管理、小売店へ直売実施、値動きに応じた市場操作、資材・生活用品の共同購入、窯構築資金の援助及び製炭技術の研究など、製炭組合の活動は組合員の経済発展に大きな役割を果してきたが、出征兵、離村者及び木炭の組合管理では物交の不便さによる脱退者が相次ぎ、組合運営が困難となり、昭和18年2月製炭組合の解散を余儀なくされてしまった。 しかし、この事態を憂慮した有志17名が相寄り、同年8月再び製炭組合を設立して木炭の生産に励むことになった。 その後、まもなく終戦後の混乱期を迎えて、諸物価の変動が激しく、製炭組合の運営が度々(たびたび)危機に見舞われて、時折(ときおり)組合の解散が大滝の話題に浮び上ったが、その都度(つど)組合長高野孝治氏の激励によって、組合員もお互いの反省と自覚で難局を切り抜けてきた。

昭和33年木炭生産者21戸、人口134人、組合員は結束して組合運営に努めた結果、昭和34年には優良製炭組合として知事表彰、次いで翌35年には全国木炭生産者大会において「日本農林漁業振興会長賞」の光栄をうけている。このときの組合長は高野孝治氏で苦難の道を乗り越えての受彰は感無量なものがあった。

＊ なお、大滝集落の全世帯が炭焼で生計をたてていたわけではなく、10世帯前後は炭焼き以外の仕事で収入を

得ていた。--- 営林署の山林管理の請負、土木作業など（詳細な資料無し）
ご参考までに下記にその世帯名を記する　＊(平成25年6月　紺野文英追記)

炭焼き以外の仕事に従事していた世帯（昭和30年頃）	
胡桃平　地区	渡辺　清治(木炭組合事務専従)　、山岸家、　油井　武　、　二階堂　盛吉
大　滝　地区	太見　正一　(太見家では昭和30年頃まで馬を飼育していたので、唯一軒だけ荷馬車業が継続されていたようである)
葭　澤　地区	佐藤　武雄(民生委員・孤児の里親)　、　佐藤　某　、　伊藤　某　、　小林　某　、　吉田　富蔵

戦後の本炭生産が全盛だった昭和32年ころは、年生産量22,300俵（単位15kg）生産額8,580,500円を挙(あ)げていたが、 丁度そのころから家庭燃料のなかにプロパンガスや灯油が浸蝕しはじめ、年を経るごとに石油がその主座を占めるようになり、木炭はその地位を石油に明け渡すことになって、生産が下降線の一途(いっと)をたどってしまい、製炭業の衰退が甚(はなは)だしく、昭和43年6月には大滝製炭組合を解散してしまい、再び復活する見込みを失ってしまった。
昭和51年現在、5世帯ほどが自家用と時折(ときお)り飯坂の温泉旅館からの注文に応じて炭を焼く程度となってしまった。
木炭が大滝の歴史に深く刻み込まれているが、いま炭焼く人が消えかけようとしていることは、大滝の本炭の火が消える日も真近(まじか)なものを思わせる。

木炭生産量と販売収入の調（大滝製炭組合）

年度	生産量（俵）	収入（円）	年度	生産量（俵）	収入（円）	年度	生産量（俵）	収入（円）
昭和17		40,400	23	10,100	132,000	29	12,259	4,106,500
18		56,000	24	11,900	180,900	30	19,724	6,239,000
19		27,000	25	17,200	325,700	31	20,887	6,951,500
20		81,000	26	18,300	4,423,000	32	22,300	8,580,500
21		307,800	27	17,100	4,749,000	33	21,000	6,681,800
22		110,500	28	13,226	4,259,000			

組合による1俵当たり焼賃（基準単価表）昭和32～37年度
（円/俵）

銘柄別	32年度	33年度	34年度	35年度	36年度	37年度
1級(なら・ざつ込並以上)	290	260	280	290	310	330
2級(なら・ざつ上)	270	240	250	270	290	300
3級(なら・ざつ並)	250	220	220	240	260	

炭　価　（円/俵）

等　級	32年度	34年度
1級（なら込上）	550	420
2級（なら込並）	520	390
3級（なら込荒上）	500	330
（なら込荒並）	470	
1級（ざつ込上）	470	330
2級（ざつ込並）	440	300
3級（ざつ込荒上）	420	260
（ざつ込荒並）	400	

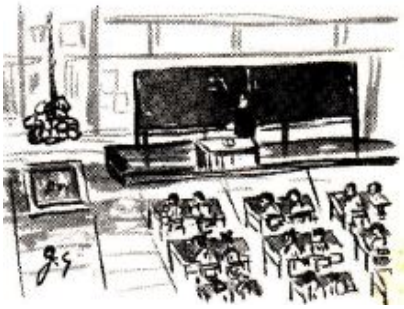
第10. 炭俵の変転

炭俵の表装は明治、大正のころは、俵の大きさも量目も不統一で、生産者各自の通宣な量目で包装した乱貫時代であった。 木炭の販売も、仲買人によって、各生産者の庭さき取引が行われていた。

昭和のはじめころから、正味10貫(36kg)の標準量目が規格され、同時に、県の本炭検査制度が始まり、 楢(なら)の上中下、雑木(ぞうき)込みの上中下の品質等級の規格が定められたが、昭和6・7年ころ正味8貫(30kg)と規格が統一されて、戦後まで続けられた。 昭和25年ころ、量目が1貫(15kg)詰めの規格となり、昭和41年長い間カヤを材料とした炭俵(すご)からビニール袋詰めの包装へと変っている。 消費者の生活様式と社会構造にあわせて、木炭の量目と包装が変化していった状態がみられる。

第11. 大滝分校の変遷

明治23年2月大滝に、村立中野尋常小学校大滝分教場が開校されたが、明治36年6月廃校されてしまった。 明治38年4月再び開校したが、そのつかのまの同年10月また廃校の憂(う)き目にあい、児童は杉の平分教場への通学を余儀なくされた。明治41年1月冬季間の季節分校が開設され、大正7年4月から常設分校に昇格して、昭和時代を迎えるという、幾多の変遷(へんせん)の経過があった。



大滝分教場の校舎は、集落中央の山神神社境内の側にあって、教員居住の2間(ま)付きで、一教室のカヤ葺(ふ)き屋根の平屋(ひらや)。先生1人で1年から6年生までの複式授業で教えていた。戸窓はすべて障子で、教室内に2つの大きな炉があって、冬になると大量の炭火で暖房した。天上からつるした綱に児童の弁当15、 6個を結(ゆ)わえて温める長閑(のど)かな学校生活がみられたものである。 この校舎を取壊し、昭和9年10月新校舎が新築され校庭の拡張工事が行われた。

昭和 22 年 4 月の学制改革(6・3 制)を受けて新制中学校が設置され中野村の中学生は飯坂中学校(信夫郡飯坂町と中野村との町村立組合による開設)に通学した。 大滝の中学生も片道 3 時間以上かけて徒歩で遠距離通学していたが、まもなく飯坂中学校大滝分校が(木炭組合事務所2階に)開設されすぐ近くに通学できるようになった。 昭和 23 年 4 月には、中野村立中野中学校が創立された。 それに先立ち昭和 23 年 1 月、中野中学校大滝分校舎として一教室 25 坪が小学校大滝分教場校舎を改造し棟続きに併設され、さらに昭和 25 年 5 月一教室増築された。昭和 31 年 5 月中野中学校は飯坂中学校(昭和 33 年 5 月に名称変更し大鳥中学校)に統合され中野中学校本校は廃校となった。 しかし大滝の中学校分校は飯坂中学校(33 年 5 月からは大鳥中学校)の分校として昭和 34 年 8 月まで存続した。 その後の大滝の中学生は福島交通の定期バスで飯坂の大鳥中学校へ通学するようになった、積雪でバスが不通になる冬季間は親と離れ大鳥中学校に併設された寄宿舎で生活しながら通学した。(福島交通のバスが大滝まで運行を開始したのは 33 年 8 月末)

小学校は昭和 36 年 4 月小学校大滝分校舎が新築落成し翌 37 年学校にテレビが設置されたが、昭和 42 年 4 月小学校大滝分校は本校に統合されて廃校となり、児童は中野小学校へ、10km 余の道を定期バスで通学することになった。 廃校後の校舎は大滝公民館として再利用された。

大滝分校の児童・生徒数 (人)

年 度	小学生	中学生	計	年 度	小学生	中学生	計
昭和26年	50	10	60	昭和34年	36	中学校分校廃止	36
昭和27年	35	23	58	昭和35年	34		34
昭和28年	40	22	62	昭和36年	26		26
昭和29年	37	25	62	昭和37年	31		31
昭和30年	44	19	63	昭和38年	25		25
昭和31年	37	25	62	昭和39年	23		23
昭和32年	33	不詳	33	昭和40年	21		21
昭和33年	36		36	昭和41年	14		14

※分校の改廃年月等は大滝会特別会員鹿摩貞男様が『中野小学校百年のあゆみ』、福島県報等の文献を調査、および昭和20年当時中学生だった大滝の諸先輩(大滝会:高野英治氏・木村義吉氏・柾木新吉氏)の記憶を聞き取り調査し両方を精査分析の上で纏めたものを基に訂正を加えました。
(令和元年12月25日)

第12. 村から町・市へ

大滝が所属する中野村は、明治元年(1868)当時から行政区域を変更しなかった数少ない村の一つであったが、昭和30年前後に全国的に促進された市町村合併に併い、中野村も、昭和30年3月31日、信夫郡(しのぶぐん)飯坂町、平野村、伊達郡湯野町、東湯野村及び茂庭(もにわ)村と新設合併で飯坂町となる。合併後の飯坂町の所属は信夫郡と定められた。この合併で大滝は飯坂町の区域内となった。

飯坂町となって10年余を経た昭和39年1月1日、飯坂町が、福島市に編入合併されたことにより、大滝は福島市に所属することになった。 村から町へ、町から市へ変るなかで、大滝の山川は、昔ながらの自然を保存した静かな山里には変りなかった。

（飯坂町合併 県報告示 昭和30年3月19日告示第295号 ・官報告示 昭和30年3月30日告示第698号）

（福島市合併 県報告示 昭和38年12月18日告示第955号 ・官報告示 昭和38年12月28日告示第160号）

第13. 定期バスの開通

昭和33年8月大滝・飯坂間に定期バスが開通された。1日2往復料金60円。 長い間の交通不更が定期バスの発着で解消された喜びは大きかった。 とくに冬期間の足が確保され飯坂の商店街へ1日がかりの買物が3時間もあれば用事が済せることは大助かりで、児童生徒がバスで通学できることは父兄ともども安堵(あんど)の喜びをかみしめた。

昭和41年5月栗子ハイウエーの完成で、福島--米沢間にも定期バスが開通し、飯坂行きのバス発着所とは別に停留所が設置されて福島市内の商店街に直通できることになり、便数(びんすう)も1日5往復になり、一層交通の便(べん)がよくなった。なお、集落内に設置されていた3ヶ所の飯坂行きのバス停留所が廃止されて、栗子ハイウエー西川橋畔に、新しいバス発着所が設けられたので、軒(のき)さきから乗車できなくなった不便が生じた。 料金は290円となり、バス運行会社には赤字路線の悩みがあるようだ。

第14. 栗子ハイウエー

昭和41年5月29日、一般国道13号が全線開通した。昭和36年着工以来5年の歳月と工事費78億8,600万円の巨額を投じて、福島・米沢間全長44.5km、幅8.5m の完全舗装の近代的な道路で、山形県と結ぶ最短距離の栗子ハイウエーである。

＊註 この栗子ハイウエーの完成によって、明治天皇が命名したとされている万世大路の名を持つ国道13号(昭和27年12月道路法改正前は国道5号)のうち山岳部はほとんどが廃道となり、それ以外は現国道13号（栗子ハイウエー）として利用されたほか一部は市道に認定された。

冬期間の交通が絶えていた栗子峠越えが新国道の完成により解決されたうえ、所要時間が大幅に短縮された。山形県との県境には福島県側に2,376mの東栗子トンネルと山形県側に2,675mの西栗子トンネルがある。 大滝地内にも大滝第1トンネルと大滝第2トンネルが新設された。大滝第1トンネルは昭和40年3月完成で、米沢側入口の近くに西川橋があって斜めに設置された赤い橋脚が、まわりの樹木の緑と際(きわ)だって、その美しさを印象づけている。＊ **（＊註＊の間は、平成25年5月20日に元建設省OB鹿摩貞男氏の監修により年月などに誤りが見つかり訂正を加えました、また一級国道13号線の表記は昭和40年4月の道路法改正で級指定が無くなり一般国道となっているためそのように訂正致しました。･･･同じく鹿摩氏監修による）**

大滝の墓地の大半が道路用地となり、昭和38年に改葬が行われた。 改葬作業は9月18日・19日の2日間にわたり、土葬 大人(おとな)52体、小人(こども)48体、火葬8体の仏様が 36戸の関係者によって丁重(ていちょう)に改葬が行われている。

完成した栗子ハイウエーは1日当り数千台の自動車の交通量があり、冬期間も交通が絶えることがない。

とくにスキー客20万人余が栗子国際スキー場に押し寄せるため絶えまない交通量である。それに引換え旧街道筋に取り残された大滝の集落は一気に廃虚化されてしまった。 栗子ハイウエーの工事中は大滝の人々も、工事に出て働いていたが、工事が終ると福島市街地周辺の建設工事に出稼ぎする者が増えてきた。

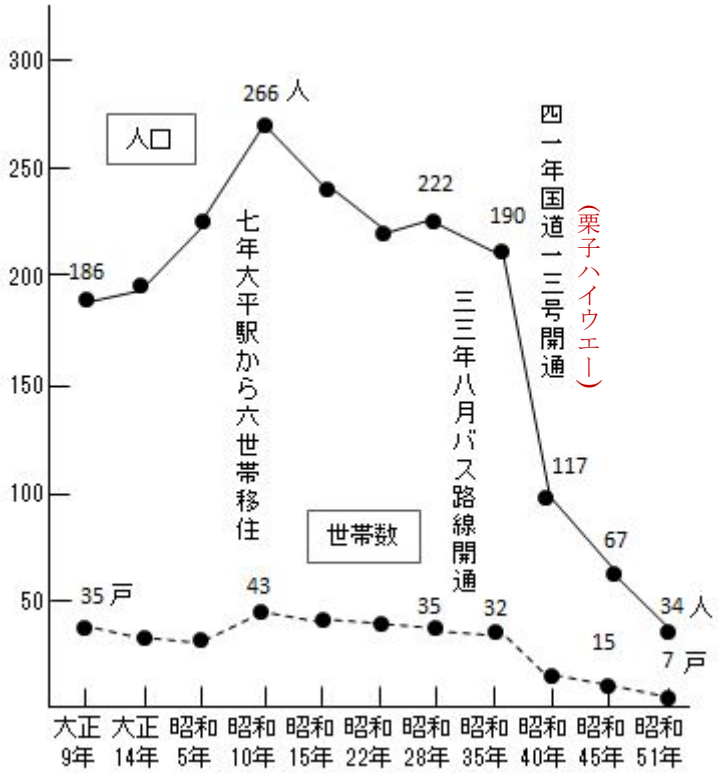
いまは廃道となった万世大路は、昭和8年から3年がかりで、ニッ小屋隧道（353.6m）、栗子隧道(864.9m) をはじめ道路の大改修工事が行われた。 現代のように機械化されない工事のため各地から800人から1,000人の人夫が集り、ツルハシ、シャベル、モッコの人海作業であって、工事用の砂、砂利を20数台のトラックで阿武隈川から毎日2往復で運ばれたものである。

第15. 過疎化

大滝地区が福島市となり、定期バスが発着し、電話が架設されて通信交通の便がよくなり、住まいのなかにカラーテレビ、冷蔵庫、電気洗濯機、扇風機の電化製品が普及され食生活も向上した。このように山間地の暮らし向きを高める高度経済成長が大滝にも訪れたが、この高度成長とはうらはらに、昭和35年ころから離村者が目立ちはじめ、それが昭和42、3年ころから一層激しくなり離村者が急増してしまった。

大滝の産業の重要な位置にあった養蚕は既(すで)に改植しないままの桑樹は空洞化したものがあって生育の限界がきて、昭和36年ころ養蚕は自滅してしまった。また主業の製炭は、大滝周辺の山々の樹木は切り尽くして深山に行かなければ原木の入手が困難となり、炭焼きの後継者がいなくなり、さらに重大なことは、プロパンガスや灯油に家庭燃料の座を明け渡した木炭は、その需要がジリ貧となって大きなショックをうけてしまった。火持ちのよい白炭は黒炭の2倍という価格が逆にアダとなって白炭離れとなり、需要が激減し、生産の先行きが暗くなってしまった。

この背景のなかで養蚕や炭焼き、山林労働で、昔ながらの生業が、高度成長とかみ合わなくなってしまい、手っ取り早い現金収入の場を失い、山間地での自給自足の生活が崩れて、大滝地区が消費経済のワクに組みこまれたとき、 大滝に生れ育った人々も、昔と比べ豊かな暮しを迎えたが、冬になると、雪に閉じこめられた冬の生活を嫌うことが引き金となり、とくに若い者にとっては、山奥の生活が、いかに不便なものであるかを感じられるようになって、離村者の急増に拍車をかけてしまった。



残された人たちは、これらの事態を憂(うれ)いて自活の道を開拓するため昭和26、7年ころナメコ等キノコの栽培をはじめ、昭和34年には1,300貫の出荷をしたが、いまはシイタケ栽培を主体とした経営に専念している。

さらに昭和35年に部分林5ヘクタールを設置し松2万本、杉1,500本を植林。昭和36年に3.5ヘクタールの茅(かや)刈り地を増設するなど多角的な共同経営による集落存立の基礎固めに努めている。

かつては43世帯266人をかぞえたこともあった大滝も、昭和35年には32戸、人口190人となり、木炭から灯油に家

庭燃料がほぼ移行してしまった昭和42、3年ころになると、炭焼きに見切りをつけて離村が相次ぎ、栗子ハイウエーの完成で旧街道筋に沿って取り残された袋小路の行き止りの集落地となって、過疎化現象が生じてしまった。大滝入口の旧街道の両側は、いつの間にか草むらに没し、背丈ほどの夏草のなかに崩れかかったカヤ葺屋根の空き家が点々と無残な姿をさらしているのがいたましい。

昭和51年9月現在の居住者	
渡辺　角右衛門	7人
高野　幸治	6人
渡辺　要一	6人
渡辺　清治	5人
須田　儀左衛門	2人
渡辺　広一	5人
三坂　勇	3人
合計　　7世帯	34人

昭和51年9月現在、明治のはじめに、この地を開拓して住みついた祖先の集落地を守り続けている7世帯34人が居住している。

大滝が誕生して 100 年。この間、集落の危機が何回か訪れ、それを切り抜けてきた。最初は明治 32 年国鉄奥羽線の開通によって、人々の交通と物資の輸送が鉄道に奪われて、宿場の使命が終わりを告げたときであった。第 2 回目は明治末期から大正初期にかけて、銅山として繁栄しておった、大滝とその周辺の蛇体鉱山・大滝鉱山・赤銅鉱山（中野鉱山）が相次ぎ鉱石を掘りつくして、*閉山されてしまったときである。

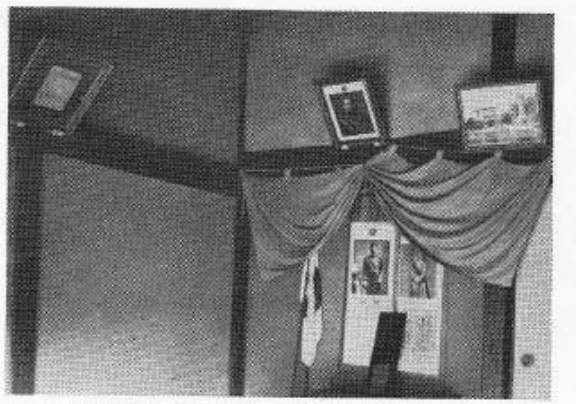
***赤銅鉱山閉山の原因は鉱脈の枯渇ではなく、昭和 32 年頃から始まった銅価格の国際的な暴落で不採算になったことが真因のようである。　　元中野鉱山(赤銅鉱山)住人遠藤常男氏談(平成29年) … 追記　平成29年10月紺野文英**

そして第3回目は昭和35年ころから高度経済成長がもたらしたエネルギー革命によって、木炭の需要がその影を失ったときである。いつの世も、文化を求めた人間社会だが、明治・大正の時代には、それなりに集落を守り続けてきたが、昭和時代の科学文化が最も発達して開花したとき過疎化に悩み、往時の賑いを再び取戻すことが至難となった現在が侘しいかぎりである。昔を偲ぶのは人情というものであろう。　　山あり川あり、栗子ハイウエーによって集落内の山肌の一部が少し変ったが、それにもまして、そこに住む人々の動きが大きく変ってしまったものが見られる昨今である。

第4章　大　滝　史　録

第1節　史蹟「明治天皇大滝御休所跡」について

明治14年錦秋の10月、畏しくも明治天皇は東北、北海道ご巡幸のみぎり、還路米沢より完成したばかりの万世大路をご通過になり、つぶさにこの新道をご視察遊ばされた。ご視察の途上、明治天皇は10月3日福島、山形両県境（栗子隧道福島日）において、万世大路の開通式典に臨まれ、次いで二ッ小屋、大滝、円部の各御休所に御駕を休ませられたのである。


明治天皇御休の間（渡辺要一氏宅）

上記中野村御休所 3 ケ所のうち、家屋の現存するものは大滝の渡辺要七氏（現渡辺要一氏）宅だけで、今では全国的にも貴重な存在である。

当時の大滝には人家の態をなしていた家としては中屋、 西村屋、宮内屋の 3 軒の旅人宿だけで、御休所として中屋旅館(渡辺要七氏宅)が決った。

渡辺家は 間口 3間 、奥行き 5間 の勝手と、北にこの日のために

新築した4間半に3間の8畳2間があり、この2間が御小休所で、3尺の廊下を3方に廻した奥の1間の床、押入付の間が天皇の室、次の間が待従長の室であった。

座敷の床柱、および3面の半柱には菊の御紋章が打ち付けられてあったが、いつの頃からか紋章はなくなり、その跡だけが残されている。

又、半田多五ェ門宅は参議以下の重臣達の休憩所となった。 半田多五ェ門は明治天皇の御休所となった渡辺要七宅(中屋)前まで外御膳水として清水を引水して献上した。

明治天皇はお立ちに当って、御下賜金として特に渡辺要七に金35両、半田多五右ェ門に金5両を賜わった。(渡辺家には今もなお、御小休所札と御下賜金のお墨付包紙が所蔵されている。)

明治天皇御休みの部屋はその後も、今次第2次世界大戦前までは、御神殿と称して常に清浄にして保存されていた。明治41年9月12日ニッ小屋、及び円部と同時に屋敷前に「鳳駕註蹕の蹟」の記念碑が建てられた。
この家は、昭和10年11月文部省令第400号で史蹟に指定され戦前までは村が管理して、修繕のときは国庫より補助金が交付されていたが、戦後は自分で管理することになった。家屋と碑も自由にしてよいとの通知をうけたが、由緒ある家及び碑であるので、将来ともできる限り自分で保存して行く考えであると現主は言っている。

なお、昭和13年11月、当時の碑の側に30cm角、高さ3mの御影石で刻んだ新しい碑が並んで建てられた。

〔参考〕

このときの御巡幸は明治14年7月30日に宮城を御発輦になられたが、畏しく天皇は御行幸に先き立ち、御供奉の官員に対し、次のとおり御下命になった。

(1)地方人民を役すること勿れ。

(2)館舎の適否を云うこと勿れ。

(3)履して席に上ること勿れ。

(4)権威を張ること勿れ。

(5)酔歌すること勿れ。

又、沿道の住民に対しては、次のとおり有難い御沙汰を発せられており、聖君明治天皇の御徳が今更ながら忍ばれるところである。

(1)学生、生徒等送迎のため衣服を整え、或は帽履を新調するに及ばざること。

(2)仏だん、墳墓或は不浄所等掩蔽に及ばざること。

(3)虚飾に流れ、無益の失費無之様可致こと。

(4)献上物は一切不相成事。

(5)通輦宿駅、御休泊の地において、国旗、提灯等相揚げ、人民各自祝意を表することは苦しからざること。

(6)庶民営業平日の如く、往来も差止めするに及ばざること。

(7)拝礼は立礼にて差支なく、蹲居その他土地の習俗に従いて苦しからざること。

御駕は7月30日東京を御出輦後、10日目に郡山をご通過になり、「みちのくを福島・藤田・大河原と進まれ、14日目に仙台にお入りになり、21日目盛岡、30日目青森着、青森から海路北海道に渡らせられ、北海道は札幌・千歳・函館等を御巡幸になり、41日目青森に再上陸、弘前から裏日本にお廻りになり、秋田・横手・鶴岡・酒田・新庄・山形・米沢を経て東京御出輦後実に67日目の10月3日栗子峠を越えられたのであった。東京御還幸は77日目の10月13日である。 (この項は「東北建設局福島工事々務所編」「栗子トンネルエ事誌」及び「福島県発行明治天皇御巡幸録」を参考とした。)

第2節 名所「大滝不動尊」と「大滝名」の由来

大滝より南西へ大滝川に沿い山道を遡(さかのぼ)り、古屋敷(ふるやしき)を経て(*注)約7kmの上流に大滝の「お不動様」として親しまれる滝あり、古くより霊験あらたかなるものありとして、 近在の大笹生(おおざそう)、中野福島方面はもとより、山形、宮城県方面からの信者、講中の参拝多し、滝の傍(かたわ)らに不動尊を祀(まつ)る。明治初期の項、俵上人(しょうにん)(大笹生谷地出身)によって開山されたもので、 毎年早春(八十八夜)にお祭りありて、滝にうたれて行をする者、祈願をする者、又お籠(こ)もりをする者など行者信者で賑う。

この滝の奥約3kmの上流、行きつきて沢果てるあたり突如として見上げるばかりの大滝が展(ひ)らける。高さ約30m その景観あたりをはらうものあり。
大滝の地名、正にこの滝に由来すると云う。早春雪消(ど)けの滝の景観は見事なりと伝えられる。

ただ、惜しむらくは、通常の水勢乏(とぼ)しく僅(わず)かに岩肌を伝う数条の水、絶壁より滴(した)たり落ちるのみ、若(も)しこの滝の水勢多ければ観光客などを集めたらんに、惜しきことなるべし。

霊験あらたかな大滝不動尊
(51. 6月渡辺政治撮影)

(源右ェ門記)

かさこそと 落ち葉ふみしめ 滝不動
身を清め 唯一念に 滝を浴び

読人 : 八幡 照(飯坂町行者)

(*注) ・・・原文には大滝集落からお不動様まで約7kmと記載してあるが、地図上の実測値では3km程度しかない。当時の人達は山道の悪路を移動しており 7km位(徒歩で 1.7 時間弱)は有るように体感していたのかもしれない。…距離を正確に実測する手段を持ち合わせていなかったであろう当時の大滝集落住民は距離を歩行時間でおおよその見当をを付けていたことは十分に想像できるところではある。

第3節 想 い出

(1) ふるさと夜話

第1話 兎山の想い出

故郷大滝の思い出に、冬の兎山がありましたね、 あの頃そう、私が17、8才から20才位の事でしたから、昭和5～10年頃でしょう。 あの当時大滝では、12月末から2月にかけて兎山が盛んに行われました。何しろ魚を食べる事はあっても肉類というものはめったに口にした記憶がない程、その頃の大滝では兎肉は山鳥(キジ)の肉と共に大変貴重な蛋白栄養源であったわけです。

旧正月頃になりますと、それまでに降り積った雪が日中に融け、夜凍りついて3～4尺(100～ 130cm)の雪の上も、自由に渡って野山の遠歩きも楽にできたのでした。 その頃、大滝には通称「八やん」(故渡辺勇八氏)で通る鉄砲の名人がおりました。 その外に斎藤七蔵さん、吾妻定さん、渡辺要吉さん等が猟師の定連でした。それから中野本村、

飯坂、大笹生方面から猟師がやって来て、急に兎山の話しが決まる事もありました。

私も猟が大好きでしたので勢子としてよく参加しました。その構成は鉄砲打ちの人が3～4人、勢子4～ 5人というのが普通でした。人数が揃うと今日の猟場に出発です。冬山仕度もきりりと、*おそふき草鞋にかんじきを履き鉄砲を背にした猟師達と、早朝の粉雪をキュコ、キュコと踏み鳴らして進む音は一種の感動をもって伝わって来たものでした。　（*おそふき草鞋とはつま先まで筒状に藁で編んだ長靴形状の草鞋のこと）

兎山の方法は、先づ猟師が兎の居そうな山を選び、山の頂上或は中腹に物音を立てず「ソーッ」と程よく間隔を空けて立ち、同時に勢子の方も山すそ又は、沢の方に廻って待機します。やがて猟師の方から口笛で開始の合図があると、 さあ勢子の出番です。 突然大声をあげ、木を叩くなどしてホーイ、ホーイと一斉に山の頂上猟師の待つ方向へと兎を追い上げるわけです。 しばらく追ううちに、兎の飛び出すのがちらりと見える事もあり、「そら行ったぞ」と元気百倍、大声もいっそう弾みがつくのでした。やがて頂上からズダーンと銃声が峯々をふるわせ、沢々にこだまして、時には射たれた兎がもんどり打って、ころげ落ちてくる事もありました。それを拾い取って背中の*「すかり」に入れ、また大声をあげながら山を登るのですが、やがてあちらからも、こちらからもズダーン、ズダーンと銃声が轟きわたり、我れ知らず心の勇み立つのを覚えるのでした。　*「すかり」---藤やアケビ等の蔓で編んだ背負い網籠（現在のリュックサック）

猟場で記憶に残るのは、3匹くぼというのがあり、何時の猟でも必ずと云ってよい程3匹獲れるのでしたが、決まってそれ以上は獲れないのです。思わず3匹窪とはよくつけたものと感心したものでした。

こうして、午後3時、4時頃まで延べ10里(40km)程も雪の山中を、時には股まで雪に歿しながら登ったり、下ったりする勢子の運動量はかなリハードなもので、ある初参加の若者は夕方までに動けなくなり、猟師に背負われて帰ったなどの笑い話もありました。 私も一番最初に参加した時には、帰りの雪道は精も根もつき果てて棒のようになった足を引きずりながら、かろうじて家に辿り着き、その晩は足腰、いや全身の筋肉が引きつり、痙攣してのた打ち廻る程の苦しみを経験したものです。 それ程の苦しみにもこりず、兎山と聞けば欠かさず参加したのですから、私も余程猟好きだったのですね。

こんな私の猟好きが、名人猟師の勇八さんにも云わず語らずの内に伝わったのでしょうか、数年後に不思議な心霊現象で、勇八さんの最後を身をもって予感する事になりました。

第2話 猟師山に眠るの記

あれは私が兎山に熱中して、時には山仕事も投げ出して参加するので、私の父から勇八さんのところへ口説きの小言があったそうで、勇八さんが『仕事を投げ出して来てはいけないよ』と笑いながらたしなめてくれた2、3年後の事です。その年もおし詰まり、もう大晦日も日前といったある日、たしか一日中どんよりとした薄暗いような空模様で、降り続いていた雪が夕方から急に激しくなり、山仕事が遅れて帰り途はとっぷりと暮れ、足もともおぼつかない雪道を急いで「ヤビツ」を過ぎ、漸く「まんじゅ屋(吉田富蔵氏宅)」が見え出したところまで来かかった時、たしか6時半か7時頃だったでしょうか?、不気味な程蒼黒い墨を流したような、空が抜落ちたかとばかりに、もろもろもろと雪が悪魔の使者のように降りかかり、人家の灯が見えているのに慄然とした身ぶるいを感じ、何か不吉な事がどこかで起っているような予感と云いますか、不安と云いますか、背筋の冷めたくなるような、えも言われぬ寂しさを感じ、「誰か亡くなったようだ?」と心の奥底に呼ぶものがありました。

後で思えば、おそらくこの時に勇八さんの身の上に大変事が起っていたのだと思い当るのでした。

その日の真夜中12時頃、「ドン、 ドン、 ドン」と表戸を叩く音を夢うつつに聞いていました。母が『誰れ？』と聞きま

すと、男の声で『八やんが猟に出たまま、まだ帰らないんだよ、探しに行くからすぐ来てくれ』と叫ぶのでした。

それは大変と飛び起き、身仕度をして大急ぎで胡桃平の勇八さんの家にかけつけました。すでに大勢の人が集まっており、2手に別れ東方面、西方面を同時に捜索する手筈がきめられ、私も東方に加わりまして、真夜中の山中をカンテラの明りと前を行く人の足跡を辿りながら歩きました。

降り積っだ雪に足を取られそれは難行軍でしたが、勇八さんの安否が気がかりで必死の思いでした。誰かが『転んで怪我でもして動けなくなっているのではないか、この明かりを見たら声をかけてくるのではないか?』とつぶやくのが聞えました。私も一心に勇八さんの無事を念じていました。 しかし私達の受持った方面には手掛りらしいものは見当りませんでした。 言い忘れていましたが勇八さんはスキーが達者で、その日もスキー履きで猟に出かけたとのことでした。捜索地域に手掛りがないので、一応勇八さんの家に引揚げて別の方面を捜す相談をしていましたら、西方面へ捜索に出ていた要吉さんが来まして『見っかったい』と報らせて参りました。 皆一斉に『よかった』と口々に言いました。『それで元気か?』と年長者の方が尋ねますと『だめだったい』と要吉さんはがっくりと肩を落してうなだれました。

『やっぱり……』全身の力がいっぺんに抜け落ちる思いでした。 発見されたのは「新沢」の向いの通称「カーコ沢」と云う所の谷間に、あい(新雪なだれ)の中にすっぽりと埋まっていたとのことでした。国道がもうすぐと云うところまで帰っての災難でした。

多分激しく降りしきる雪に帰りを急ぎ、沢の斜面を一気にスキーですべり降りたのでしょう。折から降り積った新雪がスキーで断ち切られ、どおっと雪が崩れ落ちて「アっ」という間もなく勇八さんを呑み込み押し流してしまったのでしょう。 背中には、しっかりと一羽の兎が背負われていたとの事でした。私は冷たく帰らぬ人となった勇八さんと対面した時はじめて、ああ昨日の夕方のあの胸さわぎに似た不吉な予感、親しい人と永別するようなあの得体の知れない寂しさはこの事だったのかと合点がいったのでした。

このことは今まで誰れにも話したことがないのですが、ふるさとの出来事の一つとして今こそ話すべきかと考え、又この機会に勇八さんの霊をなぐさめるのに少しでも役立てばと思い、書き留める気になりました。

勇八さんの霊よ安らかに眠って下さい。

第3話　雪崩れに遭い、命びろいの事

雪崩れの話が出たついでに、もう一つ忘れ難い体験をお話しいたしましょう。これは単に私1人の思い出ではなく、私の先輩諸兄の方々と一諸に体験したことなのです。これを読まれたら「ははぁ--、あの時の事か」と頷かれる先輩が何人かいる筈です。

それは昭和7、8年か10年頃のことだったでしょうか? 長いような短かいような正月休みも終ってそろそろ山仕事の炭焼きに取りかかるべく、部落総出で道付け(炭焼きの現場へ通う道作り)の作業をしていました。 所は確かお不動様方面へ向う途中の沢でした。 その日は朝からめっぽう良いお天気で、ぽかぽか照りつける太陽の暖かさには春の日差しが感じられ、作業もはかどり私達若者のグループは、とある沢の斜面の下に一列に並び作業をしていました。詳しくは忘れましたが一緒の方々は高松さん、春吉さん、故笹木俊男さん、少し離れた上手には兵蔵さん、御代治さんなどの諸先輩と年配の方も2、3人おりました。皆んな一生懸命スコップを振るい、雪をかき切り堀りひろげ、踏み固めるなどしているとき、コロ、コロ、コロと雪団子が斜面の上の方からころげ落ちてきましたが、皆んな作業に打ち込ん

でおり、深く気にも止めずにいました。 そのうち頻繁に落ちてくるので何気なしにひょいと顔を上げて上を見上げたとたん『アーっ』と声にならない声をあげていました。 どうでしょう、今の今まで真白で平坦に見えていた沢の急斜面が、真2つに折れ数10m のところで「くの字型」を手前に向けたかっこうで私達の頭上に、すっくと、正(まさ)にすっくとそそり立っているではありませんか。 とっさに『雪崩(なだ)れがくるぞう』と誰かとほとんど同時に叫びながら、上手下手(かみてしもて)と2つに分れて必死に逃げました。 急げば急ぐ程足がもたついて一向に進まずそのもどかしさ、やっと安全地帯かと思われるところへ駈け込んだとき、背後を さーっと 冷たい雪しぶきが通り過ぎ、ピューと吹きつける風に振り返って見ると、今まで私達が作業をしていた沢の斜面は、なだれ落ちる雪の奔流(ほんりゅう)の真只中にあり、後から後から全斜面の雪がしぶきを上げて谷底へ滑り落ちるのが見えました。『アっ』と息を呑み、雪の奔流(ほんりゅう)に目をやりますと「ゴー、ゴー、バリバリバリ」と物凄い音を立てながら雪崩(なだ)れは忽(たち)まちはるか下の小川の流れを堰止め、勢い余った雪が今度は「もり、もり、もり、もり」と激しいエネルギーで反対側の山の斜面を駈け登り埋めつくすではありませんか。 何んと云う恐ろしさ、思わず膝頭(ひざがしら)がくがくと鳴り、脇下(えきか)に冷たいものを感じていました。みんな足から力が抜け落ちそうなのをやっとこらえて立ちつくすのでした。もし、もう少しでも逃げるのが遅かったらと思うと ぞーっとした事でした。

雪崩れが納まってから『今日は帰ったら命びろいをしたお祝いをしなくちゃ』と、誰かがぼそりとつぶやいたことでした。あれから40年以上もたちました。諸先輩各位もお元気で大慶至極(しごく)に存じます。

小生もお蔭様で……ではご気嫌(きげん)よう。

（ふるさと夜話し 完）

（2） 三人一句の会

ときは昭和の始め、雪深い正月の頃、場所大滝分教場、紺野一枩(いちまつ)氏の発起、渡辺幸蔵氏、小松道栄などが骨折(ほねおり)役で三人一句の会が開かれた。

どんな風にしたかと云うと、3人1組で1句をまとめる。 即(すなわ)ち1人が上の句(5字)を読み、続いて次の人が中の句(7字) を読む。最後の1人が下の句(5字)を読むのである。 こじつけでもいいから何か意味のある1句であること。面白いものだった。 なぜ面白いか、さあ紺野、渡辺、小松組の結果をみよう。

上の句が紺野一枩さんでした。『私は下手(へた)だが』と云って上の句5字（くたびれた）を書いて、それを封じてぽんと箱の中に入れる。次は渡辺幸蔵氏、一枩氏が何を書いたか皆目知らない。 気向き次第に中の句7字を（あの娘のひざに）と書き捨ててこれを封じて箱の中に投げこむ。 さあ、下の句小松の番だ。

わたしも誰が何を書いたか一切わからない。 さてなと首などかしげつつ下の句5字を書いて、ぽんと箱に入れた。

冬はいつまでも長くて嫌だから、心の底から春が恋しくてたまらず（春が来い）とやった。

さあ開封だ。（くたびれた、あの娘のひざに、春が来い）とでた。

『どぅだ、どぅだ、 3人のをまとめると1つの句として意義あるものになるか?

（くたびれた、あの娘のひざに、春が来い）

『こりゃ一体何んのことだね、わけがわからんじゃないか』 等々、一生懸命意味を研究する。 そこが面白いのだ。

「くたびれた」それはそれでよい。「あの娘のひざに」だって、なかなか味なものだ。

「春が来い」この長い冬、誰だって春は待ちくたびれる。 さしつかえない。

「しかし、 1句としてまとまった場合、意義が無いじゃないか」、「いや無くもない」。

なにかにと3人で何べんも首をかしげて味わってみる。「は縫い合せで意味をなさない」「いや、は縫い合せで無理にも意義づけるのがいい方便じゃ……」など、「くたびれた、あの娘のひざに、春が来い」それを3人で何べんも、何べんも読み、くたびれた。

一杏さんが、あきれて「はてな、ちっとも意義がなければ別にもう一度やり直そうよ」、幸蔵さんが「いやお待ち、どうやら意義がありそうだ」と苦労している。「小松の奴が」、「わたしがね……(枕かな)と出せばまとまったのにね」 ちぐはぐなところに面白味があるのかも知れない。

「ちぐはぐでもいいじゃないか、無理に小理屈(こりくつ)をつけて3人1句ならいいじゃないか」。 「くたびれた、あの娘のひざに春が来い」味のある1句だぞ、よく読んでみろ、むしろ名句だ。 あの娘のひざに春が来るぞ、どうだ読み直してみろ 」「くたびれた、あの娘のひざに春が来い」とてもとても名句どころか妙句だ。 さて各々(おのおの)7組のを出し合って互選の結果、いやはや紺野、渡辺、小松組が実に第1等、賞品は清酒花春。

それから一同は大はしゃぎ、「雪は残れど春は来ぬ、花まだ咲かねど春は来ぬ」 呑めや歌えの、どどんどんひゃららの大滝の冬、懐かしくも懐かし、やがて、あの娘にも、この娘にも、どこの娘の膝にも春が、、、勿論(もちろん)だ。

しんみりと大滝を回顧(かいこ)する。

1976年10月　小 松 道 栄

(3)　テレビ共同視聴設備建設秘録

昭和37年8月、大滝の全家庭に待望のテレビが入った。

日本で始めてNHKがテレビ放映を開始してから約10年目である。その頃全国平均のテレビ普及率は既に70%になんなんとしており、茶の間の娯楽として、文化のシンボルとしてテレビは家庭生活の中で欠かせないものになっていた。大滝にテレビ導入がおくれたのは、山合(やまあ)いの集落のためテレビの難視聴地区だったからだ。 しかし目前に東京オリンピックの開催(昭和39年)も控えて、テレビに対する村人の願望は日増しに大きく、時の製炭組合長高野孝治氏始め有志の人達は、毎晩のように組合事務所に集って対策を協議した。

大滝にテレビを導入するためには、共同アンテナを建設してそこから有線で各家庭のテレビに結ばなければならず、その為、適当な山頂に中央アンテナ、及び数ヶ所に増巾器を設置する外、 延長2,000mにも及ぶケーブルの架設が必要で、多額の資金と更に電波法の規制を受けるところから、郵政大臣や関係方面の許可を要するなど、手続きの面でも多くの困難があった。

そこで、ちょっとやそっとの事では実現しそうもないので、昭和37年春早々、高野孝治氏以下7名の代表委員をたて、本腰を入れて関係方面を廻り強力に、ねばり強く運動を続けた結果6月に漸(ようや)くNHKのOKをとりつけ、その上35万円(総工費の45%)の助成金を戴き、その他関係官庁とも協議が整って目出度(めでた)く建設されることになったのである。設備及び経過の概要は次のとおりであった。

1．組合の名称

大滝テレビ共同聴取組合（組合員31名）

役　員　（組合長）　高野　孝治　　（副組合長）　紺野　兵蔵

（理　事）　佐藤　清　　（理　事）　須田　和市

（監　事）　渡辺　要一　　（監　事）　渡辺　広一

（庶務会計）　渡辺　清治

2．設備の概要

1）増幅器4台　　テレビ31台（30家庭、1分校）

2）増幅器の設置場所および出力

増幅器	設置場所	チャンネル	入力（デシベル）	出力（デシベル）
第1増幅器（主力）	分校前山の山頂（受信点）	第2チャンネル 第9チャンネル	70	110
第2増幅器	薪炭組合事務所	同上	73	108
第3増幅器	薪炭倉庫	同上	72	110
第4増幅器	長老沢 油井武宅内	同上	75	116

3）ケーブル地上架線の延長　1，700m

3．工事進行計画

工事開始　　昭和33年7月7日

工事落成　　昭和37年8月15日

聴取開始　　昭和37年8月20日

4．工事費および支弁方法

1）　工事費　　総額80万円

2）　支弁方法　　自己資金45万円（加入者30名均等負担・製炭組合一括立替代納）

NHK助成金35万円

なお架線については東北電力会社及び電々公社と交渉して夫々（それぞれ）電力柱16本、電話柱6本に共架の許可をとり、電話柱については当時で年額　3,240円の使用料を納入していた。

組合は、その他施設の維持費として加入者30戸に対して1ヶ月100円の使用料を微収（ちょうしゅう）して運営に当った。この施設は現在もなお、在住者7戸によって運営利用されている。

（資料。昭和37.6.20郵政大臣あて「大滝有線放送設備設置と業務の開始届」高野孝治氏蔵）

0　第4節　ふるさと讃歌

（1）大滝四季の歌

作 詞　小 松 道 栄

春

1. 雪は残れど春はきぬ、花まだ咲かねど春はきぬ
　雪の消え間にうち集い、いざや遊ばん草履はき
2. 日はよく照りて雪解けの、流れささやく小川辺(べ)り
　今朝鳴き初(そ)めしうぐいすの、初音長閑(はつねのど)けき幸の里
3. 朝日に匂う山桜、山神様(やまがみ)にらんまんと
　咲けば野の鳥みなうたう、平和を舞うや村の人
4. 若葉の風にカッコ鳥、ほがらに鳴きて山々の
　あなた、こなたに青煙り、炭焼く里の長閑けさよ

夏

5. 夏の初めの心をば、姿にみせて藤の花
　うす紫に咲き匂う、小川岸辺の涼しさよ
6. 月東天に昇る頃、葭澤橋にたたづみて
　聞けや涼けしかじかの音(ね)、何にたとえん事もなし
7. 15, 16, 17と、山野はこれぞ我が里の
　老いも若きも皆出(い)でて、月下に狂う盆おどり

秋

8. お祭り来ればみ社(やしろ)の、氏子一同皆出(い)でて
　神の心を敬いし、どんどんひゃららの大祭り
9. 天にもとどく喜びの、歌のあるじは小学生
　手籠(てかご)の中に溢(あふ)れしは、　ぶどう　あけびのえものなり
10. ああ吟鈴の虫の声、いま絶え絶えとかすれたり
　　哀れさすがは秋なれど、燈火読書の好季節

冬

11. 紅葉(もみじ)散らぬに雪降りて、西川山は初化粧
　　驚き顔に人は皆、冬来たりぬと告げ合いぬ
12. 屋根の上にも雪五尺、他人(ひと)はまことと思わざる
　　我が大滝の大雪は、今を盛りと荒れ狂う
13. 福はお内に鬼は外、福はお内に鬼は外
　　たとえ余寒は残れども、春遠からずの山の里

(2) ふるさと雑詠

作 詞　斎藤 源右ェ門

1. 裏の小川も西川山も　ふるさとさんは想い出ばかり
あの家、この納屋(なや)かくれんぼ　胸に溢れる幼い日
2. 人は素朴に里和(なご)やかに　山にゃ炭焼くうす煙り
働く若者希望に満ちて　ふるうナタ、ノコ陽に光る
3. 春は山菜、蕨(わらび)や蕗(ふき)よ　夏は小川の「かじか」や岩魚(いわな)
突いたあの友あの頃恋し　流れは今も変らねど
4. 山から帰ったお父(と)うの背(せな)の　日向臭(ひなた)さも今では昔
「すかり」開(ひろ)げりゃ　あけびや栗が　ごそりころころころげでた
5. 盆の踊りやああ秋祭り　若さ燃やした運動会も
冬は夜学に演芸会に　つきぬ想い出　師よ友よ
6. 胸に生きてるふるさとさんは　今じゃ苔むす過疎の里
時の流れじゃあきらめきれぬ　せめて燃やそよ胸の灯を。

(3)短歌集

開けゆく、国の為とて今日もまた
重ねて越ゆるも栗子山かな
(明治14年作) 三 島 通 庸 (時の山形県令。次いで福島県令となる)

よしたとえ、波よ嵐よ荒れもせよ
心和(なご)まん大滝の名に
(昭和49年作) 小 松 道 栄

萌(も)えさかる若さ羽ばたき、うわの空
狂えとばかり唄う大滝
(昭和49年作) 小 松 道 栄

萌えるもの ああふるさとの
息吹(いぶ)きみゆ
(昭和51年作) 斎藤 源右ェ門

長き冬、ものすごき雪も恋しけれ
俄(にわ)かの春に鶯(うぐいす)の声
(昭和2～ 3年頃作) 小 松 道 栄

百年(もつとせ)の歴史を秘めて自然に還(かえ)る
ふるさとの姿ここに止(とど)めん
(昭和51年作) 紺 野 健 吉

ここかしこ別れて住むも ふるさとに

大滝会の碑など建てんか

（昭和49年作） 小 松 隆 亥

花こぶし咲かねど雪は古びたり

それ春よとて鶯の呼ぶ

（昭和2～ 3年作） 小 松 道 栄

一生は、思いがけなきさまざまの

ことはあれども大滝の山

（昭和49年2月作） 小 松 道 栄

誰(た)が罪ぞ この草丈や 故郷訪(と)う。

実家訪(さと)えば 草に出入りを 拒(こ)ばまれし。

草に傍(た)ち 四方にさがしぬ幼なき日。

人稀(ま)れに 苔むす軒を 連ねたり。

こだま呼ぶ 西川山よ 雲の峯。

墓枯梗 故里は過疎鷹舞えり。

（以上6点、昭和51年作） 斎藤 源右ェ門

第5節 大滝の主なる行政協力団体、文化団体等

1.区 長

初 代　二階堂 廣(広)吉　　２ 代　渡 辺 清

３ 代　佐 藤 嘉右ェ門　　４ 代　佐 藤 武 雄

５ 代　須 田 儀 市(この頃から町内会となる)　　６ 代 渡 辺 要 一

2.村会議員

須 田 儀 平

須 田 辰 蔵

渡 辺 幸 蔵

3.学務員

初 代　高 野 宮 治

２ 代　渡 辺 要 吉（後の木村要吉氏）

4.消防団(大正15年4月結成)

（団長）

初 代 須 田 辰 蔵　　２ 代 佐 藤 武 雄

３ 代 渡 辺 幸 蔵　　４ 代 紺 野 一 杏

５ 代 斎 藤 七 蔵　　６ 代 渡 辺 要 一

７ 代 紺 野 兵 蔵　　８ 代 渡 辺 角右ェ門

5.製炭組合(昭和5年7月創立)

(組合長)

初 代 斎 藤 幸五郎　　２ 代 木 村 作右ェ門

３ 代 太 見 吉 佐　　４ 代 高 野 孝 治

(事務員・常勤)

初 代 渡 辺 慶 治　　２ 代 渡 辺 清 治

6.民生委員

初 代 佐 藤 武 雄　２ 代 渡 辺 幸 蔵

３ 代 紺 野 兵 蔵　４ 代 渡 辺 要 一

7.統計調査員

初 代 佐 藤 武 雄

２ 代 佐 藤 勝 雄

8.青年会(大正14年結成)

(会長)初 代 佐 藤 武 雄　　２ 代 渡 辺 幸 蔵

３ 代 森 笠 潔　　４ 代 吉 田 富 蔵

５ 代 高 野 孝 治　　６ 代 紺 野 兵 蔵

７ 代 山 岸 鶴 蔵

(分団長) 8 代 小 林 誠　(これより中野青年団に統合、大滝は第5分団となる)

9 代 斎藤　源右ェ門　　10 代 後 藤 市太郎

11 代 蒲 倉 要　　12 代 渡辺 角右ェ門

13 代 須 田 和 市　　14 代 渡辺 角右ェ門

15 代 須 田 昭 治　　16 代 渡 辺 実

女子会(大正14年結成)

(会　長)　初 代 小 松 す い　　2 代 斎 藤 橘(きつ)

(副分団長)　３ 代 渡 辺 ユ キ (これより中野青年団に統合、大滝女子会は第5分団となる。)

４ 代 蒲 倉 ミ ヤ　　５ 代 須 田 末 子

P・T・A

(会　長)　初 代 高 野 孝 治　　２ 代 紺 野 兵 蔵

３ 代 渡 辺 角右ェ門　　４ 代 須 田 和 市

11.婦 人 会

(会　長) 斎 藤 き つ

12.国防婦人会

(会　長) 斎 藤 き つ

13.国民義勇軍婦人部隊

(部隊長) 斎 藤 き つ

大滝部落における文化活動は、大正の末頃から今次大戦前(昭和15～ 16年)頃までが最も盛んで、この頃には上記各団体の他少年会・少年火防団・青年修養会・副業組合・養蚕組合・納税貯蓄組合などが結成されて、指導者にも人を得、青年層を中心に部落を盛り上げて大いに活躍、大滝100年の歴史を通じ最も充実した云わば開花、結

実の時代であった。その蔭にはこの時代に名訓導として部落民から等しく敬い、慕われた小松道栄先生(大正15年4月から昭和6年3月まで在職)、 熊田為治先生(昭和6年4月から昭和12年3月まで在職) を始め、歴代優秀な先生方に恵まれ、その良き御指導を受けたことを忘れてはならない。

第6節 大滝分教場(分校)歴代教職員名簿

1.小学校分校　(明治23年2月～昭和42年3月廃止)

(初代) 稲 葉 包 通　　(明治23年2月～勤務年数不詳)

↓　(この間不詳)

紺 野 吉 三 郎　(大正11年4月～大正15年3月)
小 松 道 栄　　(大正15年4月～昭和6年3月)
熊 田 為 治　　(昭和6年4月～昭和12年3月)
今 泉 伝 恵　　(昭和12年4月～昭和14年3月)
船 山 広　　(昭和14年4月～昭和17年3月)
佐 藤 武 雄　　(昭和17年4月～昭和28年3月)
紺 野 百 合 子　(昭和17年4月～昭和18年3月)
斎 藤 き つ　　(昭和18年4月～昭和21年3月)
赤 塚 忠 子　　(昭和21年4月～昭和28年3月)
赤 塚 忠　　(昭和28年4月～昭和31年3月)
岸 波 芳 治　　(昭和28年4月～昭和31年3月)
加 藤 エ ツ　　(昭和31年4月～昭和35年3月)
加 藤 栄　　(昭和31年4月～昭和35年3月)
笠 原 参　　(昭和35年4月～昭和37年3月)
八 島 重 子　　(昭和35年4月～昭和36年3月)
佐 藤 育 子　　(昭和36年4月～昭和37年3月)
板 垣 正 二　　(昭和37年4月～昭和39年3月)
加 藤 千 代　　(昭和37年4月～昭和39年3月)
平 山 典 秋　　(昭和39年4月～昭和41年3月)
高 島 正 子　　(昭和39年4月～昭和40年3月)
松 浦 由 紀　　(昭和40年4月～昭和42年3月)
大 場 真 一　　(昭和41年4月～昭和42年3月)

2、中学校分校　(昭和22年～昭和34年8月廃止) 、昭和22年大滝木炭組合2階を間借りして開校された、
昭和23年には中野小学校大滝分校を改築しそこに併設された)… **平成25年9月追記(紺野文英)**

小 松 隆 亥　　(昭和22年～不詳)
小 松 昭 大　　(不詳～昭和29年3月)
西 坂　 修　　(昭和29年4月～昭和34年8月)

第7節　大滝周辺の主なる動・植物

＊ 思い出すままに動植物名を追記した （H25年6月紺野文英）

〔動 物〕

月の輪熊、かもしか(大平(おおだいら)地区)、日本猿(烏川(からすがわ)地区)、(狐、貂(てん)、鼬(いたち)、兎、穴熊、まみ、狢(むじな)、鼯(むささび)、栗鼠(りす、又は木ねずみとも云う)、川鼠(かわねずみ)、ヤマネ(沼がた地区)

〔鳥 類〕

オオ鷹、山鳥(キジ)、オオコノハズク、カケス、カラス、ヨタカ、キツツキ(ケラ)、ヤマガラ、ツグミ、シジュウカラ、コガラ、ヒガラ、ホオジロ、ヤマバト、花スイ、 モズ、 ウグイス、オオルリ、カッコウ、キビタキ、ホトトギス、ミソサザエ、キセキレイ、オシドリ(蛇体地区)、カガラス(川ガラス)

〔蛇 類〕

まむし、しまへび、やまがじ(やまかがし)、烏(からす)へび、いちまつへび、地もぐりへび、青大将、青とかげ、からんきょ(小とかげ)、

〔魚 類〕

ヤマベ(やまめ)、 イワナ、 カチカ(かじか)

〔両棲類〕

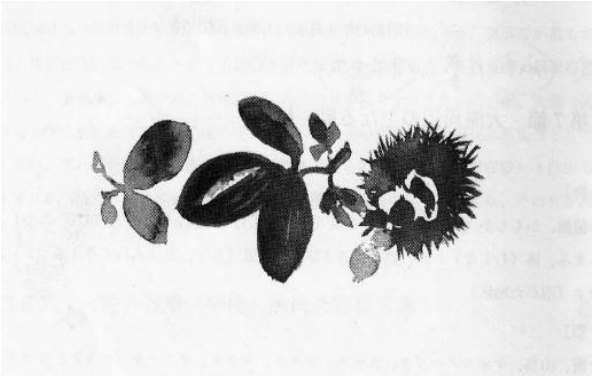
がまがえる(アズマヒキガエル)、 殿様蛙、 雨蛙(あまがえる)、 河鹿蛙(かじか)、 やまどじょう(東北山椒魚)、赤はら(イモリ)、 モリアオガエル、

〔植 物〕

山菜 ･･･ ぜんまい、うど、ふき、わらび、いら(アイコ)、うるい、みずな(ウワバミ草)、ふきのとう、カタクリ、鳥(とり)あし(トリアシショウマ)、青こごみ(クサソテツ)、しょうが、たらの芽、野蒜(のびる)、ヨモギ、春と秋のキノコ各種、しどき(モミジガサ)、山わさび、タケノコ(根曲り竹の新芽)、ムカゴ(山芋の実)、百合根(オニユリの球根)、ウバユリ(主に球根を食す)、もちぐさ(ヨモギの若芽)、ごんぼっぱ(オヤマボクチの若葉)･･･餅につき込む

薬草 ･･･ 黄れん、せんぶり、いかり草、どくだみ、げんのしょうこ、ぶし(トリカブトの塊根)、おおばこ、紅百合、オトギリソウ、ユキノシタ、カラスウリ、ウラジロ、クコ、葛(クズ)、ジジババ(春蘭)、ヨモギ、ツチアケビ

果実 ･･･ あけび、栗、かやの実、こくわの実(サルナシ)、山ぶどう、山梨、くるみ、ツノハシバミ、やまんが(ヤマボウシの実)、またたび、よつづみ(ガマズミ)、山ぐみ、熊イチゴ、黄苺(モミジイチゴ)、 クワゴ(桑の実)、



写真：ツチアケビ

大滝ではたまにしか採れなかった珍しい薬草です。 地上部には葉などは無く、地面から鮮やかな黄色の花茎が伸び、高さ1mに達する。 秋になると花茎の上部に果実がつき、熟すると長さが10cmにもなり、茎を含めて全体が真っ赤になる。和名は地面から生えるアケビの意。 かすかな甘味はあるが、タンニンが多量に含まれ、化学薬品のような強烈な異臭と苦味もあり、 食用にはならない。

民間では「土通草（どつうそう）」とよばれて**強壮・強精薬**とされ、あるいは薬用酒の材料にもされる。

ラン科 腐生植物(菌従属栄養植物)

以上、ツチアケビについてはWikipedia(ウィキペディア)を参考に記載した。

〔参考文献等〕

明治14年万世大路事業誌（県立歴史資料館蔵）
福島市史（県立図書館蔵）
旧中野村公文書(県立歴史資料館蔵)
東北地方建設局福島工事事務所編「栗子トンネル工事誌」（県立歴史資料館蔵）
明治天皇御行幸録（県立図書館蔵）
福島民報新聞
福島民友新聞

〔資料、記事提供者〕

渡 辺 要 一　（大滝駅官有地下渡願い、その他）
渡 辺 清 治　（製炭組合に関する記録・資料）
渡 辺 角右ェ門　（養蚕組合に関する記録・資料）
高 野 孝 治　（テレビ共同視聴施設建設関係資料）
福 島 市　（各種資料・その他）
中野小学校本校　（大滝分校歴代教員の調）
小 松 道 栄　（詩、短歌、記事）
斎 藤 橘（きつ）　（記 事）
小 松 隆 亥　（短 歌）
八 幡 照　（短 歌）
奥 野 ミサオ　（ 詩 ）
渡 辺 政 治　写真(一部)
編 集 委 員 会　（座談会記録）
福島県歴史資料館　各種資料
福島県立図書館　同 上

あ と が き

この記録を編集するに当たっては、各委員は勿論、大滝在住者、出身者を問わず広く資料収集その他で、なみなみならぬご協力をいただいた事を深く感謝申し上げたい。

数すくない貴重な資料も、過疎化が余りにも進行したため、ほとんど散逸(さんいつ)しており、この計画もいささか遅きに過ぎた感なしとせず、資料不足から事実の10分の1も伝え得ないかもしれないことを深く悔いる。

記録をまとめるに当たっては、出来るだけ資料、文献等により真実の追及に努めたが、なにしろ文献の多くは統計、記事その他総(す)べて、市、町、村を最小の単位としてしか発表されていないため、本書のような、一集落の参考となしえるものは極めて少なく、したがって、記事の大部分は編集委員会による座談会(昭和51年8月)の録音テープ及び、村人の口から口へ語り継がれしことを綴(つづ)り合わせたものである。

文はまことに拙(つたな)いが、総(す)べて郷土関係者だけの手に成る合作であることを誇りに思う。
これを機会に、今後とも出身者お互いの旧交を温めるよすがとしていただきたい。

終わりに、直接この記録の執筆に当たった諸氏を次ぎに紹介して感謝の意を表する。

○紺　野　健　吉
　題字・写真・略図・年表・第1章自然環境・第2章沿革・第3章第1節明治時代・同第2節大正時代
　・第4章第1節史蹟「明治天皇大滝御小休所」について・及び同第3節の一部・第5節・第6節
　並びに住所録・まえがき及びあとがき
○佐　藤　勝　雄
　第3章　第3節　昭和時代の全部
○斎　藤　源右ェ門
　第4章　第2節名所「大滝不動尊」と大滝名の由来・同第3節ふるさと夜話(第1話～第3話)
　・同第7節大滝周辺の主なる動植物、裏面表紙の図案及びカットその他図案の全部

昭和52年1月　「わが大滝の記録」編集委員会

編集委員

奥野　ミサオ	草刈　フミノ	○紺野　兵蔵	紺野　健吉
後藤　ユキ	佐藤　勝雄	斎藤　源右ェ門	須田　正見
須田　辰雄	○高野　孝治	深田　キクノ(亡)	○渡辺　要一
渡辺　清治	○渡辺　角右ェ門		

(アイウエオ順、　○印　特別委員)

編 集 経 過 に つ い て

1.昭和49年2月、飯坂温泉で開かれた第1回大滝会に次いで、大方の希望もあり第2回目の開催を検討するため、翌50年10月26日後藤ユキ、須田辰雄、紺野健吉の3名が須田氏宅に集合し、

(1)第2回大滝会の開催時期は、 3年目に当る昭和52年頃が適当と考えること。

(2)第1回日は、住所調査の不備から一部に通知洩れが生じて迷惑をかけたので、今度は事前に充分住所録を完備する必要があること。

(3)次回の会合には、簡単な「郷土史」を作って配布することなどはどうか。

などが話し合われ、早速基礎調査をしたところ、文献その他から、大滝誕生の時期は明治10年頃と推定され、昭和52年は、たまたま100年目に当るので、この時機に郷土史を出すことの意義は大きいこと。

2.明けて51年1月11日、再度須田氏宅に3者会議を開いて具体策を協議、事が大きいので10名程度の「編集委員会」を組織して充分な体制を整えて着手することとし、委員には前記3名の他、佐藤勝雄、斎藤源右ェ門、渡辺清治、須田正見、草刈フミノ、奥野ミサオ、深田キクノの各氏をお願いすることとした。

3.かくて、昭和51年2月22日第1回編集委員会を紺野健吉宅で開催。

(1)郷土史編纂(へんさん)について全委員の賛成を得た。

(2)タイトルを「わが大滝の記録」と内定し、編集内容・各委員の分担・日程等を決定した。

4.脱稿時期を51年8月末として、各委員が精力的に原稿の作成に取り組んだ結果、 7月末には本文・住所録共に約70%の進行をみたが、残りは資料不足と力不足から事実上壁に突き当って苦慮。

5.　8月22日、大滝村内会長渡辺要一氏にお願いし、第2回の委員会を大滝公民館で開催、新たに渡辺要一・高野孝治・紺野兵蔵・渡辺角右ェ門の各先輩諸氏を「特別委員」にお願いし、この委員会を「大滝を自由に語り合う座談会」として過去、現在の大滝につき特別委員を交えて大いに語り合っていただいた。
2時間に亘(わた)るこの会議は有意義で、総(すべ)てをテープに収録し、この資料を元に原稿の不備を補い、誤りを正し、未完の部分の脱稿を早めることができた。

6.　12月中旬漸(ようや)く総(すべ)ての脱稿を終え、18日社内に面識の有る人もおり、又技術と信用を誇る福島印刷センターに300部35万円で発注し、年末、年始をはさんで2回の校正(こうせい)も了し、1月14日完成納本となった。

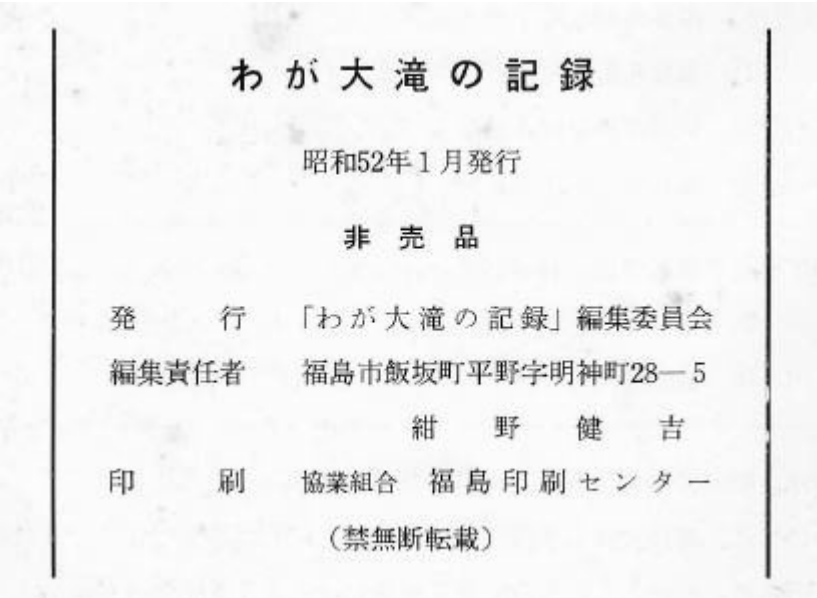
7.　翌、昭和52年1月16日第3回委員会を紺野健吉宅で開き、配本要領及び第2回大滝会の日取り等を協議した。
企画以来、脱稿迄2年4ヶ月を要したが、各委員は夫々(それぞれ)家業、又は勤めの傍(かたわ)ら休日等を利用し、長期に亘(わた)り郷土のため完全奉仕と云う形で編集に当ったもので、この点心から感謝申し上げている次第である。

又、委員の1人として終始積極的にご活躍いただいた 故深田キクノ様には、本書の完成を見ずして昨年11月

病気のため他界されましたが誠に残念でならない。 本日ここに完成をご報告申しあげ、ご生前のご協力に対し感謝の意を捧げると共に、謹んでご冥福をお祈り申しあげる次第である。

昭和52年2月吉日

編集責任者　紺 野 健 吉



わが大滝の記録

昭和52年1月発行

非 売 品

発　　行　「わが大滝の記録」編集委員会

編集責任者　福島市飯坂町平野字明神町28―5

紺 野 健 吉

印　　刷　協業組合　福島印刷センター

（禁無断転載）

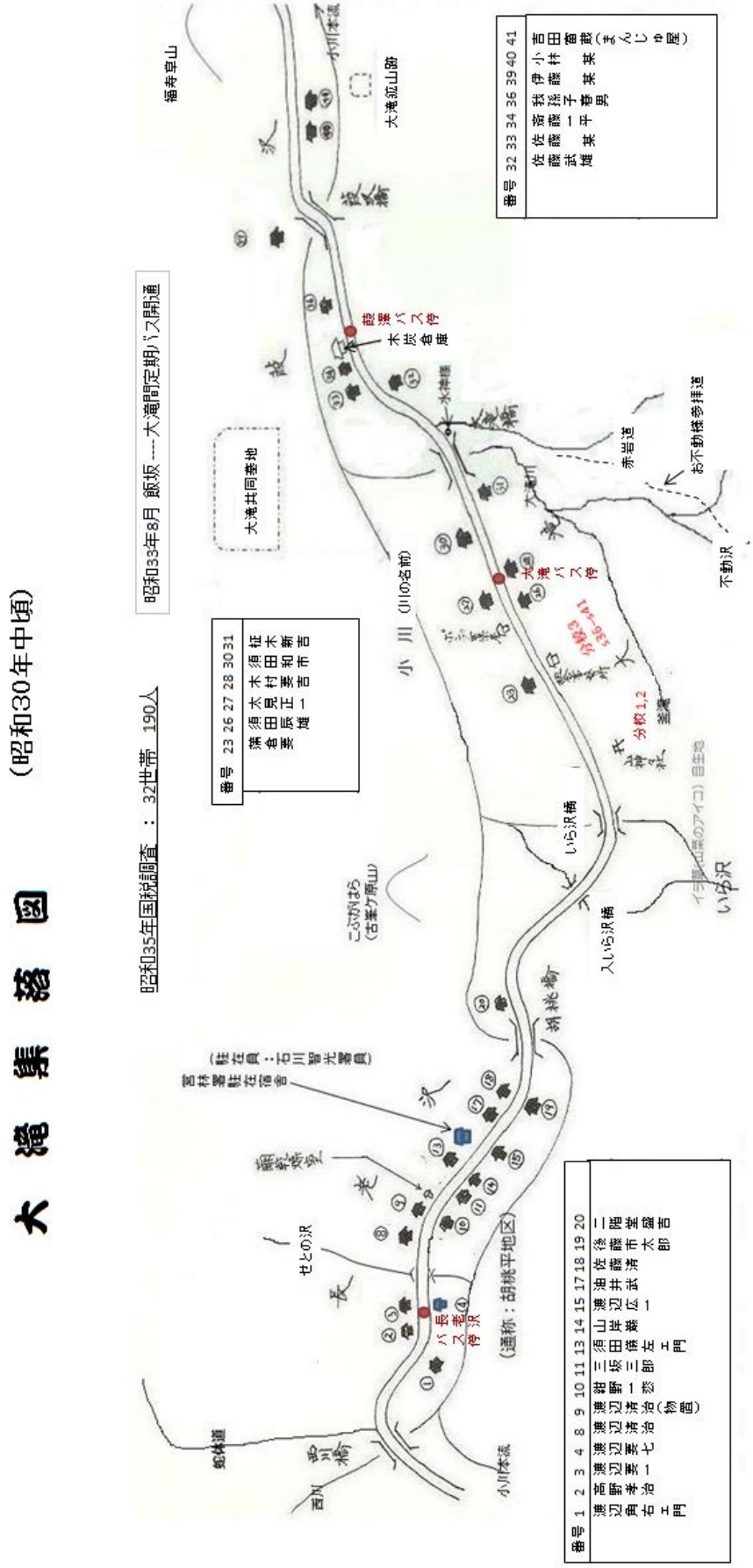
追 記

編集責任者の紺野健吉様はじめ大滝会諸先輩の手による原書『わが大滝の記録』を基に現大滝会員の皆様や万世大路を愛する皆様の協力を頂きながら、地名・人名などの誤りや集落図の明確化、記事の誤訂正や注釈を追記しPDFファイル化を実施した。

今後さらに新しい事実が判明すれば随時訂正補足を加え、後世までふるさと大滝が語り継がれるための一資料になればと・・・心から願う次第である。

平成25年(2013年) 6月30日　紺野文英

◇附録　昭和30年中頃の大滝集落図



◇附録　万世大路バス路線

万世大路 定期路線バス運行状況
年　代
S33.8
S37.7
S42
S52
S60
運行会社
東北急行バス(株)
急行バス運行
東京⇔福島⇔米沢⇔山形
(旧道 万世大路)
S36.10
国道13号(栗子ハイウエー)工事
S45.3
国道13号(栗子ハイウエー)一般運用
山形交通バス(株)
S42.11
定期バス運行
福島⇔米沢⇔山形
(国道13号(栗子ハイウエー)
いつまで運行かは？
福島交通(株)
S41.5
飯坂温泉⇔長老沢　定期バス運行
(旧道 万世大路)
？
(国道13号(栗子ハイウエー)
米沢まで路線延長??
いつまで運行かは？
S41.5
福島⇔米沢　定期バス運行
(国道13号(栗子ハイウエー)
いつまで運行かは？

◇附録　大平駅・大滝駅の新情報

1．＜福島市史別巻Ⅵ「福島の町と村Ⅱ」 454、455ページから抜粋＞

～抜粋～

「中野新道の開設 ～省略～　道路の名称は、完成後**明治15年2月**に、米沢までの区間を**万世大路と命名された**。なお、明治18年2月には国道39号となった。」

＊一般に、「1881年（明治14年）の開通式の際、参列した明治天皇により、「萬世ノ永キニ渡リ人々ニ愛サレル道トナレ」という願いを込めて「萬世大路」と命名された」とされている。
明治天皇の命名については**『明治天皇紀第五』**（宮内庁、昭和四十六年三月、吉川弘文館）に簡潔に記されており明らかであるが、**「萬世ノ永キニ渡リ人々ニ愛サレル道トナレ」と明治天皇が仰せられた事実の出典は確認されていない。**
（紺野文英追記）

「新道開発に伴ない、県は伊達・信夫郡役所に対し、茂庭の大平、中野の大滝・堰場の三か所に新駅設置を認め、～省略～ この**大平は明治22年に茂庭村から中野村へ編入替え**になる。」
「これら三駅には福島・米沢を結ぶ物資や人の運送を業とするものが多く、特に**大滝の各戸はそれぞれ屋号を持って運送業に従事していた**。

*残念ながら屋号は記載されていない　（紺野文英追記）

明治20年6月の「**陸運物貨継立営業者規約**」には**大滝：近野庄右衛門・堰場：佐久間伴右衛門・大平：宮本立之進代理 浦井只見**の三名の名を見ることができ、30年10月には**佐藤末吉**が大滝に営業を認可されている」

*大滝駅の「陸運物貨継立所」は、いら沢の二階堂家以前に近野庄右衛門・佐藤末吉（大滝の先祖と目される人物名に有り）が営業していたようである。　（紺野文英追記）

「大滝の須藤兵八郎は、明治15年1月に大平に郵便取扱所を設置し、その取扱をさせるよう願い出ている。」

*大平駅の「郵便取扱所」は、短期間大滝に住んでいた須藤兵八郎（大滝の先祖と目される人物名には記載無し）が営業を申請していたようであるが許可が下り、大平駅に移住したかどうかは不明である。
次頁の明治22年大平駅集落図には須藤姓は無いが米沢藩分限帳の調査から**須藤兵八郎は元米沢藩士**であったことが判明した。http://ootaki.xsrv.jp/M22oodaira.html　また明治22年大平駅集落図には「物貨継立点転用地」の記載は有るが「郵便取扱所」の記載はない。
なお、大滝駅の「郵便取扱所」は太見家が行っており、昭和33年の定期バス開通までは切手・印紙等の販売もしていた。
（紺野文英追記）

2．＜『栗子トンネル工事誌』(1968年発行) 1249ページから抜粋 ＞

～抜粋～
『・・・・・この部落は明治14年万世大路の開通とともに、旧米沢藩士20戸が移住したのを始めとする新興部落であり、・・・・云々』との記載が有り、大平駅の初代入植者は　米沢藩士だったようである。
その証となる大平駅の明治22年の住居状況が明らかになったので次ページに集落図を掲載する。

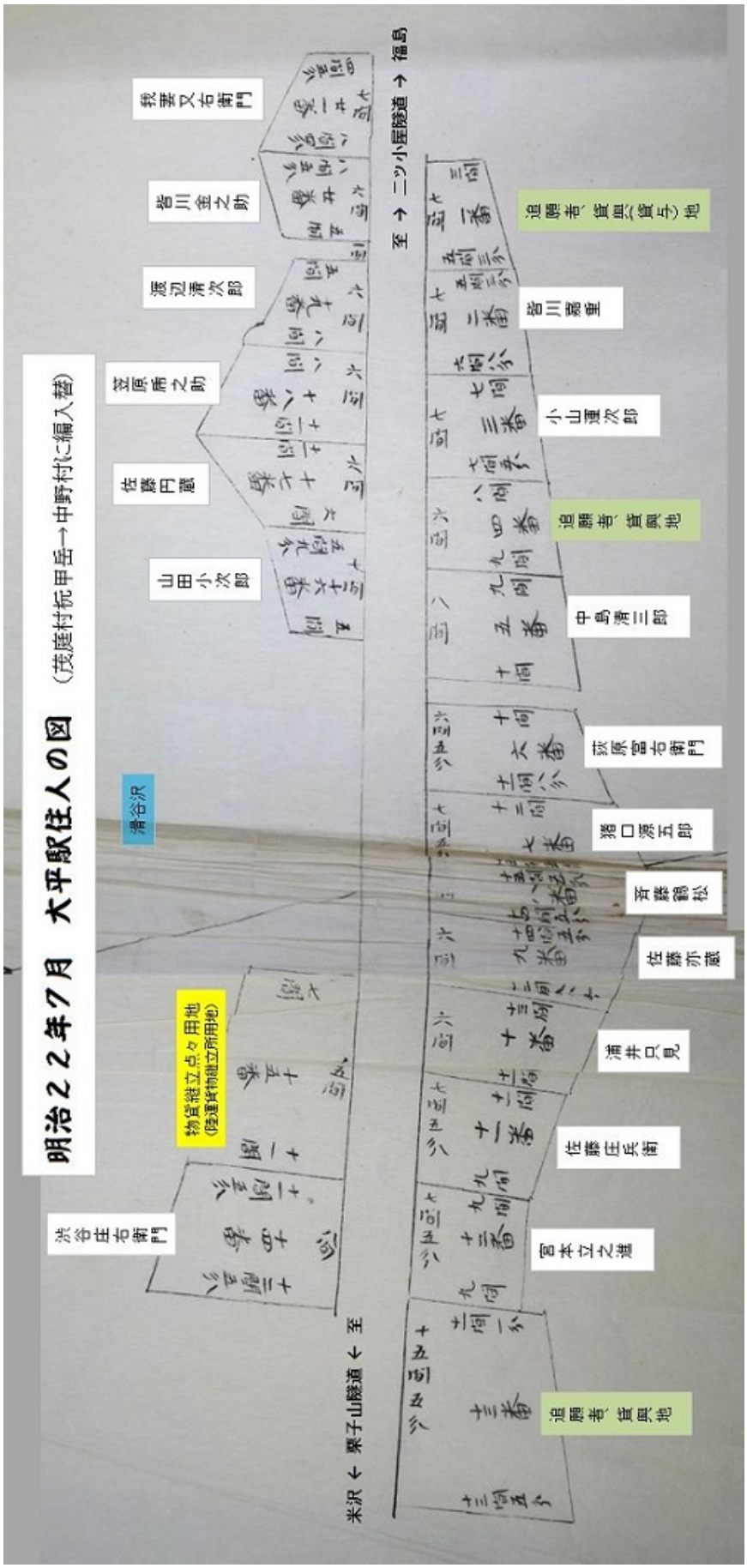
福島県歴史資料館所蔵「明治22年　信夫郡中野村　大平引受書類・地籍簿・地籍図」により判明した次頁の集落図には「大平陸運物貨継立所」とそれを営業したと思われる宮本立之進、浦井只見の住居も見られる。
また、米沢市立図書館所蔵「嘉永2年・慶応元年・明治2年の各米沢藩分限帳」には以下の同姓同名が存在し、7名が米沢藩士であることが特定できた。
浦井只見・宮本立之進・佐藤庄兵衛・佐藤円蔵・小山運次郎・猪口源五郎・荻（萩）原富右衛門・・・以上7名
なお、浦井只見と宮本立之進は直江兼続旗本の与板組に属し、禄高も高く中級家臣であった。

【参照】わが大滝の記録「大平集落住居図」　http://ootaki.xsrv.jp/M22oodaira.html

以上

（平成25年10月21日　紺野文英:記）

◇附録　明治22年　万世大路　大平駅　住居状況集落図



明治期の大滝居住者（想定）

赤字はM27～M36継続氏名　黒字は同じ苗字を並べてみただけ　緑色網掛けはその年代に新規入植？

							参考比較　（赤字は同一人物または親子）		
年月	M15年	M20年	M27年11月	M30年	M30年11月	M36年	昭和10年	昭和30年	昭和51年春
出典	福島史誌別巻Ⅳ「福島の町と村Ⅱ」	福島史誌別巻Ⅳ「福島の町と村Ⅱ」	中野村古文書 大滝駅下渡願届書	福島史誌別巻Ⅳ「福島の町と村Ⅱ」	中野村古文書「中野村地籍図」の内長老沢・大滝	湯殿山石碑裏書	わが大滝の記録誌	わが大滝の記録誌PDF版	わが大滝の記録誌
	須藤平八郎		渡辺角治			渡辺角治	渡辺今朝松	渡辺角右ェ門	渡辺角右ェ門
	（元米沢藩士）		高野幸吉（宮内屋）						
	大平駅に郵便取扱所		高野宮治（宮内屋）			高野宮治（幸吉の弟）	高野宮治	高野孝治	高野孝治
						渡辺金蔵	渡辺広一	渡辺広一	渡辺広一
	設置及び営業を申請		渡辺乙吉（中屋）				渡辺勇八		
			渡辺要七（中屋）	（乙吉の弟）			渡辺要太郎	渡辺要一	渡辺要一
			渡辺要蔵（中屋）	（乙吉の弟）					
			渡辺定七			渡辺清	渡辺廣治	渡辺清治	渡辺清治
			宮田定吉						
			二階堂リエ						
			黒須春吉			黒須春吉			
			須田富治（馬宿）			須田富治	須田辰蔵	須田辰雄	
			須田庄松（荷馬車運送）				須田儀平	須田和市	
							須田儀左ェ門（儀平の弟）	須田儀左ェ門	須田儀左ェ門
			赤井喜蔵						
			渡辺ヒテ						
			太見喜太郎（荷馬車運送）			太見喜太郎	太見吉佐	太見正一（養子）	
			斉藤豊吉			斉藤幸三郎			
			山岸友吉				山岸鶴吉	（山岸鶴蔵）山岸巌	
			梅津嘉重						
			斉藤兼治（地主総代）			斉藤惣三郎			
			角田平助						
			木村貞吉				木村作右ェ門	木村要吉　養子（渡辺要一の双子の弟）	
			野嵜久吉						
			渡辺倉之助						
		近野庄右衛門（初代大滝陸運継立所）			近野元右ェ門（中野村地主総代）				
			近野次郎太（下渡願総代人）		近野次良太（総代人）他47名				
			大橋衛六						
			丹治喜七						
			中林留作						
			横沢亀吉			横沢亀吉			
			二階堂栄助			二階堂廣吉	二階堂盛吉（3代目陸運継立所）	二階堂盛吉（3代目陸運継立所）	
			佐藤清太郎						
			半田多五右衛門（西村屋？）						
			佐藤文七			佐藤嘉左衛門			
			佐藤キク						
			蒲倉キヨ			蒲倉徳七	蒲倉高松	蒲倉要	
							蒲倉徳次郎（要の弟）		
			紺野吉助						
			紺野健治（M24入植）				紺野一杰	紺野一杰（紺野兵蔵）	
							紺野善右衛門（一杰の弟）		
			村島フサ						
			佐藤末吉	佐藤末吉（2代目大滝陸運継立所）		佐藤末吉			
			早坂長八						
			高岩初太郎			高岩初太郎			
			紺野勘五郎				紺野一郎		
							紺野善吉		
			西坂倉太郎				熊坂林三郎		
			斉藤倉吉			斉藤勇吉	斉藤一平	斉藤一平	
							斉藤豊吉		
							斉藤七蔵		
			村上七蔵				小林勘須計	小林　某	
			蒲倉トキ				斉藤幸五郎		
			長尾藤蔵			長尾藤蔵	長尾藤松		
			八木沼勘四郎				伊藤長三郎	伊藤　某	
			本間又吉				羽賀運太郎		
			佐藤磯松			佐藤好造	佐藤好蔵（造？）		
							佐藤武雄	佐藤武雄	
			紺野亀吉				佐藤清	佐藤清	
			菅藤ヒロ				我孫子富蔵	我孫子春男	
						大槻伊三郎	笠原美雄		
						熊坂林七	渡辺源一郎	油井武	
						高橋惣四郎	佐藤金左ェ門		
						山田晋吉	佐藤重右ェ門		
						伊藤長蔵	後藤留太郎	後藤市太郎	
						山口鶴？吉	新保代次郎		
						菅野角左ェ門	柾木新松	柾木新吉	
						笹木金太郎	笹木春吉	三坂三郎	三坂勇
						木村吉造	山田源次郎		
							吉田富三郎	吉田富蔵	

考察：M27年のとM36年湯殿山石碑の裏書に有る名前を見ると、重複するのは僅か9名だけであり（もちろん石碑裏書は大滝住民全員ではないが）、新規入植者氏名が多く見受けられ、大滝集落の住人の入れ替りが激しかっただろうことが伺える。

◇附録　大滝歳時記（昭和30年代）

私の幼年時代を想い起こして書いてみましたが、私の記憶の中で新暦と旧暦がごっちゃになって居ますので、月日に間違いが有るかもしれないことを冒頭お断りしておきます。

また詳しくはホームページ「わが大滝の記録」の中の「大滝歳時記」のページをご覧ください。

1月　暁（あかつき）参り

毎年1月1日の0時を過ぎると、我先（われさき）に各家庭から提灯（ちょうちん）をぶら下げて家族全員雪道を山神神社に初詣（はつもうで）に行った。 山神神社には青年団が交代で12月31日から詰めており参拝者に御神酒（おみき）をふるまった。御神酒を戴いて家族全員で家内安全と健康を祈願した。

旧暦1月15日　小正月

山から赤い枝の「団子の木」を採ってきて、餅を赤や緑や黄色に着色して小さく丸めて挿したものを神棚や台所、便所などに飾り家中のあらゆる神様に感謝した。

お祝いの時期が過ぎるとカラカラに乾燥した小さい餅は油などで揚げられて子供のおやつになった。

2月3日　節分

夕食前に各家庭の主（あるじ）が隣に負けないように大きな声を張り上げて『福は内、鬼は外』と煎（い）った大豆を撒いた。

またこの日は目刺しの頭を串に刺して玄関や裏口・便所などに飾り魔除けとした。

3月3日　ひな祭り

各家庭でもち草（ヨモギの若芽）を採取して混ぜて緑の餅や、食紅で赤い餅をついて神棚や仏壇にお供えしお祝いした。女の子が居る家では簡素なお雛様を飾った。

5月3日　山神神社の祭礼日

毎年この日は八十八夜の山神神社の祭礼日と決まっていた。

この日は、集落中山仕事を休み、消防出初（でぞ）め式で一年間の防火を喚起した。

この頃は山菜採りで集落外からも多数の入山者があり、タバコ火による火災や、集落の燃えやすい茅葺家屋の火の用心を併せて喚起した。

また、飯坂の大鳥中学校の教諭を招待し、日頃児童がお世話になっているお礼の宴（うたげ）を催した。

旧暦5月5日　節句

各家庭で笹の若葉を採取して、笹巻き（チマキ）とあんこの入った団子巻きを作ってお祝いした。

また各家庭の玄関の屋根下にはヨモギと菖蒲（しょうぶ）を挿して厄除けとした。

風呂にも菖蒲を浮かべて菖蒲湯を楽しんだ、凄く良い香りがしたのを今でも懐かしく思い出す。

旧暦7月　盆踊り

旧暦の7月 14,15,16 日は須田儀左ェ門様宅と山岸鶴蔵様宅の間の道路に盆櫓（やぐら）を組んで集落中が踊り明かした。　　また、この時期はお墓参りの時でもあるので、故郷を離れて町で暮らしている親類縁者もみんな大滝に帰ってきてお墓参りと盆踊りと久しぶりの再会で旧交を温めた。

旧暦8月　夏祭り

旧暦8月17日は氏神様（山神神社）の夏の祭礼である。

青年団が中心になって山車（だし）や樽御輿（たるみこし）を作って子供達と一緒に『ワッショイ、ワッショイ』と葭澤から胡桃平まで練（ね）り歩いた。

また、この日は後藤市太郎さんの家の軒先（のきさき）に後藤さんの親類になる丹治徳一さんが小間物屋を出して、パッチ（メンコ）やおはじき、かんしゃく玉、花火などを売ったので子供の大の楽しみであった。

特に火薬で音と煙が出るブリキ製の拳銃のオモチャは男の子の一番人気だった。

9月　繭（まゆ）かき

大滝では副業として養蚕もしていた。

繭の収穫時期が近づくと、繭に見立てた白い小麦団子を蒸（む）し上げてお祝いした。

団子には砂糖やキナ粉をかけて食べ、神棚や仏壇にも供えて良い繭が出来た事への感謝をした。

10月(4月)　窯（かま）ぶち

毎年営林署からその年の炭を焼く原木山の割り当てが決まると、近所の数名が協力し合い炭を焼くための石窯を築造した。

これは山の大きさにより、春と秋の2回行われることもあった。

炭窯が出来上がると、その窯の持ち主の家の奥さんが得意とする手料理で手伝ってくれた人を自宅に招いて『窯ぶち』祝いの祝宴を開いてお礼をした。

10月　大滝分校大運動会

運動会は大滝あげての大イベントでした。

この日も多くの親類が里帰りしてきました。また、この日は集落全世帯が山仕事を休みました。

大人も子供も一緒になって運動会に参加し楽しんだものです。

11月　大滝分校学芸会

これもまた集落あげての一大イベントで、やはり親類縁者が各地から駆けつけて見物しました、やはり山仕事を休んで大人も演芸で参加し毎年大好評を博しました。

それだけ大滝には芸達者が揃っていていました。

子供達にとっては、日頃分校で勉強した歌や習字・お遊戯などの成果発表の場でした。

11月　茅（かや）（萱（かや））刈り

晩秋が近づくと大滝ではススキが立ち枯れた茅を一斉に刈り採（と）りした。

栗子の大平（おおだいら）やお不動様方面の古屋敷（ふるやしき）に共同の茅場（かやば）を持っており、炭俵（すご）の材料や家屋の防風防雪の防寒材として大切な茅を植えていた。

11月～翌年5月　夜廻り

12月になると大人と子供がペアになって日替わりで夜6時頃から拍子木（ひょうしぎ）をカチカチと打ち、『火の用心、マッチ一本火事の元、火の用心』と言いながら集落中を巡回した。

何しろ当時の大滝集落は全て燃えやすい茅葺（かやぶ）き家屋で有り、また消火設備も旧式の手こぎの簡易消防ポンプしか無く、一度火が出てしまうとほとんど消火は不可能だったので、火の用心は最大の注意項目でした。

12月　年末大掃除

正月が近づくと仕事を休んで集落が一斉に大掃除を実施した。

この大掃除は大がかりなもので畳や筵(むしろ)を戸外(こがい)に持ち出して、囲炉裏(いろり)の煤(すす)で汚れた畳等を竹の棒で叩いて煤と埃(ほこり)を落としたので辺(あた)り一面の雪は真っ黒になったものです。

家の中は長い篠竹(しのだけ)を高野家の竹藪から採ってきて屋根裏まで煤払いをした（私の幼少の頃は天井板など無く、屋根裏には茅葺き屋根の裏が見えていた。

本書『大滝の記録』誌には5月に養蚕を開始する前に、蚕の病気を防ぐ目的もあり、大がかりな「衛生掃除」をしたとの記録が有るが、5 月の衛星掃除は私の記憶には残っていない。

不定期　映画会

娯楽が少なく交通の便が悪かった大滝では青年団が中心となり、飯坂町の映画館と交渉して映写技師と古い映画フイルムを借りてきて炭倉庫や分校で映画会を開催していた。

勿論(もちろん)映画は古いものだったが当時の映画館と同じくニュース映画を挟んでの3本立て上映だった。

この映画会を通じて、漫画本等で名前だけは知っていた中村錦之助や大川橋蔵、片岡千恵蔵、高田浩吉などの有名な俳優の映画を観ることができ、大変感動したものである。

この頃は未だ父母達は映画と言わずに「活動写真」と言っていたのを懐かしく思い出す。

飯坂や福島の町から10年位遅れて、ようやく大滝の各家庭にもテレビが入ってくるようになると自然消滅的に開催されなくなった。

以上、紺野　文英　記

◇附録　大滝住民も創立に協力した私学校『青葉学園』

平成26年9月6日　追記

Web 上の知人 TUKA 氏からの問い合わせがきっかけで、昭和20年代に、あの山奥の蛇体に私学校『青葉学園』が創設されていたことを知ることとなった、元大滝住民の皆さんに連絡を取り、協力を仰ぎ当時の情報を収集したところ、このことが事実であることが判った。

国文学者およびローマ字の普及に尽力したことで高名な香川県出身の三尾砂（いさご）氏が、第二次世界大戦終戦後すぐに、奥様と共に福島市中野字東横川に転居し、『この大戦で孤児となった児童達に、衣食住と教育を大自然豊かな場所で与えたい』 との崇高なご意思の元、分教場（中野小学校杉の平分校と思われる）の助教をしながら、それに適した場所を探していた。

そして、昭和21年6月なんとあの山奥で熊も出そうな蛇体に、蛇体鉱山の宿舎跡を借り受け創設するに至った。・・・蛇体鉱山跡を誰が紹介したかは不明であるが、元大滝住民か中野村住人で有ると思われる。

この時から大滝住民が青葉学園に大きくかかわる事となった、蛇体への資材の搬入や衣食住に必要な物品の搬入を大滝青年団がボランティアで全面協力したのである。

このことは現大滝会会長の木村義吉様や副会長の高野英治様が良く覚えておられた。

御両名とも当時はまだ15歳前後の元気旺盛な頃であり青年団と共に、競って協力したようである。

また木村（旧姓蒲倉）努様・ヨネ子様ご夫妻も良く記憶しており、ヨネ子様は創設者の「みおいさご」という名前まで覚えておられた。

蛇体生活はたったの5か月で終わったが、これは大滝住民の 『冬の蛇体は危険すぎる』 との意見を要れての事であったという。・・・雪が降る前の10月に1度目の移転

次に移転したのは、現中野第二トンネル米沢側出口の小川沿いに在った中野鉱山である。

昭和21年10月当時、中野鉱山は丁度創業休止中であり、やはり休業中の鉱山宿舎を借りての移転だった。

この時も大滝青年団を主体に大滝住民全員が移転に協力したとのこと。

しかし中野鉱山園舎時代も長くは続かず、昭和23年10月には再び移転をすることになった。

中野鉱山の操業再開に伴い移転を余儀なくされたようである。

次の園舎は大笹生大平集落に通じる通称「赤岩道」が菱川と出会う地点（俎山）であった。

このことは当時大滝から大平集落に転居されていた蒲倉徳次郎様の家を頻繁に訪ねていた木村（蒲倉）努様ご夫妻が徳次郎家へ行く度に、赤岩道から眼下に青葉学園をよく見ていたということである。

この赤岩道俎山時代は昭和23年10月から暫く続いた（昭和26年に一時閉鎖等が有った）ようである。

この時も大滝住民が協力を惜しまなかったとのことであり、大滝の諸先輩の素晴らしさにある種の感動と誇りすら感じた次第である。　なお俎山園舎は三尾砂氏が福島市の協力も得て新築した園舎であった。

以上の事は元大滝住民の証言によるものであるが、後日関係者の方からご提供いただいた資料で間違いないことが裏付けされた。（諸事情により、ここに詳細を紹介できないのは誠に残念である）

なお、現在「青葉学園」は微温湯温泉近くの福島市土船に大きな園舎に成長を遂げ現存している。

「青葉学園」様の公式ホームページ　http://www.kosodate-web.com/aobagakuen/index.php

最後にTUKA様、鹿摩貞男様、大滝会の皆様（木村会長、高野副会長、渡辺智様、須田信男様）の調査ご協力に深謝申し上げる次第である。

以上（紺野文英:記）

◇附録　大滝会の足跡

平成20年10月に、大滝会会長木村義吉様が纏めたものに、加筆させていただきました。

＜ 赤字…重大事件等　、　青字…外部団体主催行事　等＞

西暦	和暦	月日	記　　録
1974	昭和49年	2月	第1回「大滝会」開催　（於：飯坂温泉、会場不詳・参加者不詳） 大滝集落の衰退を憂慮し、郷土史編纂を企画検討。
1975	昭和50年	10月26日	第1回 郷土史編集企画委員会開催　（於：福島市南矢野目　須田辰雄様宅） 出席者：後藤ユキ様、須田辰雄様、紺野健吉様 郷土史の発刊を開郷100年に当たる昭和52年頃とすることに決定
1976	昭和51年	1月11日	第2回 郷土史編集企画委員会開催　（於：福島市南矢野目　須田辰雄様宅） 出席者：後藤ユキ様、須田辰雄様、紺野健吉様 事が大きいので、10名程度の編集委員会を組織することを決定し、先の3名に追加し 佐藤勝雄様、斎藤源右ェ門様、渡辺清治様、須田正見様、草刈フミノ様、奥野ミサオ様 深田キクノ様の各氏に委員をお願いした。
1976	昭和51年	2月22日	第1回 編集委員会開催　（於：飯坂町平野　紺野健吉様宅） 郷土史のタイトルを「わが大滝の記録」とすることを決定
1976	昭和51年	8月22日	第2回 編集委員会開催　（於：大滝公民館（旧分校）） 渡辺要一様・高野孝治様・紺野兵蔵様・渡辺角右ェ門様の各先輩諸氏に 「特別委員」の就任をお願いし快諾を頂く。 ・座談会「大滝を自由に語り合う会」開催 酒を酌み交わしながら昔話を語り合いテープレコーダーに収録し郷土史編纂の 資料不足を補充した。
1977	昭和52年	1月16日	第3回 編集委員会開催　（於：飯坂町平野　紺野健吉様宅） 「わが大滝の記録誌」の配本要領及び第2回大滝会の日取り等を協議した。 第2回大滝会を開郷100年目に当る昭和52年に行うことを決定
1977	昭和52年	1月末日	「わが大滝の記録誌」を刊行・・・大滝の記録編集委員会（委員長：紺野健吉様） 300部作成（費用35万円 … 大滝会員浄財寄付金で賄う） 福島県立図書館へ所蔵（3部） ・この頃から廃屋を利用し観光地化を目的に江戸時代を模した「大滝宿」開発始まる　*1
1977	昭和52年	2月19日	第2回「大滝会」開催　開郷100年目（於：飯坂町湯野　福島県婦人会館） ・開催委員長：高野孝治様 ・副委員長：渡辺角右ェ門様、渡辺要一様、木村要吉様、紺野兵蔵様 ・事務局：紺野健吉様、渡辺清治様、斉藤源右ェ門様 ・出席者全員に「わが大滝の記録誌」を配布 また、当日出席できなかった大滝会員全世帯には2月末日迄に配布することを決定。 ・大滝記念碑建立が提案される。
1978	昭和53年	8月	第1回記念碑建設実行会議開催　於：福島市　紺野会計事務所 出席者：斉藤源右ェ門様、後藤ユキ様、須田辰雄様、紺野健吉様
1978	昭和53年	10月9日	第2回記念碑建設実行会議開催　於：大滝　渡辺要一様宅 出席者：S53.10月現在大滝在住の渡辺角右ェ門様、渡辺要一様、須田儀左ェ門様、 渡辺清治様4軒と、出身者を代表して紺野健吉様の計5名 ・以降、福島市および飯坂町等に記念碑建立の申請と陳情を重ねる。
1978	昭和53年	10月22日	大滝部落閉郷 前後処理委員会発足 会長：高野孝治様、 副会長：渡辺要一様、 事務局：紺野健吉様
1979	昭和54年	1月	福島民報新聞掲載・・・「明治の宿場寂しく離村」
1979	昭和54年	5月	・最後の1人の住人渡辺正義氏(旧中屋当主)が離村し完全な廃村に至り 開郷102年で大滝集落の歴史に幕を閉じる。・・・渡辺正義氏本人談
1979	昭和54年	8月	・読売新聞、福島民友新聞、福島民報新聞等に相次いで掲載される。 「大滝の歴史を後世に・・・記念碑建立へ」等
1979	昭和54年	10月14日	大滝記念碑建立除幕式開催　建設委員長：高野孝治様　事務局：紺野健吉様 工事費190万円（大滝出身者の寄付および福島市補助金（50万円）） 物故者合同慰霊祭および大滝部落有縁、無縁三界の万霊供養を執り行う ・飯坂温泉ホテル清山にて記念パーティーを行う　［ *大滝部落閉郷前後処理委員会解散 *大滝会初代会長に紺野健吉様を選出　*大滝会会則を制定する ］

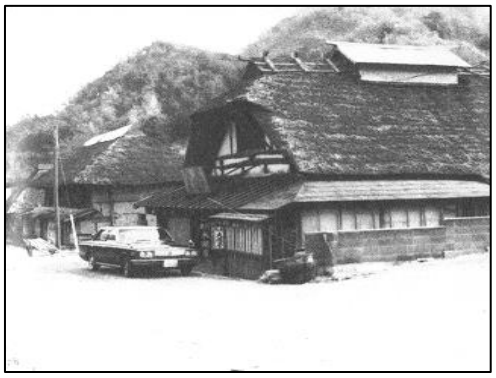
980	昭和55年	5月4日	・大滝山神神社春の祭礼　・大滝会総会　・お花見会　開催、および草刈清掃奉仕 これ以降、毎年5月初旬は清掃奉仕、祭礼、総会、お花見会が定例行事となる。
1980	昭和55年	8月 10 日	・草刈奉仕、山神神社参拝 これ以降、毎年8月は草刈奉仕と神社参拝が定例行事となる。
1985	昭和59年		観光地「大滝宿」の人気が出ず開発地の衰退はじまる。
89	平成1年	5月	記念碑敷地舗装工事　(22 万円)、 および副碑建立(大滝会会長　紺野健吉様寄贈)
1989	平成1年	10月14日	記念碑建立10周年記念「ふるさと大滝をしのぶ集い」開催 実行委員長:紺野健吉様(初代大滝会会長) 実行副委員長:須田辰雄様、斉藤源右ェ門様、渡辺清治様 顧問(相談役):渡辺要一様、紺野兵蔵様、木村要吉様 飯坂温泉:旅館　清山　一泊　→　大滝集落跡地および記念碑見学会
1991	平成3年		観光地「大滝宿」自然消滅し再廃墟化が進む　・・・　一部の茶屋は残る
1992	平成4年	6月	大滝集落跡地に産業廃棄物最終処分場建設の話が持ち上がり大滝環境保全委員会を設立し 反対運動をする
1998	平成10年	10月11日	離郷20周年記念　「大滝出身者の集い」開催 実行委員長:紺野健吉様(初代大滝会会長) 実行副委員長:須田和市様、斉藤源右ェ門様 顧問(相談役):木村要吉様、紺野兵蔵様、 記念碑基礎部分を石積改修工事、および大滝記念碑敷地にタイムカプセル埋設 分校跡地　→　飯坂温泉　ホテル叶や　一泊
2001	平成13年	1月	産業廃棄物最終処分場建設される　(福島市飯坂町中野字赤落 27 番地) 大滝会の環境保全運動が実り、小川沿いの葭沢から約 1km下流の赤落地内に建設された。
2003	平成15年	10月13日	望郷25周年記念大会　「大滝会の集い」開催 実行委員長:須田和市様(第2代大滝会会長) 分校跡地　→　飯坂温泉　ホテル叶や　一泊　→　翌日茂庭ダム見学
2003	平成15年	12月	大滝会会長交代　　須田和市会長退任　→　紺野健吉前会長復任(第3代)
2004	平成16年	5月	読売新聞　福島版に掲載さる　「ふくしま古里考　…　峠越え基地盛衰100余年」
2005	平成17年	5月	毎日新聞掲載さる　「みちのく物語　…　人馬往来した旧国道(福島市万世大路)
2005	平成17年	10 月	市民フォトふくしま誌　10月号掲載さる 再発見"万世大路を歩く"で大滝宿場を紹介
2006	平成18年	5月	大滝氏神様老朽化対策会議開催　…　神社改修 遷宮(せんぐう)を決定し準備に入る
2006	平成18年	10 月8日	山神神社遷宮　除幕式…　石造で風雪にも永年耐え得るものに成った。 総工費190万円　(大滝会員 121 名の浄財寄付)
2007	平成19年	4月	大滝会事務所建設　(旧消防ポンプ小屋改修) 総工費38万円　　敷地はプロショップ信　(須田信男)　様寄付
2007	平成19年	9月	昭文社刊　「日本遺構の旅」誌に掲載さる 大滝宿　…　今もなお元住人が再興を願って集う　美しくかけがえのないふるさと
2007	平成19年	9月9日	大滝会ホームページ「わが大滝の記録」開設　　管理人:紺野文英
2007	平成19年	10月	芋煮会開催　…　分校跡地　　(この頃から秋の芋煮会開催が定例化する)
2008	平成20年	5月3日	大滝会総会および観桜会実施　…　分校跡地
2008	平成20年	10月5日	望郷30周年記念「大滝出身者の集い」開催 実行委員長:紺野健吉様(第 3 代大滝会会長) ・特別会員として鹿摩貞男様(万世大路研究会幹事)と西田稔様(もみじ亭・すずめのお宿店主)が ご出席される。・・・これ以前から大滝に多(他)方面で貢献されていた。 分校跡地　→　飯坂温泉:ホテル　叶や　一泊
2009	平成21年	3月7日	ふくしまけん街道交流会参加　　(於:コラッセふくしま 4F　主催:万世大路研究会) 大滝会有志7名参加・・・紺野健吉会長と木村義吉様が大滝会の活動を説明
2009	平成21年	5月3日	大滝会総会および観桜会実施　…　分校跡地 ・初代大滝入植者　中林留作様の曾孫の中林(名?)様のご家族が須賀川市からご参加。
2009	平成21年	8月 23 日	大滝役員会開催　於:飯坂学習センター 議題　:「大滝を後世に残すには…万世大路遊歩道計画案検討」
2009	平成21年	11月3日	芋煮会開催および「あゆいまつ」散策会　(大雪が降り途中中断)

2009	平成21年	11月23日	万世大路遊歩道計画相談会　　於:飯坂学習センター　大滝会有志7名参加
2010	平成22年	3月 28 日	大滝役員会開催　　遊歩道計画案検討
2010	平成22年	5月3日	大滝会総会および観桜会実施　…　分校跡地
2010	平成22年	5月22日	万世大路遊歩道計画道探索　(大滝会有志)
2010	平成22年	7月17日	第1回大滝分校の集い開催　(S22～26年生まれ者対象) 実行委員長:須田信男様　(プロショップ信社長)・紺野文英 分校跡地　→　飯坂温泉　ホテル　「花の湯」一泊　　福島民報新聞掲載
2010	平成22年	10月24日	芋煮会開催　…　分校跡地 ・元営林署大滝担当官(通称林区様)石川智光様のご子息である石川淳一様ご家族が群馬県渋川市伊香保から参加された。
2011	平成23年	1月 30 日	大滝会　新年会開催　　飯坂温泉　「おおとり荘」
2011	**平成23年**	**3月 11 日**	**東日本大震災勃発　　福島原子力発電所1～3号機爆発し放射能汚染拡大**
2011	平成23年	5月3日	大滝会総会および観桜会実施　…　分校跡地 ・大滝会会長交代　紺野健吉会長退任し相談役に(93 歳)→第4代　木村義吉会長就任
2011	平成23年	9月4日	万世大路開通130周年記念フォーラム　事前勉強会　　於　:　飯坂学習センター ・大滝会員有志(木村会長・紺野相談役等10名)が、11 月 2 日にパネラーを務められる 鹿摩貞男様に大滝集落の歴史などをレクチャー。
2011	平成23年	10 月 1 日	＜万世大路開通130周年記念行事＞ 万世大路を歩く会　　旧栗子山隧道　(滝岩上橋～米沢側坑口までトレッキング) ・大滝会から6名参加　(木村義吉会長・渡辺正義副会長・柾木新吉会計幹事 ・渡辺光義幹事・伊藤弘治幹事・鹿摩貞男特別会員)
	平成23年	10 月 2 日	＜万世大路開通130周年記念行事＞ 万世大路開通130周年記念フォーラム 於　:　置賜総合文化センター　(米沢市内) 主催　:　山形県置賜総合支庁様 *万世大路開通は 1881 年(明治 14 年)10 月 3 日 ・鹿摩貞男様　(大滝会特別会員・万世大路研究会幹事)　がパネラーを務める。 大滝集落の盛衰と万世大路との関わりについて報告 ・大滝会から6名参加　(木村会長・渡辺副会長・柾木新吉会計幹事・渡辺光義幹事 ・伊藤弘治幹事・渡辺チヨ幹事) ・伊藤弘治幹事が「今後とも関係各団体と連携して行きたい」と発言。
2011	平成23年	10月16日	芋煮会開催　…　分校跡地
2012	平成24年	1月 29 日	大滝会　新年会「大滝会の集い」開催　　飯坂温泉　「葵館」
2012	平成24年	5月3日	大滝会総会および観桜会実施　…　分校跡地
2012	平成24年	6月	昭和20年(終戦の年)以来　66年ぶりに大滝で笹の花が咲いた
2012	平成24年	10月6日	万世大路が土木遺産に認定される ・大滝会の万世大路遊歩道建設計画は成らなかったが土木遺産に認定されたことで、 一応の区切りと考える。(万世大路研究会様の尽力大である) ・「万世大路」土木遺産認定フォーラム参加　(於:米沢市　山形県置賜総合支庁 2F 講堂) 主催:土木学会選奨土木遺産認定実行委員会 *木村会長以下大滝会員 10 名参加…木村会長が今後も大滝会として協力する旨発言。
2012	平成24年	10月14日	芋煮会開催　…　分校跡地
2013	平成25年	5月3日	望郷35周年記念「ふるさと大滝の集い」開催 ・第2回「大滝分校の集い」と共同開催　・大滝会総会も同時に執り行った 実行委員長:木村義吉様(第 4 代大滝会会長)・副委員長:須田信男様 分校跡地　→　飯坂温泉:伊勢屋旅館一泊　→　翌日茂庭ダム見学 ・分校跡地で使用する折り畳み式テーブルを遠藤工務店社長遠藤常男様が製作寄贈(10脚)
2013	平成25年	5月	福島民友新聞、福島民報新聞に旧大滝集落の記事が相次いで掲載さる
2013	平成25年	7月～8月	山神神社の鳥居の新築成る　大滝会有志 ・遠藤工務店社長　遠藤常男様(中野鉱山(通称 赤銅(あかがね))出身)より材料を無償提供戴く。 同社員山岸巌様(大滝出身)はじめ同店社員の皆様にもご尽力いただいた。
2013	平成25年	10月13日	芋煮会開催　…　分校跡地

2013	平成25年	10月26日	**「万世大路」土木遺産認定記念フォーラム開催**　　於：福島市　こむこむ ・主催　：　土木学会選奨土木遺産「万世大路」認定記念実行委員会 ・大滝会　木村義吉会長がパネラーとして参加。 大滝会から12名聴講参加
2013	平成25年	10月27日	**平成25年　大滝会秋季万世大路探訪会開催** 参加者　：　木村義吉会長、高野英治副会長、渡辺正義副会長、 渡辺光義幹事、鹿摩貞男特別会員・・・以上5名
2014	平成26年	1月26日	**平成26年　大滝会新年会開催　　於：飯坂温泉　伊勢屋旅館　　23名出席**
2014	平成26年	1月5日 ～ 2月11日	**福島県立図書館イベント『明治の大プロジェクト　万世大路』開催** **主催：東北地方整備局福島河川事務所　計画課様** **・パネル展示　1月5日(土)～2月11日(火)　於：県立図書館ロビー** **・福島を知る講座　1月25日(土)　於：県立図書館　第一研修室** 万世大路研究会幹事、大滝会特別会員　鹿摩貞男様が講師を務める 大滝会から木村会長以下10名が聴講参加した。
2014	平成26年	3月7日	**山形放送TVから取材を受けた** **於：福島市役所五月女会館（集会所）…　福島市沖高** 取材を受けた方々…大滝会会長　木村義吉様、　副会長　高野英治様 会計幹事　柾木新吉様、　特別会員　鹿摩貞男様
2014	平成26年	5月3日	**大滝会総会ならびに観桜会開催　・・・**　於：大滝分校跡地 ・北海道から柾木松美様、川崎市から須田勲様がご出席された。 ・大滝出身ではないが、こよなく山を愛する佐藤倍生様がHPを見て参加された。 （飯坂町の大鳥中学校出身で高野勝治さまの同級生）
2014	平成26年	10月12日	**芋煮会開催**　…　於：分校跡地　　**遠藤工務店様が神社の燭台を寄贈。**
2014	平成26年	11月2日	**平成26年度　大滝会秋季万世大路探訪会開催** 参加者：6名（木村義吉会長・渡辺正義副会長・渡辺光義役員・鹿摩貞男特別会員） （一般参加2名……ホームページを見て飛び入り参加）
2014	平成26年	11月8日 ～9日	**第9回　飯坂総合文化祭に万世大路と大滝関係のパネルを出展**　　於：飯坂学習センター ・大滝会と飯坂町史跡保存会が共同で出展 ・木村会長他、大滝会役員各位、特別会員鹿摩様
2015	平成27年	1月25日 ～26日	**大滝会新年会** 於　：飯坂温泉　みちのく荘（一泊） ・参加者　：20名
2015	平成27年	5月4日	**大滝会総会ならびに観桜会開催　・・・**　於：大滝分校跡地 ・参加者　：20名　（北海道から柾木松美様参加） ・今年は山桜の開花が10日ほど早く葉桜見学となった…初の経験
2015	平成27年	10月	**大滝会員　木村務様ご逝去　…　芋煮会中止となる**
2015	平成27年	11月7日 ～8日	**第10回　飯坂総合文化祭にパネル出展　…　テーマ「明治天皇と在りし日の大滝集落」** 於：飯坂学習センター ・木村会長他、大滝会役員各位、特別会員鹿摩様
2016	平成28年	1月27日	**大滝会新年会** 於　：飯坂温泉　摺上亭大鳥（一泊）
2016	平成28年	3月13日	**大滝会桜植樹** 於　：　旧大滝分校跡地および渡辺正義氏旧宅（明治天皇行在所記念碑碑）付近 参　加　者　：　木村会長、渡辺副会長、高野副会長、柾木会計幹事、山岸巌様 渡辺智様、齋藤正美様、渡辺和雄様、山岸福太郎様、渡辺光義様、 遠藤常男様（旧中野鉱山（通称あかがね）ご出身） **苗木提供　：　遠藤工務店社長　遠藤常男様(無償提供)** 桜の種類　：　染井吉野桜・関山桜（八重桜）…計16本
2016	平成28年	4月6日	**東北中央自動車道　栗子トンネル工事見学会参加　・・・　大滝会から14名参加** ・トンネルの長さ(8972m)にちなんだ8972人目の記念見学者に大滝会会長夫人が当選した。
2016	平成28年	5月3日	**大滝会総会・観桜会開催・・・・**於　：　大滝分校跡地　　出席　：　21名
2016	平成28年	10月9日	**大滝会芋煮会　天候不順（強風）のため飯坂学習センターにて開催　　20名出席**
2016	平成28年	11月12日 ～13日	**第11回　飯坂総合文化祭にパネル出展参加** 於：飯坂学習センター ・木村会長、高野英治副会長、柾木新吉会計役員兼副会長、伊藤弘治役員、渡辺光義役員、 鹿摩貞男特別会員。

2016	平成28年	11月26日 ～27日	第9回 福島市民文化祭に出展参加 於:福島市アクティブシニアセンター（AOZ アオウゼ） 木村義吉会長ほか、大滝会役員の皆様
2017	平成29年	1月22日	大滝会『新年の集い』開催 於:飯坂温泉 みちのく荘 参加者:19名
2017	平成29年	5月5日	大滝会総会ならびに観桜会開催 参加者:23名 於:大滝分校跡地 福島県庁国際部 国際交流員徐様(中国国籍)が特別参加
2017	平成29年	10月29日	大滝会芋煮会 飯坂学習センターにて開催 参加者:23名
2017	平成29年	11月11日 ～12日	第12回 飯坂総合文化祭にパネル出展参加 於:飯坂学習センター ・木村会長、高野副会長、柾木会計役員兼副会長、伊藤役員 他大滝会の皆さん 撮影報告:鹿摩貞男特別会員。
2018	平成30年	1月28日	大滝会『新年の集い』開催 於:飯坂温泉 摺上亭大鳥一泊 参加者:19名
2018	平成30年	5月20日	望郷大滝会40周年記念行事 「ふるさと大滝の集い」開催 （於:飯坂温泉 摺上亭大鳥）
			※これ以降の大滝会の活動は当ホームページの『大滝会の歩み』に記載している。

記:平成30年3月29日 紺野文英



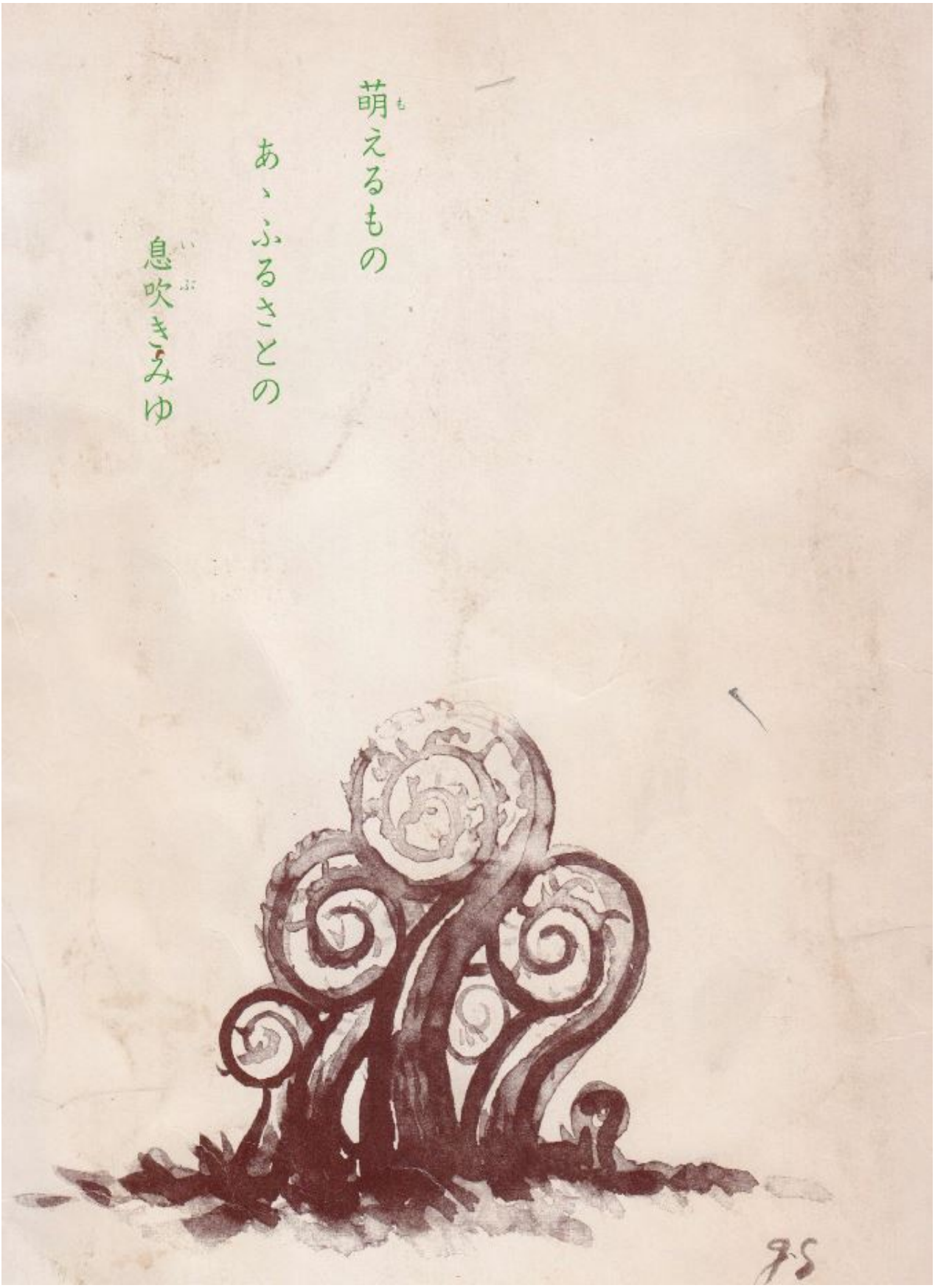
右の写真は芝居小屋 萬世座等に改装された S54年頃の太見家跡地
（ybcよりキャプチャー転載）

左写真…太見家の道路向かいに建つ須田辰雄家はS52年頃に食堂「大瀧屋」に改修された。
左隣は木村要吉家、須田家右は大滝分校新校舎入り口
福島中央テレビ社 S53年4月 発行「ふくしまの峠」より転載

萌(も)えるもの

あゝふるさとの

息吹(いぶ)きみゆ



完